

---

# 龍と書いてドラゴンと読む！

雨月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

龍と書いてドラゴンと読む！

### 【Nコード】

N5235C

### 【作者名】

雨月

### 【あらすじ】

少しばかり世の中を甘く見ていた少年はうまくいかない世の中に少々の不満を持っていたが、楽しく過ごしていた。しかし、とある存在との出会いで彼の考えは徐々に変わっていく・・・かもしれない。

## 第一話：鏡輔とシルバ

一、

世の中というものは意外と厳しいらしい。そんなことを知ったのは僕が高校一年生になってからである。さて、何でそんなことを言うかと聞かれたときに答えるべき言葉は以下のようになる。

いや、正直高校に入る前には青春というか、彼女の一人ぐらいで  
きるものかと思っていた。

以上のことである。

いまだに、できてはいないし、今のところ女子とは話をしていない。  
幼馴染が女の子だったらそりゃ、小さい頃から話せたのかもしれない  
いが、残念ながら僕が幼馴染は男だった。

ここであきらめてはいけないと僕は幼馴染に姉か妹がいないかと期  
待したのだが、いなかった。今のところ僕の記憶の中で犬に襲われ  
ている女の子を助けたとか男子にからかわれている女の子を助けた  
とかそういうことは一度も無い。あれば、お礼であったとしてもち  
よつとは『助けたのだからもしかしたら恋に発展するかも・・・』と  
いう考えを僕は一時の淡い期待をもつことができたかもしれない。

そんなこんなで気がつけば僕は高校二年生になっていた。今のと  
ころ、携帯の電話帳に性別女は母さんしかない。ああ、僕に妹で  
もいたらなあ・・・いや、それでは変態だな。

どこかに女の子が転がってないかな？

こんな考えをもちながら隣を歩いてくれる女の子もおらずに寂しく  
一人で帰路についていると誰もいない公園の前に差し掛かった。こ  
の公園はよく夜中にバイクをぶんぶんとばすお兄さん方が使用して  
いる公園だ。たまに、エロ本なんかを見ているようで忘れたのか捨  
てるに捨てられないのか公園のトイレなんかに置いていたりする。

「……今日はあるかも……」

そんな淡い期待とともに僕は男子トイレにまっしぐら……な、何……男子が男子トイレに行くことは別に間違っちゃいない。正しい行為なのだ。

「！」

鏡がおいてある近くに何か四角いものが入っているビニール袋を見つけた。どうやら、今日は当たりの日のようだ。今日はついている……と、集中していたのが間違いだっただのか知らないが突然、肩をたたかれた。

「……………」

もしかして、所持者が取りにやってきたのか……心の隅で考えながら僕は咳払いをして鏡を見て……絶句してしまった。

あんぎゃー

そこには、鱗が見事に輝いている蛇のようなトカゲのような……いや、一般的には龍というのだろう……存在が僕の肩に前足を置いていたのであった。

「……………」

未知との遭遇に驚く僕に対して、相手はいたって礼儀正しかった。まず、僕の視線が自分に向けられたのを知ると、僕に向かって頭を下げたのであった。そして、前足で胴の部分をさすっているようだ。このジェスチャーから示されるのは……

「…………おなか減ってるの……？」

頷く龍に僕は感心しながらかばんを探る。いやはや、女の子にはもてないが……そういえば小さい頃から犬とか猫とかからは人気があったな、僕そういえば小学校の間はずっと生物係だったな……別にうれしくは無いのだが……とりあえず、何か取り出そうとして食べ物が入っていないことに気がつく。

「……ごめん、何も持っていないんだ」

そういつと明らかに落胆した様子の白銀の龍はため息をついた。とても、いたたまれなくなった僕はあわててどうやら言葉を理解できる龍に話しかける。目を合わせるのは怖かったので背中の中の神々しい蒼色の毛に視線は送っている。

「ちよつと待つて！そこにスーパーがあるから・・・そうだなあ、龍って何を食べるのか知らないけど・・・何か買ってくるからね」  
僕は迷うことなくスーパーに向かったのだった。

男子トイレの前までやってきて、僕は再び考え直した。

「いや、そもそもなんで僕が見ず知らずで怪しい化け物の餌を買いに行かなきゃいけないんだ？」

そこまで考えて天秤にエロ本と袋に入っているプリンをかけてみる。結果、エロ本のほうが重かった。

「・・・まあ、プリンに比べたら高いんだろうけど・・・おなかいっぱいになったらなくなるよなあ？そうしたら、安全に拾って帰れるかな？」

さつさと終わらせて帰ろうと思い、僕はトイレの中にはいつて行儀よく待っていた龍にプリンを見せた。

龍はプリンを見たこと無いのか首をかしげたので（当然か）僕が三つ買ってきたうちの一つを自分の口の中に入れて食べて大丈夫だということを見せると納得したのか口をあけてきた。つまり、僕に食べさせるということである。なんと、ふてぶてしい龍なのだろうかと思っただが、前足はよくよくみれば怪我をしているようだ。体もところどころ鱗が剥がれていて段々衰弱しているのか辛そうにも見える。

「・・・気に入るかどうか知らないけどどうぞ、召し上がれ。」

まるでワニに餌を上げているような気分になったのだがその場合は鶏などだろうと思って考え直す。

あつという間にプリンを食べ終えて今度は僕の制服を啜える。  
「残念ながら、今ので全部だよ。」

てつきりご飯の催促かと思ったのだがどうやら違ったようだ。首をぶんぶん振って再び僕の制服を啜えて引っ張り始める。

「外？外に何かあるのか？」

外に出てみると特に何も無い。龍と一緒にいるところを誰かに見られたらどうしよう？ペットですといってつつじるのだろうか？

そこはかとなく不安な僕をよそに、龍は木の枝を口に啜えて地面に何かを書き始める。しかしまあ、器用な龍だ。

「・・・家・・・か？」

まるで絵本に出てきそうな家（煙突に窓が一つ・・・）を書いて僕に見せる。そして、次に鶴が恩返しをしている場面（機織り機を鶴が使用しているところ）をうまく書いて僕に見せる。この龍が言いたいことは・・・

「・・・恩返しがしたいから家に連れてってほしいって？」

頷く龍に僕は困った顔をするしかなかった。いや、女子より先に龍を家に入れるのはどうかと思うし・・・

「・・・まあ、今日は母さんと父さんが帰ってくるのが遅いから別にかまわないけど・・・龍の恩がえしねえ・・・期待していいのかな？」

じーっと龍のほうを見ているのだが龍は頷くこともなく僕の行動を待っていた。どうやら、だめだといってもついてくるに違いないだろう。

「こつちだよ。ついてきて」

まあ、エロ本は後で取ればいいし折角龍が恩返しをしてくれるというのだ。ここは素直につれて帰っても大丈夫だろう。そう思い、僕は家に龍をほかの人にばれないようにつれて帰ったのであった。

「ただいまあ。」

誰もいない家に一応、帰ったことを報告する。まあ、幽霊が誰かがいたら返事ぐらいは僕に聞こえないがしてくれるだろう。

僕は自分の部屋に白銀の龍を連れて行き、緑茶を出してみる。

「・・・粗茶ですけど・・・」

ぺこりとお辞儀をしてそのまま口をつけて器用に飲む。心温まる瞬間だなと思っていると龍はお茶を飲み終えたのだろうか？僕のベッドに上がると上から布団をかぶって動かなくなった。どうやら眠くなっただけだと思っただけで湯飲みをおぼんに入れて下に降りようとする・・・

「待つて！」

唐突に声が聞こえてきた・・・布団の中から・・・

「・・・なんだ、しゃべれるんなら初めからしゃべってくれよ・・・」

「そいつって僕は布団をはごうとしたのだが・・・いつの間にか一人ぐらいしか入っていないほどにしぼんだ布団は全く動かなかった。」

「い、今、裸だから・・・恥ずかしいです！」

「・・・裸も何も・・・僕は龍の裸なんかに興味ないよ」

龍の過激な写真集とか作ったら意外と売れるかもしれない。CGなしで作れるぞ、きつと。

「そうじゃなくて・・・私、今・・・人の姿をしてるの！」

「・・・ああ、そうなんだ。だったら引き止めなければよかったのに・・・」

そいつって再びおぼんを片手に僕は立ち去ろうとした。相手は龍だ・・・平静を保て、我が心よ・・・こういうときは冷静さを失ってはいけない。たとえ、龍に人権がなかつても、そういうこと（脳内にはモザイクがかかっています）はやってたらだめだ！

「ま、待つて！」

「また？これ以上はさすがに理性を保てないよ。用事は手短かにしてほしいんだけど・・・」

「わかってます！ちよつと目をつぶってください！ぜ、絶対に目をあけないで！」

言われたとおりに目を閉じると先ほどの龍はベッドから出てきた

らしい・・・

「！」

目を開けそうになって鶴の恩返しを思い出す。そう、ここで目を開けばあのおじいさんと同じになってしまつて恩が逃げてしまう・・・必死になつて目をつぶる僕の頬を白銀の龍の手がつかむ。龍自身が言つたとおりはその手はすでに人間のそれと大差は無かつた。僕の知っている手の中で一番のすべすべ感だ。

すりすりすりすり・・・

「あの、手をすりすりするのはやめてもらえませんか？」

「あ、ごめん」

手を放して僕は冷静であろうと試みる。

「痛いかもしれないけど・・・我慢してください。」

そういうと龍は右手を僕の頬から放して・・・

「あいたつ！」

首筋に何かが当たつて熱くなる。触つてみると何か液体のようなものが手に付着・・・簡単な考えだが、どうやらこの液体は僕の血のようだ。

「・・・契約完了・・・どうぞ、目を開けてください。」

目を開けるとそこには銀色の髪の毛を腰まで伸ばし、途中を蒼色のリボンでまとめている少女が僕の高校の女子生徒が着ている制服を着ていた。ぱつちりとした目がかわいいものだな。

「・・・あの、本当にさっきの龍？」

「ええ、そうです。鶴だつて人になれるんですから存在自体が神々しい龍が人になれるのは当然のことです。」

胸をそらしてそう告げるのは結構なのだが、とりあえず・・・

「何のために？別に龍の姿でもよかったんじゃないの？」

「いえ、やはり人間相手には人間の姿をして接しなさいとお父様とお母様が言っていましたので・・・さて、恩返しを始めますね。本



当はすでに恩返しを始めているんですけど・・・」

「あ、やっぱり恩返ししてくれるんだ？」

「当然ですよ。約束は守ります。」

しかし、いつこうに彼女が何かをしているようには見えなかった。

「・・・あの、何をするの？」

「ここに住みます。いわば、座敷わらしだと思ってください。」

「座敷わらし・・・？」

「ええ、いるだけでステータスの足しになると思います。」

いや、どちらかというといろいろと問題が生じると思いますが？

「・・・あの、つまりこの家に住むと？」

「ちよつと違いますね。私が住むべきところはあなたです。名前を教えてください。」

「・・・僕？僕の名前は・・・しろがわ きょうすけ白河 鏡輔・・・だけど？」

「なるほど・・・あ、ちなみに私の名前は“シルバ”です。これからよろしくお願いします。」

「あ、うん・・・こちらこそ・・・」

何かがおかしいと思いつながら僕も僕は流されるまま未知との遭遇シルバをしてしまったのであった。

「二人で寝るには少々、狭いですねこのベッド・・・」

「二人で寝る？」

「ええ、ほかに布団も見当たりませんし、この部屋は失礼ですけど少々散らかっていると思います。これから掃除をしますから鏡輔さんは掃除機を持ってきてくれませんか？」

「あ、うん。」

僕は掃除機を取りに行き、戻ってきてみると部屋はある程度すでに片付いていた。

「ざつとこんなもんですか」

「へえ、早いね？」

「得意ですからね、掃除・・・特に鱗の輝きを常に完璧に保つための掃除とかをやっていましたから」

そうなんだといいながら僕は掃除機を龍の少女に渡して自分はベ  
ッドの上からその様子を眺めていたのであった。

こうして、僕とシルバは出会ったのであった。だが、これがまだ  
まだ序の口だということを後に僕は知ることになる。

## 第一話：鏡輔とシルバ（後書き）

知っている方は知っていると思いますが、この小説は作者が以前に書いた小説の世界につながっていたりもします。荒唐無稽かもしれないですけど、これからこの小説が終わるまで、ともに歩んでいけたらいいなあと思っています。

## 第二話：鏡輔とダーク（前書き）

第二話です。いえ、特に何もありませんが・・・

## 第二話：鏡輔とダーク

二、

「え、彼女はこのクラスにいる白河の従妹だ。今日からこのクラスの一員になるからみんな、仲良くなるように」

クラスの男子や女子の両方から歓声上がる。

まあ、当然といえば当然かもしれないな。

僕の家に住むといった・・・シルバは何故か学校に転入していたのであった。

僕はそれを朝知っていたので問題は無いのだが・・・シルバが言うにはこれで僕の運が上がったらしい。朝から犬にまとわりつかれたりほかの犬が骨を持ってきたり、猫が僕の目の前で鰹節（塊）をおいていたり・・・それは確かに運があがったのかもしれないのだがそれはどうかと思う。僕としてはもうちょっと違う運がほしかった。

「・・・白河君、あの人本当にあなたの従妹？髪の毛の色が違うみたいけど・・・？」

このクラス一の無口な女子生徒が僕に話しかけてきた。これはこれで運がいいのだろうが・・・いや、運がいいのだろうか？早速シルバと僕の関係が怪しまれてるぞ？

「ええと・・・彼女、養子なんだって・・・その、小学校の頃にあつたぐらいでよくわからないんだ。ほら、よく知らない親戚だっているだろう？彼女がそうなんだ」

前々から考えていた言葉（当然、これは予期していたことだ。）をすらすらと出して彼女の抱いた疑問を消す。

「・・・養子？それなら龍なのも納得できるか・・・だが、どうやら先を越されてしまったようね。・・・ああ、いや、なんでもない独り言」

俺の視線に気がついたのかそういう彼女だったのだが、弁解する

ようにそういつて彼女はシルバのほうを再び見ている。興味があるようである。

「……ええと、白河　シルバです。漢字で書くと白羽と書くそうなので……これから、よろしくお願いしますね。」

彼女……シルバが言うには自分は運の塊（運固！？）だといっていた。彼女が僕と契約をしたということで僕に住んでいるらしい。「それじゃ、彼女はええと……鏡輔の席……」

ほら、やっぱり運がいい！これはクラスの女子と話すきっかけになるかもしれん！

「……の隣に座っている黒山の隣に座ってくれ。この前退学した奴の席だからもしかしたら机の中に何かが入っているかもしれないが気にしないで結構だ。」

いや、気にしたほうがいいでしょうって！

「はい！わかりました！」

いやいや、あんたもそのくらい気にしろよ！

隣を歩いていったシルバと目をあわすことも無く、僕はこちらを見ている黒山さんと話していた。これはこれで運がいいかもしれない。

「……ねえ、そういえばほかの男子はよく女子と話しているのに白河君は何で話してないの？」

「……気恥ずかしいって奴かな？」

「……そうなのか……」

「でも、黒山さんも男子と話してないような……」

彼女の場合は女子とも話をしていなかったような……

「……とりあえず、隣にやってきたあなたの従妹と親睦でも深めてみるか。」

どこが変わった口調の彼女はシルバの方に話しかけていた。

「……シルバさん、黒山　ダークといえます。」

黒山さんってそ、そんな名前だったの！？自己紹介のときはもつと別の名前を言っていたような……

「・・・見たところ、白銀の龍と思いますがどうでしょうか？」

「え、ええ・・・驚きました・・・ほかに私の仲間がいるなんて・・・」

「残念ながら、私はあなたを敵だと思っています。」

爆弾発言・・・というより、二人ともすでに授業が始まっているということに気がついていないのだろうか？周りから見たら非常識なことしか言っていないぞ？

「敵って・・・何故？」

「残念ながら、あなたが宿主としている彼・・・つまり、白河 鏡 輔君は私が先に眼をつけていた人間です。」

そ、それは驚いた・・・

「しかし・・・それなら先に契約をすればいいんじゃないんですか？」

「・・・いえ、それはできませんでした。それに、今日はじめて話しましたし・・・」

それは事実だ。この根暗な女の子と話したことはこれまで一度も無い。

「・・・何故、できなかったんですか？」

「・・・恥ずかしかったからです」

そうですか・・・そんなに恥ずかしかったんですかって・・・もう付き合ってられん。

彼女たちはその後も僕にはよくわからないことを話し合っており、そろそろ授業を聞かなくてはと思った僕はまじめに先生の授業を受けたのであった。

「やばい！もれる！」

あわてて男子トイレの個室に入って用を足す。家でやってくればよかったな。そろそろ出ようとして扉に手をかけると外から・・・コンコン・・・

ノックをする音が聞こえてきたのであった。当然、僕はすでに出

ることにしていたので

「えっと、今出ます。待っててください……」

扉を開けるとそこにはダークと名乗った女の子がたっていた。こ  
こは……男子トイレのはずだ。

「……黒山さん!？」

「……」

黙ったまま、僕を個室の中に押し戻して自分も入ってくる。何気  
に僕が通っている高校はトイレにお金をかけているらしく、『くつ  
ろげる空間を提供する!』というコンセプトのもとに個室は広い。

「……ど、どうしたの? ああ、女子のトイレ入れなかったの?」

「……違う……」

そのまま水洗トイレ(先ほどきちんと蓋をしていた。)に座らせ  
て彼女は僕の開いた股に体を割り込ませるようにして僕の目を見て  
くる。

「……私が思っているような人物ならば、耐えられる……は  
ず。だから、ごめん」

「え……」

そういつて彼女は爪で僕の首元を引っ掻いた。

「いたっ!」

「目、つぶって……」

逆らえないというか、なんというか……そのまま目を閉じた  
僕の首に誰かの唇が当たる。

「……」

「……終了したから目を開けていいぞ。」

そんなぶっきらぼうな言葉に従い、僕は目を開けた。そこには顔  
を真っ赤に染めた黒山さんの顔があった。手は僕の胸に添えられて  
おり、動けないような状態……

「……やっぱり、私の思ったとおりだな。先に詫びておこう・  
・これはちよつと危ないことだったのだ」

「はあ、わからないんだけど?」



「・・・まあ、いい・・・とりあえずこれで彼女と私は五分だ」

「？」

「さ、教室に戻るぞ。」

そういつて僕たちは普通にトイレから出てきたのだが残念なことにそこには女子生徒がいて僕たちを見て友達とひそひそ話をし始めたのであった。うう、なんだか不幸だ。

昼休み、シルバの周りには人だかりができており、僕は遠巻きに見ているぐらいしかできなかった。今、近くに居るのは黒山さんだけである。

「・・・人気だな、やはりそういう雰囲気があるのだろう」

「・・・なぜか、黒山さんのしゃべり口調が男みたいになっているけど？」

「・・・まず、話しかけるのなら同姓だと思えばいいのでは？と私なりに思ったからだ。それで、ある程度仲良くなったらそこから私は女口調に戻ろうと思う。」

「・・・そうなんだ」

「そうだ・・・ところで、これから一緒に屋上で弁当を食べないか？」

そういえば昼飯を食べていない。僕と黒山さんは弁当を所持して屋上に向かったのであった。

屋上は人気スポットの一つ・・・ではなく、そういえば本当は立ち入り禁止区域の一つである。ほかに立ち入り禁止区域はいろいろとあり、この高校には地下がある。普段は生徒だけでは立ち入ってはいけないところで・・・

「・・・では、ここでたべるとしよう。」

「そうだね。」

おっと、いけないいけない・・・せっかく女の子と食事できるんだ。これはこれで楽しんでおかないと・・・

「・・・やはり、白ご飯にはこのふりかけだな」

自作なのか知らないのだが、彼女はなにやらポケットから取り出してご飯の上に乗つける。僕はそれをまじまじと眺めていてなんなのだろうかと思った。

「・・・それ、何？」

「・・・まあ、宿主である鏡輔には教えないわけにはいかないな。これは、イモリの黒焼きの粉末だ」

「・・・そ、そうなんだ。黒山さんは・・・」

「鏡輔、私のことはダークと呼んでかまわない。いや、むしろそう呼んでほしいな」

「わ、わかったよ」

なんだか話をはぐらかされたような感じがするし、実のところ彼女は僕をからかっているのかもしれない。

「・・・ダークは本当に龍なの？」

「・・・シルバの姿を見たのに龍の存在を信じないのか？」

「そりゃ、シルバの姿は見たけど・・・」

「・・・私の龍の姿は見たことが無い・・・そういたいんだな？」

なんだか攻めるような口調なのだが、彼女は立ち上がった。気がつけば、彼女の弁当はにんじんをのこしてすべてなくなっていた。

どうやらにんじんが嫌いのようだ。

「・・・目を、つぶっていてくれ」

彼女はそういい、僕はそれに従う。

「まさか、こんなところではな・・・」

何かし始めたようで・・・僕の頭に何かがかかった。

「？」

そんな僕の肩に手がおかれる。どうやら、もういいらしい・・・それより、僕の頭にかかっているほのかに温かいこれは？

「うわっ！ブラジャー！？」

い、意外と大きい！・・・じゃなくて、僕の目の前には漆黒の龍がきちんといたのであった。その鋭い目つきは神々しくも恐ろしいものだった。人間の力が及ばない・・・そんなものをその目の奥に

持っているようだった。

あたりには下着やら制服が適当に落ちている。

「・・・ごめん、信じるよ」

わかればいいといったようにため息をついたのであった。僕は目を再び閉じる。途中、いまだに頭の上に乗っかっていたブラジャーが取られて残念だ・・・と、僕は何を思っているんだ！

「・・・もういいぞ」

許可をもらい、僕は目を開けた。そこにはちよつと顔を赤くしているダークがいたのだが、僕は話しかけることができなかった。

「・・・何も、感想は無いんだな？」

何も言わない僕に彼女は顔を赤くしたままそう尋ねてくる。

「あゝその、鱗がきれいだったよ」

「そ、そうか・・・そういわれるとうれしいものだな」

あまりよく見ていなかったのだがとりあえず褒めたほうがいいのだろうと思つて僕はそんなことを言つたのだがどうやらあたりだったようだ。

「・・・シルバは自分のことを運の塊（運固！？）だといつていたけど・・・やっぱりダークもそうなの？」

「私か？ そうだなあ、どちらかというと私は“-”のほうに力を与えているからな。私と契約してしまった人物は運がなくなるな」

「そ、そんな！」

僕はあわててダークに詰め寄るが彼女は冷静そのものだった。

「慌てるな。既にシルバさんと契約をしているのだろう？ 彼女が“

＋”で私が同等の力を持つ“-”だ。」

つまり、結果はゼロ・・・ということだろうか？

「それに、行き過ぎた運は逆に不運だ。鏡輔も何か迷惑・・・というより、変なことが無かったか？ 元から人間にもてるならばべたべた誰かがよつてきたり・・・」

犬と猫！？ あのことか！

「彼女とずっと契約していて女にもて始めれば見知らぬ女が嫉妬す

るぞ。そして、鏡輔は包丁で刺されて終わりだな。どうだ？運がもたらすものに不運だってあるんだ」

犬が骨をずつと持ってきて、猫がそれに対抗・・・嫉妬した犬は僕ののど元にがぶり？どうやら最悪の事態は僕の運が元に戻ったこととおさまったらしい。

「・・・私が鏡輔とこれまで契約しなかったのも同じ理由だ。私と契約したものは“-”の影響を強く受けてしまうからな。」  
「なるほど・・・」

その後、僕たち二人は昼休みが終わるまで青空の下、屋上で他愛のない話をしてすごしたのであった。しかし、話を聞けば彼女たちの体調で力は変わるらしいので気をつけよう。

## 第二話：鏡輔とダーク（後書き）

どうだったでしょうか？ご意見、ご要望、文句・・・随時募集中です。（できれば最後は勘弁してください。）面白かったのならばよかったですし、面白くなかったのならば、努力したいと思います。これからもがんばりますので、よろしくお願いします。

### 第三話：鏡輔とカオス（前書き）

さて、第三話です・・・いや、今回はきちんと考えました！第三の龍登場です！

### 第三話：鏡輔とカオス

三、

学校帰り、別にシルバと帰る必要は無かったのだが僕はシルバの隣を歩いていた。

「・・・鏡輔さんは浮気者ですね」

「浮気って・・・」

「普通、人間は運や力を求めるもので私たちのような存在とよく契約をしていました。だから、神様は怒って人間の体が一体までしか契約できないように体を弱くしたのです。ですが、世の中にはいろいろと例外があつて鏡輔さんもその一つみたいです。」

「例外？」

「ええ、誰も“-”の力を求めたりしませんからね。ですが、鏡輔さんは“-”の力を求めた・・・せつかく、私が運を強くしてあげたのに・・・」

でも、運は強くなると不運を呼ぶってダークが言っていたよと言おうとしてシルバはむっとしたような表情になる。

「・・・ちえ、先に私が契約したのに・・・鏡輔さんは強運をどぶに捨てましたね。まったく、馬鹿なことをしたものです。」

「そんなに怒らなくても・・・」

「不愉快ですから、私は先に帰ります！」

そういつて僕は置いていかれたのであつた。

「ねえねえ、母ちゃん・・・あの女の人、何であの男の人を置き去りにしたの？」

「あれはね、修羅場だったのよ。きっと、あの男の子がほかの女の子に手を出したに違いないわ」

「そうなんだあ」

「時雨君はそんなことしちゃだめよ？」

「うん！そんな八方美人な人間にはならないよ！」

ここにもどつやら見世物になってしまつようで僕は歩き始めた。

「はあ、やれやれ・・・」

一人で道を歩いていると・・・

「・・・・・・」

視界の端に見慣れない何かが映る。それは電柱だったのだが・・・なにやら電柱のしたあたりがぐにやりと曲がっている。

「？」

近づいてその電柱の捻じ曲がった部分に触れてみた。しかし、何かに触れたような感じは無く、僕の手はそのまま電柱の中に吸い込まれていった。

「!？」

慌てて取り出そうとしてもとることができない。もがけばもがくほど僕の腕・・・は電柱の中に引きずり込まれていくようだった。なんだか、とても情けないような感じだが、当人の僕は非常に怖い思いをしている。

「う、うわぁ!!」

「ほら、時雨君・・・見なさい、今度は電柱にちよつかいを出してゐるわ。」

「あ、本当だ!」

そんなことを言っていないで助けてほしい・・・急激に体を引っ張られるのを感じながら僕はそんなことを思っていたのであった。無論、体は完璧に引き込まれてそこには白と黒が混ざったような世界が広がっている。

大地は白く、空は真つ黒

「ここは？」

一歩踏み出すと、世界は反転・・・大地は黒く、空は白く染まる。  
「・・・・？」



歩くたびに反転するので気分が悪くなってきた。僕はその場に腰を下ろすとどうしたものかと考える。こういう不思議な世界にこそ、シルバとダークが助けに来てくれるのではないのだろうか？

そんなことを考えていると人影を見つけた。その人は黒と白の服・メイド服を着てこちらに歩いてきている。目の前までやってくると彼女は僕をまじまじと眺めている。

「・・・龍持ち？まさか・・・普通はこれないはずなのに・・・でも、仕方ないか・・・」

そういつて僕に頭を下げてくる。

「・・・突然の召喚、すみません。私はこの“混沌”の世界を治めている龍です。名前はそのまま“カオス”で構いません。この世界から出たいのですがお力を貸していただけないでしょうか？」

慇懃な態度である謎のメイドさんに僕はつい、うなずいてしまった。彼女はうれしそうな顔をする。

「・・・失敗したときはともにこの世界に飲まれてしまいますが・・・失礼します。」

お決まりとなったのか、僕は目をつぶった。しかし、予期していた痛みは訪れず・・・やわらかい何かが僕の首に当たっただけだった。

そんな僕の耳に驚いたような声が響き渡る。

「・・・こんな、そんな・・・初めて契約が成立するなんて・・・」

どうやら目を開けてもよさそうだったので目を開けると目の前のメイドさんは首をかしげているようだった。

「・・・どういう意味ですか？」

「・・・この世界から何度も脱出を図りましたが、私には無理なことでした。以前、この世界に来たとある・・・たぶん、あなたと同じ歳ですね・・・男の子は普通に帰っていったのですが、私を連れ出すことはできないようでした。でも、彼が言うにはきつと訪れるといってましたからね」

そついうと彼女の足元が崩れ始める。

「・・・大丈夫です、あなたがもといた場所・・・に行くだけです  
から」

瞬き一回の間に世界は崩れ、気がつけば電柱の前に立っていた。  
「ほら、つきました」

先ほどの出来事が嘘ではないことを証明するかのうちにそこには  
非日常的な存在のメイドさんが立っている。

「ええと、カオスさんでしたっけ？」

「そうです。何か？」

「何故、メイド服を？」

「・・・そのときやってきた男の子からこれをもらったんです。きつ  
と似合うだろうといわれましたからね。」

ええまあ、確かに似合いますって・・・いや、そういうことが問  
題じゃねえや。

「とりあえず、僕の家に来てくれませんか？龍のことぜんぜん理解  
できてませんからあなたのお仲間に聞きたいと思います」

「そうですか？それならお供したいと思います。あの世界から出し  
てくれたお礼として、一生尽くさせてもらいます」

その言葉に嘘は無いのだろう・・・目の置くには真剣そのものを  
しめす輝きがあった。ああ、これは願っても無いいいことなのに・・・  
なぜだろう？普通に考えたら意外とやばいことなんじゃないのだ  
ろうか？

「さ、そんな難しい顔をしないでください。」

「・・・とりあえず、聞きますけど・・・カオスさんって・・・」

「カオスで結構ですよ、ご主人様」

「・・・いやあ、照れるなあ・・・ってそうじゃなくて！カオスはや  
っぱり“+”とか“-”とか契約者に何か力を与えるの？」

「ええ、それはもう・・・」

頷くところを見るとそうなのだろうが・・・その顔は優れない。

ま、まさか・・・ダークと同じような感じなのか？つまり、僕の運  
は“-”側ということなのだろうか？

「そこまで話を知っているのならば別にかまいませんね。残念ながら私がご主人様に与える力はわからないのです。」

「・・・わからない？」

「ええ、“+”だったり“-”だったり・・・また、別のものだったりします。知っているのは風だけさあ・・・って感じですね。この世界や龍の世界に私の存在はイレギュラーなんです」

なるほど、この人の存在自体がまさしく混沌なのか・・・しかし、なんだか封印されていたようなボスキャラ的存在の彼女を普通に引っ張り出してきてよかったのだろうか？

そこは一物の不安を抱きながら僕は歩き出した。カオスは僕の後ろを追いかけてくる。

家についても母さんたちが帰ってくるには少々早すぎたようで鍵は開いていたが一階には誰もいなかった。だが、きちんと靴が二人分置かれていたということは最低、二人の人間が二階にいることなのだろう。

一人はシルバ・・・もう一人は・・・

「・・・やっぱり、ダークだったか」

「おじやましてるぞ、鏡輔・・・」

ダークはカオスのほうを見て驚いたような顔をする。

「きよ、鏡輔さん・・・その人は？」

当然のようにメイドを従えて帰ってた同居人を驚いた表情で見てくる。

「メイドですよ、龍のお二人さん？」

にこりと微笑むカオスにいまだに驚いているシルバとダークだったのだが、僕の襟をつかんでゆさゆさとし始める。

「どうということなんですか！また、龍をつれてくるし！話もきちんとしたでしょう！メイド？メイドがそんなにいいんですか！」

「むう、メイド属性なんかがいいのか・・・意外と鏡輔はマニアックなんだな。学校じゃ、静かなのに・・・意外とあれだな・・・私

もめがねをつけてみるか？」

「ほらほら、ご主人様が苦しんでいますから・・・シルバさん、放してあげたらどうですか？」

カオスにそういわれて僕が既に真っ白になっていることに気がつく。

「あ・・・」

「・・・」

手を離し、僕はそのまま地球の引力に引かれ

「・・・地球の引力に惹かれる奴が悪いのさ・・・ぐふう！」  
意識がなくなってしまったのであった。

目を覚ませばそこにはシルバの顔が・・・

「おはようございます、ご主人様」

「・・・おはよう、カオス」

まさしく、頭の中は混沌が支配している。そして、気がつけば今度はメイド服ではなく巫女服に変わったりしている。あ、巫女服もかわいいなあ・・・じゃなくて・・・

「・・・あの、その服は・・・？」

「これですか？可愛かったので以前私に会いに来てくれていた女性にもらったものです。本当に可愛いですよ、これ？ほかにいろいろともってますよ？」

ええ、それはぜひとも今度着て僕に見せてください・・・はっ！

殺気！？

「・・・起きたんですね？」

「あ、シルバ・・・」

そこには昔の不良の座り方をまねして改造制服とリーゼントのかつらをかぶったシルバとダークがいた。なぜか、ダークのほうは伊達めがねをかけている。

「・・・私たちも・・・コスプレをしてみました」

「・・・おどりゃ、なめとんのかコラ！」

この人たち・・・コスプレしてるの？目つきが悪いの素だろうか？

「・・・リーゼント、よく似合ってるね」

「・・・おどりゃこりゃ！見せもんちゃうぞ！ゴラァ！」

そういつて僕の胸倉をつかんでくるシルバ。迫真の演技ではなく、どうやらなりきっているようでとてもすさまじいメンチを僕にきつてきている。おいおい、絡まないでくれよ。

「・・・ダーク、とめてあげて・・・」

「・・・わかった。まあまあ、シルバさん、鏡輔が困ってますから・・・」

「・・・ちえ、のつてたのに・・・」

乗らないでほしい・・・悪乗りする性格なのか？ああ、以前にあった白銀の美しい龍は何処へ？あの礼儀正しくも可愛い女の子は？

「・・・ご主人様・・・」

「カオス、ちよつと待って・・・まず、“ご主人様”はやめて名前で呼んで」

「そうですよ、このパチモンメイドが・・・」

「そうですか、それなら鏡輔君！」

きよ、鏡輔君・・・その微笑み具合がなんとも・・・それになんだか、心に響くええ響きや・・・ああ、もつと言つてほしい！

「・・・鏡輔さん、鼻の下が伸びてますよ。みつともない・・・」

「・・・かまわないよ・・・ああ、僕は今とても幸せだ・・・」  
「く・・・」

「鏡輔君はこの人たちと暮らしているんですか？」

そういつて二人のほうを見ているカオス。それに対して僕はどうしたものだろうかと思いつながら答えた。

「いや、暮らしているって言うのかな？ダークのほうは別に家があるし・・・」

「それは大丈夫だ。ここにほれ・・・」

そういつてかばんを指差すダーク。

「・・・このように荷物を持ってきて引つ越してきたからな」

「そうなんだぁ・・・じゃなくて！」

「それなら、私が住んでもかまいませんよね？鏡輔君、これからは一緒ですよ」

うれしそうにそういうカオスを無下に扱うこともできずに僕はただ、黙っていた。

さてさて、これから僕がすべきことは一つ・・・この三人がこの家に住むようにと両親に頼み込むしかない・・・母さんは了解すると思うが・・・父さんは・・・どうだろう？

#### 第四話：対決！クリムゾン・デビル！（前書き）

8月20日 いや、今日も自分的には猛暑でした。猛暑だけでもうしょうがないってところですね・・・失礼しました！

#### 第四話：対決！クリムゾン・デビル！

四、

母さんが帰ってくるまで僕はおとなしく一階にいて部屋に座っていた。他の三人は二階で“龍同士の話し合い”をしているらしい。この話は人間が聞いてはいけないものらしく・・・聞いてしまった人間は頭の中をちくわみたいにしないといけないようになってしまうそう。どうかんがえても怪しいことこの上ないのだがどうせ、くだらない話だろう。

「ただいま。鏡輔、輝さんの姉さんと妹さんがきたからお茶を準備してくれない？」

そういつて僕の母さんが二人の女性を連れて僕のいる部屋に上がってくる。まさか、母さん以外もいるなんて・・・この状況ではちよつと無理だな。あきらめよう。

「・・・こんにちは、鏡輔君？」

「いやあ、大きくなったもんだね」

いや、以前にあつたことある人たちなのだが・・・この人たち、ふけないなあ？おつと、こんなことをしている場合ではない。母さんに頼まれたことがあつたのだ。

「・・・あの、碧さんに加奈さん・・・緑茶とコーヒーのどちらがいいですか？」

「あたしは何でもいいよ」

「私も・・・どちらでもいいです。輝君はいつごろ帰ってくるんですか？」

白衣に緑色の髪の毛の碧さんとツインテールで金髪に加奈さん・・・二人とも戸籍上では僕のおばなのだがどう見ても若い。

「・・・輝さんは今日早いそうです・・・ところで、鏡輔・・・お友達でも来てるの？お客様が来ているのならきちんと相手をしていないといけないわ」



そういつている葵母さんはエプロンをつけている。いや、母さん  
もどうやらこの二人の相手をするきがさらさらしないようなのだが？  
「・・・う、うん・・・」

「さ、ここはいいから・・・お茶さえ出してくれればお友達と遊ん  
できてかまわないからね」

僕はそういつてくる母さんに頷いてあっさりと二階に戻ってしま  
ったのだった。どうにも、葵母さんは苦手なのだが・・・

二階の扉を開けるとなぜか、そこには父さんがいた。

「・・・お、鏡輔か？」

「と、父さん！？」

「まったく、お前は両親のことを信じられないのか・・・というよ  
り、お前はお前で大変なんだろうな・・・これも運命だと思ってあ  
きらめろ。」

「う、運命！？」

なにやら事情を知ってそうな輝父さんに話を聞こうとすると父さ  
んは立ち上がった。他の三人はニコニコしながら僕を見ている。

「じゃ、がんばれ・・・と、そうだ！ばあちゃんがお前を呼んでた  
ぞ！」

「ば、ばあちゃん・・・」

僕のばあちゃんは恐ろしい。近くに家を構えており・・・そこは  
日本庭園が見れるところなのだが・・・鬼婆だ！こんなことを言え  
ば明日ぐらいに僕の体はぶつぎりにされておなべにはいつているだ  
ろうな。

「な、なんて？」

「・・・ふ、それは自分で言っただけ聞いてくるんだな。いやあ、俺も  
よく俺の母さんから無茶を言われたものだよ。看板をとって来いと  
かさ・・・」

看板を取ってくるって・・・どこの看板なんだろう？そのと  
ころが気になるが・・・聞かないほうがいいのかもしれないなあ。

出て行った父さんの代わりに僕は父さんが座っていた場所に座る。  
「いいお父さんですね？あつさと私たちがここに住むことを許可してくれましたよ？」

「うーん、確かに・・・なんだか、裏がありそうな気がしてきたよ」  
「・・・本当に変わった父親だ。なんだか、普通の人間じゃない気がしたぞ？まったく隙が無いって言うか・・・」

「まあ、輝君はそうでしょうねえ。やつぱり成長はしてますけど中身は変わってないようです」

「！？カオスは輝父さんのことを知っているの？」

「さあ、それはどうでしょう？それより、鏡輔君はあなたのおばあさまからお呼びがかかっているんじゃないんですか？」

「そういえば・・・ごめん、ちよつと待ってて！すぐそこなんだ！」  
僕は三人に言って待ってもらうことにした。途中、談笑が聞こえてくる前を通る。

「しかし、本当に鏡輔君は輝君にそっくりですね」

「どうかなあ、俺が思うに俺のじいちゃんに似ているような・・・」

「まあ、いいじゃない。元気な証拠だと思っわ」

「そうですよ、輝さんのおじいちゃんはとても元気な人です」

そんな声が聞こえてきたのであった。

ばあちゃんの家の前に立つと必ず、足が震えてまっすぐ立つことができない。これは幼少の頃からここで僕が育ったからだろう・・・詳しく言うなら毎日が修行だった。何でも、その昔はぶいぶい言わせていたらしいばあちゃんは僕に格闘技を教えたいといったらしく、僕の両親はあつさとそれを承諾・・・理由は『強くなってほしいから』だったそうだ。

「・・・ばあちゃん？鏡輔だけど・・・」

震える足を叱咤して、僕は手に汗握るRPGのラスボスへと赴く勇者の心境だった。

「・・・鏡輔か・・・」

扉を開けて中に入ると広い庭に腕を組んで立っている一人の老婆がいた。いや、老婆といえないほど若いのだが・・・老婆は老婆だ。戸籍上僕のおばあさんであるのであればあなのだ。

「・・・毎日、あちらに住んでいても修行はしていたんだろうね？」  
「と、当然であります！」

敬礼する手にも汗が・・・ばあちゃんの元を離れても毎日毎日、町の不良などを使って練習してきた。顔がばれるとやばいのでみかんのネットやパンストをかぶって戦ったこともある。

「・・・じゃ、今日で最後の締めだ・・・こいつを倒してみな」

そういつて池のほうを指差す・・・別に何もいなかった。

「・・・河童でもでてきて相撲でもするんですか？」

「・・・まあ、見てろ」

指を鳴らすと・・・地響きがしてくる。そして、僕の目の前にありえないものが出てきた。

「・・・お化けザリガニ!?」

そう、そこには人間の二倍はあろうかという化け物ザリガニが池から出てきているところだったのだ。

「・・・あの、そんな化け物・・・どうしたんですか？」

「これか？これは葵が碧のもっていた薬品を借りて加奈と一緒に作り出したザリガニだ。名前は“クリムゾン・デビル”だ。」

た、確かに見上げるようなこの大きさと意外と怖い顔つきのザリガニは悪魔だ。それに、液体の効果なのか知らないが・・・甲羅は色むらがあつて一部分は異常に紅い。その部分を見れば返り血を浴びてるんじゃないかと思う。

がああああああ・・・

ザ、ザリガニが、吼えた!?生まれて初めて吼えるザリガニを見つけたよ・・・こいつは煮干やかえるじゃつれない代物だ・・・

というより、こんなのと戦って勝てるわけが無い！

「ば、ばあちゃん！僕がこいつに勝てるはずが無いよ！」

「そうか？輝は似たような奴を過去に倒したぞ・・・葵が倒したそれを食べてたなあ。」

うちの家族は化け物家族　しかし僕だけ真人間　こんな化け物倒せませえん

ザリガニがその大きなはさみを僕に向かって振り落とす。あまりの速さに僕は何もできないで・・・基本であるずっと目を開けていることしかできなかった。体はまったく動かない・・・未知なる遭遇、こいつを学会に発表したかった・・・

死を覚悟した僕の目の前に銀色の髪の毛が視界いっぱい広がる。

「きよ、鏡輔さん・・・大丈夫ですか？」

「シルバ！」

そこには両腕で化け物ザリガニのはさみを防いでいるシルバの姿があった。気がつけば僕はしりもちをついている。

「・・・これ、なんですか！」

「ザリガニ・・・」

「見ればわかりますけど・・・ザリガニはもうちょっと小さいと思います！」

「僕もそう思うよ！」

「とりあえず・・・」

そういつてザリガニのはさみを押し戻したシルバは僕をつかんで距離をとる。

「・・・倒します！」

「うん、そうしよう！じゃ、僕はこれで・・・」

逃げようとする僕の首筋をシルバがつかむ。

「あなたのお父さんから聞きましたよ！なよつとしている割には喧嘩強いそうじゃないですか？」

「正直言っけど、そりゃ、他人に比べたら強いと思うよ？だけど、あの化け物は洒落にならない！」

言い争っている僕らに迫る“クリムゾン・ナイト”。足がしゃしゃか動いていて気持ち悪い。

「・・・くそあ！こうなったら玉砕だあ！！」

僕は無策に突っ込むことにした。とりあえず、目に付いた奴の触覚を引きちぎる・・・と、相手は怒り狂ったのか知らないが再び僕にはさみを振り落としてくる。

「させません！」

シルバがそれを防ぎ・・・僕は相手の目にこぶしを叩きつける。

シルバが抑えているはさみの間接部分に向かってけりを入れると・・・あっさりと腕が取れてしまった。もう片方のはさみの間接にもけりを入れて切断・・・相手は動かなくなった。

「・・・終わったようだね。思ったより遅かったじゃないか」

ザリガニは池のほうに逃げていき、姿を消す。今後二度と、あの池には近づくまい。近づけば今度はまた違うものが出てくるに違いないだろうからだ。

「・・・シルバ、助かったよ。」

「・・・契約上、仕方ないですからね。それに、あなたを助ければまた、私の力も強くなりますから・・・」

「・・・ふうん、また変なのを連れ込んだんだねえ。まったく、輝といい鏡輔といい・・・節操の無いといつかなんといつか・・・よし！」

ばあちゃんは一人で何やらかつぶやいていると急に声を出した。

「・・・この付近には不思議なほど道場があるのは知っているだろう？」

それは知っている・・・よく、ばあちゃんのとこに挨拶に来ていたりするからなあ。そのおかげで知り合いが増えたぐらいだ・・・まあ、男の知り合いは別に必要ないんだけどね。

「・・・知ってるよ？それがどうかしたの？」

「・・・お前、道場破りしてきて看板もってこい」

「な、なんだってえ！？」

「何人連れて行ってもかまわないよ。ま、輝の息子だ・・・他にも変なのがいるんだろう？」

なにやら核心をついてくるばあちゃんに言い返せないでいると僕たちに背中を見せる・・・と、そこへシルバが踊りかかった。

「シルバ！」

「・・・さすがに変なのとは聞きづてなりません！」

彼女が怒るのは勝手なのだが・・・ばあちゃんに手だけは出してはいけない・・・ばあちゃんは強い・・・

僕が断言したとおり、シルバの右手をなんと、後ろから押さえ込んでいる。

「はっ！」

「まあ、やっぱり青二才だね」

シルバが気がついたときにはばあちゃんはシルバの背後を取っている。いつの間に・・・とっていたのだろうか？小さい頃から思うのだがばあちゃんは人間ではないのでは？

「・・・そ、そんな・・・」

「・・・鏡輔、この娘はちょっとだけ鍛えておいてやるよ。ほら、ついてきな」

「そ、そんなあ・・・助けて！鏡輔さん！」

「いまさら可愛い声出したってだめだよ」

そういつてずりずりとつれていくシルバに十字を切って僕は

「さすが、僕の運を高めてくれるシルバだ。僕の身代わりになってくれた」と思つてばあちゃんの家を後にしたのであった。

「・・・あ、鏡輔か・・・今、シルバさんの悲鳴が聞こえなかったか？」

「・・・まあ、シルバにはかわいそうだけど自業自得だよ。とりあえず、ばあちゃんからちよつと頼まれことがあつてさ・・・」

ダークも龍なら強いだろう・・・名前がかっこいいから強いに違いない。

「・・・ほお、おつかいか？」

「ちょっと違うと思うけど・・・ついてきてくれないかな？どうにも、僕だけじゃ不安で・・・」

「了解した。それならば早めに終わらせたほうがいいだろうな。」

「うん、ありがとう。」

僕はダークを連れて悲鳴が聞こえてくるばあちゃん宅から離れたのであった。無論、近くには自分たちも被害をこうむるからでもある。

まあ、そんな感じで僕の生活は崩れ始めていたのかもしれない。よくよく、思えばあんな馬鹿でかいザリガニが存在するのだ・・・他にもいると思うべきだった。

#### 第四話：対決！クリムゾン・デビル！（後書き）

さてさて、今回の話では知っている人は知っている・・・知らない人は知らない人物たちが出てきました。それで、ザリガニ・・・これも知っている人は知っているんじゃないかと思えます。まあ、彼女たちは龍ですが今回出てきた人たちの足元にも及びません。さて、次回はダークと鏡輔の道場破りと鏡輔の親友を出していきたいと思っています。そういえば、主人公の親友ってどこかおかしい連中がおいですね？



第五話：あいつの道場と鶏の化け物と・・・（前書き）

小説を読むときは部屋を明るくして期待を胸に・・・呼んでください。

## 第五話：あいつの道場と鶏の化け物と・・・

五、

何故、僕がばあちゃんに頼まれごとをされたのかダークに詳しく話し、ふむとうなずきながら聞いていたダークは驚いていたのだからとまあ承諾してくれたので心強かった。

風吹く街路地・・・僕とダークは適当に看板のかかっている道場らしきものの中に入る。

「・・・『萌え萌えH道場』か・・・鏡輔、お前の趣味が大体わかって気がしたぞ。やはり、マニアックだな」

「気のせいだよ・・・さ、行こう・・・」

手をとって僕は道場を開ける。すんなりと扉は開いた。

「たのもう！」

きつと、お約束の言葉に違いない。これは言っておくべきなのだろうと思って僕は恥ずかしながらも声を張る。

「・・・お、ようやく門下生ができるのかって・・・鏡輔かよ・・・」

「

「弘樹!？」

僕の親友吉崎 弘樹。僕にいろいろと教えてくれた幼馴染（年齢一つ上）である。

「・・・お、ついに彼女ができたのか？だが、この道場は彼女もちの奴を入れるほど甘くないんだ。悪いが、帰ってくれ。めがねの彼女は高ポイント・・・鏡輔、お前でなかったら今頃縄でつるしていたぜ？」

かっこいいのに、もてない。ここ、一番でへまをする。そんな僕の幼馴染は彼女ができたりできなかったり・・・とても不安定な人物でもある。

「鏡輔、覚えているだろうな？第一に！ギャルゲーでCG集めをするな！好みの彼女を狙い撃ち！一人攻略したらそのゲームは二度と

するな！その思い出は自分の胸にそつと・・・しまっておけ！」

肌にびりびりと震えるこの恐怖感・・・これぞ、弘樹である。ああ、なるほど・・・きつと看板の“H”は弘樹のHだな。発音は

「エツチ」ではなく

「エイチ」だろう。

「・・・鏡輔、この人は・・・ものすごい信念を持っているんだな。私だったらもつたいたいから全員攻略するぞ？CG集めるならもちろん、先にBADENDのCGを集めるな・・・それは何故かって？そりゃ、後から幸せになったほうがいいんじゃないか？」

「・・・ダーク、意外とマニアックで君も信念を持っているんだね」

「ほお、さすが鏡輔のめがね彼女・・・おぬしも信念を持っているのだな？」

その反応に胸をそらすダーク。

「もちろんだ！私はまず真つ先にメガネっ子を攻略する！それは何故か・・・メガネの凄さを知っているからだ！」

おいおい、BADENDを初めは狙うといっていなかったのだから？僕の知っている二人が僕の知らない何かを話しているようで少しばかり気味が悪い。ちなみに、僕もそういうゲームを試みたのだが八方美人な選択ばかりしていたので泥沼化・・・なんだか、釈然としないまま一番高感度高かった人とノーマルENDで終わってしまった。その後、僕はそのゲームを弘樹に返した。なんとなく悔しかったのだがやめておいた。

「・・・ほほう、なかなかやるな・・・」

何がなかなかやるのか、僕には理解できないし理解もしたくはない。そうだなあ、そろそろ僕は看板だけもらって帰るとするかな？二人が気がつかないうちにそつと持って帰れば問題ないのだろうが・・・ピンクで書かれているこの看板を持って帰るのは正直、どうかと思うな・・・やっぱ、何か布でもかけて持って帰るかな？

「・・・だが、俺も負けてはいない！一人の意中を決めればただ、

まっしぐらなのだ！間違つて意中の彼女に冷たい言葉をかけて失敗しても俺は・・・俺はリセットしない！」

「・・・やるな・・・だが、私だつてそうだ。間違つて他の娘と結ばれた場合は二度と！そのゲームが起動することはないだろう！私なら新しくそのゲームを買ってくる！そして、その娘専用のソフトにしてやる！」

馬鹿らしくなってきた・・・まあ、話がわかる連中ならそうなのだろうが・・・そろそろ、夕飯ができている頃合なのではないだろうか？

「・・・く・・・やるな・・・」

「さらに！私は一度電源を入れればどんなゲームでもぶっ続けでやり通す！攻略記事？それは他人のレールなのだ！私は私の道を貫き通す！彼女は一人だけ・・・たしかに、記事は参考になるがそれはまだ考えが甘い！出直して来い！」

「く、くそお！覚えてやがれ！」

そういつて道場を出て行つたこの道場の所持者でありながら僕の幼馴染に僕たちは・・・勝つたのだろうか・・・なんだかとても・・・馬鹿らしい気分である。

「・・・すつきりした・・・だが、あんな猛者を見たのは初めてだ」

「うん、僕も君みたいな人を見たのは初めてだよ」

「さあ、言われたとおり看板をもつて帰ろうではないか？」

「・・・そうだね、そうしようか・・・」

馬鹿らしくも思いつながら看板をはずす。そして、その看板をダークが握つたのであつた。

「・・・ふ、いい勝負だつたぞヒラキ！」

かつこよく決めているつもりかもしれないのだが残念ながら彼は弘樹である。

「きつと、ヒラキはもつと凄い“漢”に成長して帰ってくるだろう」

「そうかな？途中でくじけるかもよ？」

「・・・そのときは鏡輔を一人前に育ててやろう。私のコレクション

ンを今度見せるから安心しろ」

意外な一面を見てしまった気がして僕の心の中でのダークの像が崩れていくような気がしてならない。

「・・・さて、これから帰るのだろう？ 続きは明日でかまわないだろう？」

「うん、そうだね、今日は帰ることにしようよ？ 明日だって学校があるし・・・」

「そうだな、私はお風呂に入りたい」

汗だくだくのダークのそこだけ見ればかっこいいのだが・・・先ほどの論争を知っている僕にはあまりいい印象ではなかった。

看板をばあちゃんの家置いてきて（縛られていたシルバを救出できた。）・・・僕とダークとシルバ（記憶が混乱しているようだ。）は無事帰宅・・・待っていたカオスとともに意外と大きい風呂場に龍三匹は直行したのだった。実は、僕も直行しようとしたのだが母さんにつかまれてしまった。

「・・・鏡輔には話があるわ」

「・・・そうだよ、さすがにこれはやばいよね・・・」

猫のようにつかまれてしまい、向かった先は畳しか敷かれていない部屋である。その部屋は何かあったときの家族会議の場で使用される。しかし、僕に関係することは大抵、怒られることがほとんどなので僕には恐怖の部屋でもある。

「・・・とりあえず、義母さんに事情は聞いてあの子達のお世話をしたいんだけど・・・鏡輔、悪いけど私と輝さんは旅に出るわ」「旅？」

「ええ、そうよ・・・ちょっと、お母さんが若い頃に羽目はずしすぎてね・・・巨大なザリガニを育て上げてしまったの！」

薬漬けで作り上げたのは知っているのだが・・・どうやらそれは違うようだ。

「・・・討伐してくるわ！」

「は？」

「討伐よ！そのために碧さんと加奈ちゃんには来てもらったの！あの二人、ああ見えても強いのよ！私だって腕が鳴るわ！」

よくよくみれば母さんの口からよだれが出ているのはばあちゃんがいってたとおり倒したザリガニの味を想像しているからだろうか？そんなに、ザリガニっておいしいのだろうか？

「・・・後のことは一人息子の鏡輔に任せるわ！義母さんも来てくれるから安心してね？」

「・・・う、うん」

非常に不安だ。逆にいないほうが安心できるかもしれないなあ。

まあ、そんなことを言ったら命がいくつあっても足りないような気がする。

「・・・襲っちゃだめよ？」

「誰を？」

「あの三人」

「・・・しないしない」

「そう、それならいいわ」

そういつて母さんは釣竿をもって出て行った。徒歩で出かけていったので別に外国なんかに行くみたいではないようだ。徒歩じゃ何年かかるかわからないし・・・。

「いつてらっしゃーい・・・」

徒歩で移動することにそこはかとなく不安を覚えた僕は両親を見送った後、風呂からあがってきた三人と夕食をとることにした。

「・・・なるほど、だからあつさりと承諾してくださったんですね。それなら、鏡輔さんのご両親が帰ってくるまで家事を分担しましょう！」

「まあ、そういうことかな？」

「・・・私は一人暮らしだから料理ぐらいはできるぞ。料理は任せとおけ」

「それなら頼むよ、ダーク」

「じゃ、私は部屋のお掃除をがんばりますね」

「うん、カオスに掃除はお願いするよ」

「じゃ、私は洗濯物を担当します」

「がんばって、シルバ・・・じゃ、僕は何をしようかな？」

さて、僕だけ何もしないというのはどうだろうか？さすがに、お客様であるほかの三人だけに任せるわけにはいかないだろ。

「あゝそうだなあ、僕は・・・」

考えていると急に庭先から何か音がしてきた。

「ちよつと、行ってくるね」

庭先に行くと馬鹿でかいザリガニと鶏が合体したような化け物があった。とさかの部分に人が乗っている・・・どうやら、ばあちゃんのようなのだ。

「こいつを倒してみろ、鏡輔！手段は問わんぞ！」

「・・・僕の係りは誰かと協力してあれを倒すことにしたいと思う」

「名案ですね・・・」

「・・・そうだな、がんばれ」

「がんばってくださいね？」

「・・・カオス、手伝って」

僕はそういつて一番近くにいたカオスの手を引っ張る。

「積極的な鏡輔君もいいですね」

「冗談言ってる場合じゃないって！ほら、行くよ！」

カオスとともに謎の生物に立ち向かう僕・・・十七歳とカオス・

・・・年齢不詳。

「・・・ばあちゃん、これもザリガニの派生？」

「そうじゃ、名前は“クリムゾン・デビル・セカンド”ということにしてくれ。」

ばあちゃんはしゅばつと飛び降りて去って行った・・・そして、この家はほとんど庭がないから・・・馬鹿でかい何かであるこの物体が動けないでいるようだ。

「・・・カオス、そろそろおなか減ってきたからこの化け物をさっ

さと倒そうよ？」

「そうですね、任せてください・・・」

カオスがそういつて相手に向かっていく・・・と、彼女の姿がぶれてなにやら白黒のカオスが二体、三体・・・と増えていく。

「・・・お風呂はいったからあまり汗かきたくないんですけどね・・・でもこれで、終わりですよ」

合計五体ほどのカオスが“クリムゾン・デビル・セカンド”に襲い掛かっていく・・・と、白黒のカオスたちは相手に引つ付いたままだった。

「カオス、分身らしき人たちが動いてないけど？」

「・・・着火！」

いつの間にか手にしていたなぞのスイッチを親指で“ポチッ”と押したのであった・・・その結果、白黒のカオスたちは次々に爆発していったのであった・・・見ているこっちはその光景に目を開いてしまう・・・いや、正直いつてこれはとても危ない技なのではないだろうか？

相手の肉片が転がっており、これは・・・ちよつと掃除が大変そうだしすばやく片付けないと近隣の住宅トラブルに発展しそうである。モザイクがかかっている・・・

「・・・どうです？目標は倒せましたよ」

「・・・そうだね、さすがに今のはやりすぎだと思っけど僕の出る幕もなかったよ」

「掃除、よろしくお願いしますね、カオスさん」

「・・・じゃ、私も先に室内に戻ってるからな、鏡輔」

「うん、掃除がんばってねカオス」

そういつて僕はシルバ、ダークを見習つて後片付けもせずに家に入ろうとしてカオスにつかまれる。

「どこに行くんですか？」

「そりゃ、お部屋に・・・」

「だめですよ。鏡輔君にも片付けは手伝ってもらいます。私の担当



は室内ですから屋外ではありません」

「そ、そんなぁ・・・で、でも・・・」

「でもモテムありません！ほら、はやく終わらせましょう」

箒とちりと、ゴム手袋を装備して僕ら二人は無駄に散らばったザリガニと鶏の破片を片付け始めたのであった。やれやれ、困ったものだ・・・

「・・・カオス、この鶏の部分だけ食べられないかな？」

「どうでしょうか・・・ためしにあの二人に食べさせてみましょう？」

「いや、さすがにそれはばれると思うよ・・・やっぱ、やめとこうか？」

次の日の朝、ダークが約束どおり料理の担当をしてくれていた。死なばもろとも・・・さすがに二人だけに食べさせるのは引けたので・・・僕以外（僕の分もあるのだが、口に含んだだけ）の胃袋が頑丈そうな三人に上げた結果、彼女たちは学校を休んだ。

## 第五話：あいつの道場と鶏の化け物と・・・（後書き）

さて、約束していたとおり鏡輔の友達を登場させました。せっかく登場してくれた彼ですが、今後の登場は未定です。次回はおなかを下した三人の出番は少ないです。最後に・・・この小説を見て腹痛をおこしてしまった人はなにか一言お願いします。（将来的にはこの小説を読んだ人たちがすべてを腹痛にしたいと思っています。）

第六話：恋文？ 幽霊？ 謎の少女？（前編）

六、

出会って間もないのに、あの三人がいないと心さびしいと思うのは、僕の勝手だ。だが、世の中にはそういうことが必然と起きるようになってきているのだろう。今日は彼女たちは腹痛で休み・・・まあ、僕もそのお仲間になることができたのだが・・・あんな苦しそうな顔を見ると自分が卑怯であつたのを誰が責めようか？まあ、家に帰ったらあの三人に（実力で）攻められそうだ・・・

放課後、シルバたちが学校を休んでしまっているの僕は一人で帰るために下足箱に向かつていた。教室を出るのが遅かつたためか、先ほど女子生徒が一人ばかり脇を走っていったきりで誰とも会っていない。

「・・・はあ、一人はやっぱ寂しいもんだな」

自分の下足箱を確認して扉を開けると・・・一つの封筒が落ちてきた。

「？」

拾い上げてみると、

「田中 弘樹君へ（はあと）」という文字が目についた。どうやら、弘樹宛のラブレターのようなのだ。

「・・・僕は自分の下足箱に入っていたゴミをゴミ箱に持っていたただけだ・・・別に、悔しくなんてない！悔しくなんてないからな！」

捨てようとしたらその封筒に重なっていたのか知らないが、もう一つ封筒を発見した。

「ちくしょー！僕をそこまで悲しませたいのかよお！どうせ僕にラブレターが来たことなんて一度もないさ！」

どこのどいつだろうかと名前を見ると、そこには

「白河 鏡輔さんへ」と書かれていた。これは……これは……

「僕宛だ！僕宛だ！でも……これはもしかしたら誰かのいたずらかもしれないな。この封筒のとおりに進んだら意外と不良に出くわすかもしれないし……」

あけるべきかどうか考えるべきなのだろうが、僕は……別に不良なんてどうでもよかったのであけることにした。

「……午後七時この学校の屋上に必ず一人できてください。待ってます……こいつは来たぜ！」

僕はそのまま、足取り軽く……弘樹の下駄箱に彼宛の手紙を突っ込んで屋上へ颯爽と駆けていったのであった。ふ、小さな幸せのおすそわけさ。やっぱり、他人のラブレターを捨てたりしたらだめだよ。それは、彼女ができない奴の鬱憤晴らしさ……

屋上、夜空に輝く星たちを眺めていると背後で音がした。高鳴る僕の心と汗の吹き出てくる手……振る向く僕の視線……そして、目の前に木刀を持っている少女……？

「……来てくれたんですね、先輩」

「……君がラブレターをくれたの？」

「ラブレター？それは……何かの間違いでは……？」

そういわれ、僕は再び手紙のほうを読んでみる。

「……果し合いをしたいので午後七時この学校の屋上に必ず一人きてください。待ってます……」

どうやら、前の部分を読むのを忘れていたようだ。なんて、間抜けな勘違いだろうか……よし、今から弘樹のぶんのラブレターを破ってこよう！これが一番の鬱憤晴らしになることに違いない。くく……あんな野郎に彼女はもつたいない！

「……どこに行くんですか、先輩？」

「何って……鬱憤晴らし？残念ながら僕は女の子と拳について語り合いたいんじゃないじゃなくて愛を語り合いたいんだ。だから、他の暇そ

うな改造制服や奇抜な髪型をしているお兄さん方と遊んでほしいね  
じゃ、ばいばい」

そういつて彼女の隣を横切ろうとすると彼女の木刀が僕の首を狙  
ってくる。

「・・・な、なんてことするんだ！」

僕はぎりぎりでその攻撃をよけ、バックステップ。彼女も同じよ  
うに僕から距離をとっているのだが、僕を逃がさないようにするた  
めか・・・屋上の扉に立っていた。

「・・・先輩、逃げるなんて普通はしませんよ。それに、私はあな  
たを・・・」

彼女は少しだけ背を低くして腰の部分に刀を当て、目を閉じて右  
手を高らかに掲げる・・・何かのおまじないであろうか？

「・・・『奥義 霧潰し』・・・」

「・・・！？」

辺りに霧が立ち込めていき・・・そのまま僕の視界は霧でいつぱ  
いとなった。そこまで離れていないはずの彼女の姿も見えなくなる  
でもまあ、名前がそのままの奥義でひねりがないもんだな・・・と  
いったらきつと怒るに違いない。

「・・・先輩、これで逃げる事ができなくなりましたね・・・  
まじめにやってほしいものです」

四方八方から相手である謎の少女の声が聞こえてくる。どれも耳  
に残るようでとても気持ち悪いもので冗談だと思ったのだが・・・  
何かに見られている視線もまちがいに感じるので相手は本気だと  
いうことだ。

「・・・だが、甘い！そんなことで僕の鬱憤晴らしを邪魔できると  
思うなよ！」

僕は屋上の端が見えてくるまで駆け出した。目の前に彼女がいな  
いことを祈りながら・・・そして、屋上の端まで来るとそこに結ば  
れている緊急用のロープを掴んで一気にしたに降りる・・・が、途  
中でロープがすばりと切れていた。

「うおっ！」

屋上から彼女の言葉が聞こえてくる。

「……途中から今、切りました。これ以上逃げようとするのならここから切らせてもらいますよ？」

僕は隣の窓の鍵が開いていることを確かめ、あわてて誰もいない教室に逃げ込む。

「冗談じゃない！こんなところでやられてたまるかああ！」

「く……まだ逃げますか！」

そのまま教室を脱出し、かばんを屋上に忘れたことを後悔しながらも目指すは下足箱……ではなく……とりあえず隠れることができる場所だ。ここにいてはいずれ居場所がばれてしまう。

廊下を全速力で駆け巡りながら隠れる場所をリストアップ。この付近にはあまり隠れる場所がないが……

「……ここは男子トイレに隠れたほうがいいか？いや、男子トイレではばれるだろうな……ならば、女子トイレだ！」

そのままトイレへと向かい、普段入ったら間違はなく生徒指導室という牢獄に連れて行かれる禁断の場所へと僕は入ったのであった。

「一、二、三……よし、ここは一番奥で三番目のトイレをチョイスだ」

そして、いわくがありそうな個室へと入った。別に何かいると聞いたことがないし、確認したこともないトイレへとはいってとりあえず誰かやってこないだろうかと耳をそばだてる……

コツ……コツ……

どうやら、追跡者がやってきたようだ……あの凄腕の女の子が音をたてるだろうか？少しばかり疑問に思った僕だったが、こちらには音を立てないように細心の注意を払って再び耳をそばだてる。

コツ・コツ・コツ……

女子トイレに間違えることなくやってきたらしく相手はすこしばかり歩調を速めたようだ。

ここで飛び出したら間違はなく切り捨てられるに違いない……だ

が、相手はそのまま僕のいるトイレを通過していき・・・僕から見  
て右のほう・・・四番目のトイレの扉を開けたようだ・・・四番  
目？確か、三番目のトイレに入る前にこのトイレは三個までしかな  
かったような気がするんだけど・・・ま、まさか・・・

「・・・ここじゃない・・・」  
「・・・」

恨めしそうな声が僕の耳にこだまする。どうやら、あの子ではな  
い『何か』が僕を探しに来たようだ・・・しかも、四番目から探し  
ている・・・出るなら今のうち・・・だけど、廊下であの女の子に  
出くわしたら切り捨てられるかも・・・

コツ・コツ・コツ・・・

いや、正直言つてこれは洒落にならん・・・この高校に何も怖  
い話がないとは言いい切れないし・・・いや、確か聞いたことがあ  
る！そう、確か名前は・・・『ないはずの南棟の二階女子トイレ四  
番目の幽霊』という少しばかり名前の長い怪談だったと思う。

そういえば、この高校には七つ以上の『七不思議』があるんだっ  
たかなって・・・そこは今のところ関係ないな、うん。

話の内容はどこにでもあるような話だったな。

『四番目のトイレは実は、幽霊がいるから姿を見せることがない。

だが、この空間に元来、あつてはならないことがおきるとその幽霊  
がそのトイレを開放する・・・』というものだった。意外とこの手  
の話を忘れやすいのは僕がそういうのが苦手だからだろうか？まあ、  
それはいいとして『元来あつてはならないこと』とは・・・つまり、  
『女子トイレに男子が入る』ことだったのではないだろうか？  
コツ・・・

僕の入っているトイレの前で何かが止まる・・・これは正直言っ  
て見ることもできないので・・・僕は天を仰ぎ・・・喜んだ。なぜな  
ら、隣のトイレに移動できるスペースがどうやらこのトイレにはあ  
るみたいだからだ。そう、そこから先ほどまで幽霊がいたトイレに  
向かえばもしかしたら助かるんじゃないかと思ったからである。

僕は迷わず実行した。両手を急いで壁に引つ掛けて普段は存在しないトイレに侵入！！

「・・・あれ？」

うまくトイレに降り立つことができたと思ったらそこは校庭であった。女子トイレではないし、夜空には月が僕を照らしている。

「・・・どうやら、うまく脱出できたようだ・・・」

命があることに感謝しないと・・・と思いながら僕は上履きのまま家を目指してランニングを始めたのであった。

次の日、シルバ、ダークと一緒に学校に登校していたのであった。

「・・・私たちが休んでいる間にそんなことがあったんですね」

「・・・まあ、それも私たちにあんな化け物の肉を食べさせた鏡輔が悪いんだろうがな」

「確かに、罰が当たっていても過言じゃないような・・・あれは本当に、こわかった。夢にも出てきたからね・・・」

そんな話をしながら僕たちは学校の門をくぐっていったのだが・

「・・・でも、それが実は鏡輔さんの見ていた幻覚だった・・・ということだったらどうするんですか？」

「・・・え、僕の言ったことが信じられないの？確かに体験しなかったらシルバは・・・」

「いえ、そういうことを言ったんじゃないんですよ・・・ええとですね・・・」

頭の中で言葉をまとめようとしているかのように見える仕草をとってシルバは口を開いた。

「・・・鏡輔さんが霧を相手にかけられた・・・といってましたね

？」

「うん」

「そのときに相手が何かしらの術を使ったとしたらどうでしょうか？」



それならば、僕は無駄に怖い思いをしたということになる。

「・・・嘘・・・でも、僕が走ったのを証明する上履きという証拠だってあるし、それはどうかな・・・」

「・・・いえ、幻覚といつても鏡輔さんを徹底的に怖がらせて何かしらしようとしたのでしよう・・・ですが、鏡輔さんは相手が思いもしない行動をとった結果・・・助かったということですよ」

とりあえずあいての術を破ったということなのだろう・・・しかし・・・なんだか納得いかないな・・・

そう思っていたのがばれたのか知らないが、ダークは僕を見て安心させるようにこういったのであった。

「・・・まあ、鏡輔ならひっかかりそうだろうけどなあ・・・とりあえず、鏡輔が無事にその幻覚から抜け出してきたんだろう？それなら今のところは大丈夫なんじゃないか？」

気休めかもしれないが今はそれで十分だろう・・・これ以上、少しばかりはやり怪談を体験したくない。

「・・・もしかして、その木刀持った少女のほうがお化けだったりして・・・」

「え・・・」

「どんな服着てました？」

「・・・そういえば、依然この高校で着ていた制服だったような・・・」

「そのときに剣道部に所属していた女の子の幽霊に違いありませんよ！」

嬉々として持論を展開しているシルバだったのだが、僕のほうはそうとは思えなかった。

「・・・シルバさん、それはどうかと私は思いますよ・・・」

どうやらダークもその考えに待ったをかけたようだ。これが、常識人の考えなのではないだろうか？

「・・・きつと、居合い部の部長の幽霊に決まっています・・・」

どうやら、僕だけが常識人のようだ・・・まず、居合い部なんて

聞いたことがないぞ。

「えゝきつと剣道部ですよ。」

「いえ、居合い部に違いありません。」

どこを根拠にそう話しているのか知らないが・・・僕はそれ以上くだらない話をしている二人に付き合っているほど暇ではなかった。

放課後、今日もわけあって一人で下足箱にやってきた。自分の下足箱を開けるとそこには・・・封筒が再びおいてあった。

「・・・まさかね・・・」

心の中で祈りながらも封筒を開けると・・・『屋上で待つてます。ちなみに、私はゆうれいではありません』とだけ書かれていたのであった。

幽霊ならば怖くない僕は・・・昨日のお返しをしたいがために今日も一人で屋上へと向かっていったのであった。正直、あんな少女に馬鹿にされたという心が少しだけ、あった。

第六話：恋文？ 幽霊？ 謎の少女？（前編）（後書き）

第六話・・・となりました。この話ではお化けっぽいものが登場していましたが・・・その部分を書いていると背筋に何か冷たいものはあったような気がしました。まあ、気のせいであると信じましょう！ちよつと話は変わりますが・・・この作品が面白いのもうちよつと続けてほしいと思っている方はぜひ、評価してください。読んでくれる方がいるならば続けていきたいのですが・・・それ次第です。もし、終わっちゃった場合は『人類の・・・』を連載したいと思っています。では、こんなわがままな作者ですが今後とも、よろしく願いします。

第七話：恋文？ 幽霊？ 謎の少女？（後編）

七、

屋上にて、僕は校庭を去っていく生徒たちを見ていた。そろそろ、夕日が僕の目に映らなくなってしまう。これから後の戦いのために僕は気合を入れるため、口を開き・・・

「・・・かかってこいやあ！」

と心の中で叫んだのであった。別に、意味はない。相手もいないのにこんなことをいつていたら少ばかり頭がおかしいと思われたってしょうがないかもしれないのだが・・・まあ、いいだろう。だって、声に出して叫んだわけじゃないんだもん！

夜空は果てなく、僕の頭上に広がっている。暗闇を彩るためか、空にはきらきら光るお星様が・・・いや、そんなロマンチック？名ことを言っている場合ではないな。

「・・・先輩、今日もきちんと来てくれましたか・・・」

振り替えればそこには木刀と竹刀を腰に差している少女が昨日と同じように立っていた。その目は真剣そのもの・・・まあ、そういう僕も今日は真剣にやりたいと思う。

「・・・最初に教えてくれないかな？僕を何でここに呼んだのかを・・・」

そう尋ねる僕に、月明かりに照らされた少女は薄く笑ったのであった。

「・・・簡単なことですよ。私は強い人と戦いたいただけなんです・・・」

「それだけ？」

「ええ、それだけです。私のモットーはどのような卑怯な手を使っても獲物は倒せばそれだけでいい・・・武士道というものには反するかもしれませんが、残念ながら私は武士ではありません・・・」

大体、このようなことをする気にはなりませんでした。私は……

「……あなたの実力を知りたいんですよ。三匹の龍を従えているところを見ると相当の腕を持っているに違いないと私は睨んでいるということです……」

木刀の切っ先がまっすぐと僕の喉を狙っている。あんなものを当てられたら一撃であの世に逝ってしまうに違いない。真剣に戦うと誓ったのだが……ここは逃げの一手でがんばりたいと思います。

「……霧月きりづき 霧仔きりこ……またの名をミスト……参ります！」

彼女の周りに霧が発生し、僕へと向かってくる……それに對して、僕は……

「……まず、霧が人間の体から発生すること自体、おかしいな……」

冷静に判断し……目前に迫る霧仔の攻撃をあわててよけた。手にする獲物は木刀で、素手の僕よりはるかにリーチが長い。さらに、辺りは昨日ほどではないが霧がたちこめている。相手との距離をとりすぎると姿を確認すること自体が不可能となってしまう。

「……ううん、どうしたもんだろ……」

「考える時間なんて与えませんよ！勝負は迷ったら負け……」

屋上にある転落防止用の柵を駆け上がり、相手は僕の頭上からスカートを惜しげもなく翻して……木刀を突き刺すように……落ちてきた。

「……くそつたれえ！」

それに対して思いついたことは一つだけ……真剣白刃取りである。いや、木刀にもこの名前を使用していいかどうか悩むのだが、そこは何とかなるに違いない。

どすっ！！

「……」

僕は木刀の切っ先を受け取ることなく……かといって、自分の体を貫いている木刀を見るでもなく、目の前に突き刺さった木刀を眺めていた。それは、見事にコンクリートを貫通している。相手は使えなくなってしまった木刀に未練がないのか、あつという間に僕から離れる。ちらちら見えるパンツに誘惑されながらも僕は相手と再び向かい合う。

「……外してしまいましたか……やはり、人型では少しばかり長期戦はきついですね……こうも、避けられてしまうとは思いませんでした」

腕に自信がある人たちの戦いでは少しのミスだけで勝敗が決定してしまう。まさに、

「刹那の刻」といったものだろう。

「……魅せてあげましょう、私の真の実力を！」

気張る僕に対して彼女は腰に刺さっている竹刀を抜き、地面に突き刺す。さて、どんなマジックだろうか……突き刺さったそこから、あたりを白く染めている霧とは比べ物にならないほどの濃密の霧がすべてを多い尽くす……

「……」

別に何かをするでもなく、僕は呆けたように相手を見ていた。

があああああああ！

何者かの心の叫び？が僕の鼓膜を響かせる。

そして、ある程度霧が晴れたところで相手がいるところを見ると……そこには大きな龍が僕を見下ろしていたのであった。目は紅く、白くばやけている鱗……そして、白い毛……その目は獲物を捕らえる獣のようであった……いや、正直言つて勝てる気がしません。今すぐここで白旗あげて屋上から逃げ出したいと思つてます。

「……かといって、逃げさせてくれないんだろうなあ……畜生！爬虫類っぽい奴に負けてたまるかあ！」

僕は鋭く相手を見据えると……そのまま突撃していったのであった。

朝日が目にしみる……気がつけば、朝になつてゐるし……「……すー……すー……」

隣にはぼろぼろの学生服を着ているミストが静かな寝息をたてながら寝ていた。

あの後、僕も我を失い……大暴れ……ではなく、僕は正気を保つて戦つていた。

攻撃をするのは容易なことではなく……避けてばかりだったのだが……なんとか、あの面に一発……（転がつていたコンクリの塊や突き刺さっている木刀を引き抜いて投げたりした。）以上拳を叩き込んでやった。わはは、正直言つてこのまま保健室に行きたいや……そして、そのまま寝たいや……

「しかしまあ、四匹目の龍が姿を現すなんてねえ……想像もできなかったよ」

誰に言うでもなく、僕は一人でつぶやいていた。目の前には竹刀が突き刺さっている。

「……そういえば、今日は休みだったな。それなら、このまま帰つても罰は当たらないだろうし……」

そこまで独り言を続けていると……

「ん……」

隣の少女が目を覚ましたようだった。

「……」

「……やあ、おはよう」

顔を近づけてにこりと笑うと、僕の顔に張り手が……飛んできた。

「……………」

「……先輩！寝ている私の寝顔を見た挙句に欲情して襲い掛かりましたね！」

「誤解です……僕は健全です……」

あまりよくないほうに吹っ飛びそうな意識をなんとかつなぎ止めながら僕は彼女に誤解であることを告げる。

「……違うんだ……」

「本当ですか？」

「うん、本当……」

彼女の大きな瞳が僕の目を見据え、その目に僕の顔が映っている。

「……どうやら本当のようですね。信じてあげますよ」

はいはい、その目が僕をまったく信じていないということを僕は信じてあげましょう。さて、いつまでもこんなところにいることはできないなあ……

「ミスト、もう用事は済んだだろ？」

「……え……」

「僕と真剣勝負したかったんだろ？」

「あ、ああ……そうです。どうやら私は負けてしまったようです  
ね」

悲しそうにそういつているのだが、実際のところ何度も死ぬかもしれないとこっちは思ったのだ。実力は五分……つまり、今回は運が勝負を分けたに違いない。

「まあ、また何か鬱憤を晴らしたくなったら僕を呼んだら？君のような女の子に手合いを頼まれたらうれしいからさ……」

「先輩……先輩ってその……」

少しばかり恥ずかしそうにもじもじしながらこっちを見てくる。その行動に僕は何かを期待している……のだが、どうなのだろうか？

ひとしきり彼女がぐねぐねしたところ、ようやく決心したのかどうか知らないが、僕の目をひたと見据えてきた。



「・・・い、痛いのが好きな変態さんですか？」

「違うわあ！俺の趣味はお前さんのようなペタン娘さんじゃないわい！不愉快じゃ！わしゃ、帰る！」

僕はそういつて・・・再び、屋上から脱出用に使用されているロープを掴んで・・・

「うわああああ・・・」

情けない声を響かせることとなったのであった。自分の言動に反省する自分であった。

週の初め、月曜日・・・充分に休養できたと考えることにしよう・・・とりあえず、学校というものは私事をはさんではいけないのではないかと僕は思う。だから、今日だってまじめにやってきた。心の中は雨ザーザーだけだね。

「・・・はあ、朝っぱらから大変だなあ」

「鏡輔さん、疲れているようですけど・・・あの女の子・・・また出ましたか？」

「そうだぞ、鏡輔・・・私たちにそこを教えなくても罰は当たらないだろう？」

「あゝそうだなあ、あれから会ってないけど？」

僕は彼女たちに再びあったことを伝えていない。彼女は確かに龍だったのだが、僕とは・・・契約をしていない。だから、彼女たちに教えるつもりもないし・・・また、厄介ごとに巻き込まれてしまったら大変だ。それに、そのときに他の三人に迷惑をかけたらいけないからなあ。

「・・・そういえば、カオスってさあ・・・他の世界にいたのに・・・なんでこの世界に詳しかったんだろ？」

「それはまあ、彼女がやってきてすぐに私たち二人が教えたりしましたからね。鏡輔さんが寝ているときにも私たち二人で教えてあげたんです」

そういつて自慢そうに言っているシルバと少しばかり暗い雰囲気

のダーク。どうやら心配事があるようだ。

「・・・きつと、また鏡輔はトラブルに巻き込まれるんだろうな。私はがんばってそれを回避しようとはしたんだが・・・すまん、鏡輔・・・」

「・・・はあ、何かまた・・・気をつけておかないといけないのかな？」

そんなことを考えて今日も僕らは学校の始まりである・・・校門をくぐる。既に桜の季節は終わり、新緑の萌える季節である。そろそろテスト勉強を始めないと赤店を取ってしま可能性大・・・だろうなあ。」

朝から暗澹たる気持ちの僕とは裏腹に元気そうな？二人を横目で追いながら下足箱を開ける。

ばさり・・・

床に何かが落ちたのに気がつき、僕はそれを拾い上げた。

「・・・はあ、またか・・・」

まさか、朝から来るとは思わなかった。しかも、相手は・・・やっぱりミストだ。彼女の日本語名？である霧仔で呼んだほうがいいのかわからないが・・・とりあえず彼女からの手紙はろくなことがないに決まっているし・・・

「・・・時間帯指定・・・今すぐ!？」

手紙内容は『この手紙を見てすぐに屋上に来てください』というものだった。つまり、彼女はまだ僕に用事があるようで・・・

「・・・シルバ、ダーク・・・悪いけど僕はトイレにいつてくるよ」「トイレ？」

「・・・大か？」

「・・・中・・・かな？」

不思議そうな顔をする二人を置き去りに・・・颯爽と、僕は屋上へと向かったのであった。もちろん、彼女に何か鬱憤がたまった

ら呼んでいいといったのは確かだがこんなにすぐに呼び出されるとはまったく思っていなかった。

屋上、朝からいる奴はひとりもない。

「はぁ．．．はぁ．．．早すぎたのか？」

「．．．遅すぎです、先輩」

背後から姿を現したミストに驚きながらも．．．僕は息を整えてひそかに体を動かせるように準備運動を始める。

「．．．今日はなんのようかな？」

「．．．そんなに構えなくてもいいですよ。別に．．．今日は決闘を挑みに来たんじゃないやありません．．．安心してください」

そう言われて．．．僕は安心して深呼吸をしたのだが．．．それが甘かったのかもしれない。

首に何かの感触．．．驚いて目を開くとそこには顔を真っ赤にしたミストの顔があった。そして、僕の目の前からまるでライオンにあったかのようなシマウマのように去っていった。

一人、屋上で立ち尽くしていた僕はそろそろ授業が始まる時間帯だということにあわてて気がつき、教室へと向かったのであった。だが、これは始まりでしかなかった。

第七話：恋文？ 幽霊？ 謎の少女？（後編）（後書き）

とうとう、四匹目の龍の登場・・・となっていました。正直なところ三匹で押し通すところだったんですけどね。えゝ急遽思い立った企画？ですが、ここでは評価してくださった方に対してお礼の言葉を述べさせてもらいたいと思います・・・いいのかな？えっと、不便だとかやめてほしいとか思った人はいつでも言うてください。すぐにやめます。『第一回目：評価してくれたタンポポさんへ』という題名でいきたいと思います。恥ずかしながら持てる言葉をもつてしても「ありがとうございます！これからもよろしく願います！」としか言いようがありません（今後、誰かが評価してくれたらなんていおうかな？）。とりあえず、他の読者の方々もこれからよろしく願います！僕はこのまま続投することにします！

## 第八話：変なことに巻き込まれる鏡輔

八、

放課後、僕は一人で教室に残っていた。別に何かあるでもないし・  
・・ただ、なんとなく暇だったからだ。まあ、暇なら勉強でもし  
ているという話だが・・・他の人たちはどこかに行ってしまったの  
だろうか？僕が視線を動かす先に誰かがいるということもない。

「・・・そろそろ、帰ろうかな？」

「おいおい、一人でそんな風に教室でつぶやいていると危ない人だ  
と思われるぞ、鏡輔」

声のしたほう・・・掃除用具のほうを見ると、掃除用具が開いて  
中から父さんが現れた。

「・・・父さん・・・」

「よ、久しぶりだな。ちょっと、時間ができてお前の様子を見てこ  
ようと思ってきたただけだ。悪いが、この状況を詳しく話せるほど俺  
は暇じゃないんだ」

父さんは近くの机に座る。そういえば、父さんはこの学校の保健  
室の主でもあった気がする・・・しかし、それが掃除箱からの登  
場という意味不明なことに繋がるだろうか？

「父さん、保健室に行かなくていいの？」

「・・・ああ、そうだったな・・・だが、代わりがいるし、俺が今首  
を突っ込んでいることは校長からの要請でもあるからなあ。そのこ  
ろは校長が何とかするだろう」

そういつて父さんは僕の顔をまじまじと眺めて眉をしかめる。

「・・・俺としては正直言ってお前に危ないような真似させたくな  
かったんだけどなあ・・・これも、関わったらずっと続いていくん  
だろうなあ・・・まあ、いいや。鏡輔、家に帰ったら俺の部屋の机  
にあるノートを見てろ。それで大体のことがわかるんじゃないかと  
思う。あれは俺なりの研究結果という奴だ」

そういつて父さんは手を振りながら掃除用具入れに帰っていった。こういうところが本当に僕の父親なのか信じられない。父さんが消えて、今までそのことを言わずに黙っていた僕はその不思議な掃除用具を開けてみたのだが・普通の掃除用具は普通のままだった。

「・・・まあ、しょうがないかな？」

一人で掃除用具の前に立っているとシルバがやってきた。

「・・・鏡輔さん、なにしているんですか？」

「え・・・ああ、これね・・・これは・・・まあ、用具入れの片づけだよ」

「へえ、がんばりますねえ・・・そろそろ帰りませんか？」

これ以上変なこと（もしかしたら黒板がいきなり開閉して母さんが現れるかもしれない）が起きないように僕はシルバと共に鞆を取って教室を後にしたのであった。

「鏡輔・・・あら、どうやら出遅れちゃったみたいね」

と、母さんが誰かの机から出てきたという話は後で聞いた話だ。

ダークは既に帰っているようで・・・僕はシルバと二人で一緒に帰っていた。

「・・・へえ、そうなんですか！」

「・・・うん、しょうがないけど・・・そうなんだ・・・」

普通の話しながら僕達はそのまま家に帰りつく。いいにおいがしているところを見るとダークが料理をしているようだった。

「・・・ふむ、今日はなかなかいいスープができそうだぞ。鏡輔、お前は早く手を洗って来い。カオスさんは既に準備完了だ」

「早くしてくださいね。あんまり遅いと鏡輔君を食べますよ」

「・・・わかった、手早く済ませてくるよ」

「・・・それも大事だが、きちんと洗ってこいよ？腹痛はもうかンべんしてくれ」

微妙にこの前のことを引きずっているのか知らないがそんなこと

をいいながらダークは僕に告げたのであった。

「シルバ、僕は先に荷物を置いてくるから鞆貸して？おいてくるからさ」

「そうですか？すみません」

渡された鞆が異様に重いことを気にしながら僕はそのまま二階の部屋へと上がっていった。

「ふう、ここにおけばいいよなあ・・・でも、さすがに三人でこの部屋一つって言うのは・・・やっぱり狭いかな？」

いつの間にか僕の部屋は僕を含めて四人の共同部屋となってしまうている。それぞれの趣味のものが気がつけばあふれている。シルバは花、ダークはマニアックなもの、カオスは伝統工芸品を集めまくっている。ここにはあの本を置けないし・・・かといって誰かと相部屋のままもいろいろとやばい。

「・・・ここはやっぱり男の僕がどいたほうがいいかな？」

これが一番の得策だろうと思って僕は立ち上がってその話をするために下に降りたのであった。

「・・・ごちそうさま・・・」

食後、テレビを見ながらゆったりしていた三人に僕は部屋のことを提案することにした。

「・・・急遽、会議を開きたいと思います・・・」

「会議・・・ですか？」

「ふむ、議題は何だ？」

「面白そうですね」

三者三様の賛成意見に僕は咳払いをひとつ・・・

「・・・部屋が狭くなってきたから僕は隣の部屋に移動します」  
そういつとつとつと唸る三人。

「・・・隣は誰の部屋でしたっけ？」

「確か、空室だったな」

「でも、今のままでいいんじゃないんですか？」

「「うんうん」」

うなずく二人と僕が移動することに反対しているような感じを見せる力オス。

「狭いのなら部屋を掃除すればいいんですよ！皆さんは変なものを集めすぎだと私は思いますけど？」

「む、それは聞き捨てなりません・・・悪いですけど、花よりまとかも・・・」

あれはどうかと思うけどなあと思いながら僕は黙っていた。

「・・・私の漆塗りは捨てませんよ。あと、こけしも捨てません」  
そんなことを言っている彼女たちに僕は一つの提案を思いついて早速提案してみた。

「・・・あのさあ、あの部屋は勉強と寝室にして・・・当然、僕は別の部屋で寝るけど・・・そっちの空室のほうにみんなの大切にしているものを置いたらどうかな？」

結果として、その案は賛成され、僕は自分の分の荷物を置いて今度は父さんが言っていたことを思い出した。

部屋に入り、机の上に置かれていた一冊のノートを手にする。

「・・・『ザリガニの育て方』・・・いや、これじゃないな、こっちだな」

僕の手には古ぼけた一冊のノートが収まっていた。題名は『龍について』と書かれている。この本がふざけた内容でなければ、父さんは龍の存在を知っているということである。

「・・・俺なりに手に入れた情報や爺さんから聞いた話（一部、嘘だと思われる。）をまとめると、この世界に存在している龍はおのおの力の象徴だという結果にたどり着く。龍から人へと姿を変えるのはそちらのほうが力の配給率が高くなるらしく、龍の状態から人型へとなったときに余った分は見えない力として蓄積される。つまり、巨大な龍が子供へと姿を変えればその分、見えない力は強大となるのである・・・」



そのノートにはそんな感じに書かれていたのだった・・・

「・・・あとは、爺さんに聞けばわかるだろう・・・じいさんに会いに行くには・・・」

爺さん？ああ、父さんにとってのお爺さんがいまだに生きていたなんてぜんぜん知らなかったなあ・・・意外と、長寿かもしれない・・・天国あたりにいけば会えることができるだろう」

前言撤回、父さんの爺ちゃんは既に天に召されているじゃないか！そもそも、このノートが実際に本当なのかどうか確かめることも無理だと思うしなあ・・・ノートのほうには

「龍である者もその事実を詳しく知らないらしく、目が覚めればこの世界にいることが多いということだった。龍が現れる前兆としてたとえば、雷が落ちたところにたまたま龍が現れたという話を聞いたり、雨が降った後に現れた・・・というものもある」らしいので、捜しにいつても無駄なのかもしれないなあ。まあ、この程度のことをいままさら僕が調べようなんて無理なことかもしれないし、ここは一つあきらめたほうがいいのかもしれない・・・僕はそんなことを思って父さんのノートを静かに閉じたのであった。

その夜、僕は他の部屋で寝ることにしたのであった。無論、彼女でもなんでもない少女（一応、人間じゃないが・・・）の隣に枕を転がすことなどできず・・・他の部屋で寝ることになった。ふ、へたれな僕を笑うがいいさ・・・

何をどう思っただのか・・・僕は一階の廊下へとやってきた。このあたりは風がよく通るので快い眠りが僕を誘ってくれるに違いない。

「・・・おやすみ・・・」

誰に言うでもなく、僕は一人で夢見心地にはいったのだが・・・

ゴトリ・・・

という音が二階から聞こえてきた・・・と思うと、急になんだか怖

くなってきた。高校生にもなってお化けが怖いというものもどうしたものかと思うだろうが・・・お化けにはパンチが当たらないだろう・・・倒せない相手に恐怖を覚えるのは当然のことだ。（例：殴った相手が

「もつと！もつと殴ってくれえ！」と言う・・・これは怖い！）

「・・・ごくり・・・」

生唾を飲み込み、僕は廊下を静かに移動する。近くにあつた部屋に転がるようにはいつて、耳を澄ますと・・・なぞの人物？は僕が先ほどいた廊下辺りで動きを止めたようだ。どうにも、僕の体温を感じ取っているらしい・・・うわ、こいつは人間じゃない気がするぞ！

ゴトリ・・・

再び動き出した謎の生命体は間違いなく、こちらへとやってきた。僕はそろそろ心の準備をして相手を迎える準備をする。

ゴトリ・・・ゴトリ・・・

しかし、予想に反して相手は締め切っていた扉の目の前を歩いていった。

「ふう・・・」

がしっ！

油断しきっていた僕の足を誰かが掴む・・・

「ひいっ！！」

間拔けな声が自分の声から出たことに気がつくこともなく、僕はその場に倒れた。僕の足を掴んだ奴のせいで、仰向けに倒れる。僕は腰が抜けてしまったことのみを確認して機を失ってしまったので

あった。

次の日、僕は目を覚ました。

「…………ぐう…………」

「…………」

目の前にはシルバの顔があった。僕に抱きつくような感じで眠っている。近くには何故か、壺に入っている力オスの姿もあった。その隣にはダークが布団を纏って寝ている。

「…………なんだってんだ？」

「…………うあ…………」

どうやら、抱きしめているシルバ目を覚ましたようで……僕はあわてて離れようとしたのだが離れられなかった。

「…………鏡輔さんですか……おはようございます」

「あ…………う、うん…………これは違うんだ！」

「？」

そういつてようやく僕は離れることができたのだった。その光景をみてシルバは眠たそうに目をこすると…………体を動かしていた。

「…………ああ、すみません。私たちはどうにも、契約した後は鏡輔さんが近くにいないとどうにも…………不安になってしまっんです。せつかく寝ていた鏡輔さんには悪いですが…………一緒に寝させたもらっただです」

つまり、昨日のあれは考えてみれば不自然なことではなかったのか？

「…………ねえ、シルバ…………」

「何ですか？別に鏡輔さんには何もしてませんよ。彼女ができたらしりやまあ…………一緒に寝ることは控えますがね…………ええ、彼女ができるまでは一緒に枕を並べる所存です」

寝起きが弱いのかどうか知らないが、意味不明なことを口走っているシルバにたずねることにした。

「…………三人で一緒に来たの？」

「ええ、確かに三人で来ましたけど・・・壺に入って寝ていたカオスさんは寝ぼけていたのか知りませんが・・・そのままの状態（壺入り）で階段を器用に下りていましたよ・・・ダークさんは闇にまぎれてしまいましたけどね・・・私も眠かったので鏡輔さんの気配をたどって床にはいつくばってきましたけど・・・」

「どうやら、足首を掴んだのはシルバだったようだ。」

「・・・でも、鏡輔さんを見つけたときは既に、仰向けで寝ているようでした。だから、失礼ながら一緒に過ごさせてもらっただけです」  
「・・・」

もしかしたら、昨日のあれは別のものかもしれない・・・

## 第八話：変なことに巻き込まれる鏡輔（後書き）

さてさて、今回から鏡輔は厄介なことに巻き込まれていくと共に・  
・シルバたちとの間を気にし始めます。コメディー要素が少なすぎ  
ると思っっている方、これからは自分なりに気合を入れていきますん  
で、応援よろしく願います。

## 第九話：学ランと水着の関係

九、

僕は今、とある道場の前に立っている。

「・・・『エンジェルどうじょう臍脂得琉道場』か・・・この町には意味不明な道場が沢山あるなあ・・・」

帰宅途中、運悪くばあちゃんにあってしまった僕は

「新しい看板がまた、見たくなった。鏡輔、とっておいで」といわれたからやってきたのだが・・・ばあちゃんの突発的看板欲求病にはたはた、困ったものだ・・・

「・・・失礼しまーす！」

道場の扉を開けるとそこには一人の外国人が立っていた。

「ワット？」

「あゝすみません・・・」

しまった、ここは英語で話したほうがいいのかと悩んだところ・・・

「オット、コイツハイキノイイモンカセイガコロガリコンデキタゾ！」

完璧に間違えているのを感じながら僕は謎の外国人に話しかけた。

「ええつと・・・門下生じゃなくて・・・道場破りですけど？」

「ドージョーヤ、ブリーフ!？」

変なところでいちいち言葉を切らないでほしい。読み取るこつちもそれなりに大変なのだ。

「ソイツハデンジャアナボーイダ！イキテハカエサンゾウサン！」

某アニメの下ネタ（最近見てないな）を実際にやろうとしているのを見て取って僕はそれをとめる羽目になった。

「・・・イイデショウ！ワタシノカンバンホシイノナラ・・・シヨウブデエス！」

「はあ、わかりました・・・」

謎の外国人は指をぱちりと鳴らすと・・・なんと！道場が軋みをあげながら先ほどまで畳敷きだったところから25メートルのプールが姿を現す。深さは約1・8メートルつてところだろう。

「・・・では、あなたにはこれに乗ってもらいます！」

「うわ、普通に日本語しゃべれるならしゃべってくださいよ・・・」  
出してきたのは謎のたらいだった。金色をしていて、よくコントで使われたりしているあれだ・・・それが、この道場と何か関係しているのだろうか？

「・・・これに乗るって？」

「もちろん、私とこのたらいに乗って・・・勝負するに決まってマース！勿論、その場合はこの漢の服・・・“学ラン”を着用することを義務付けます！」

「はあ、そうなんですか？」

どのようにして使用するのだろうか？この大き目のたらいならたしかに、僕が乗っても大丈夫だろうが・・・ああ、このたらいに座って手で水を掻いて前に進めばいいのだろうか？

早速やろうとする僕に謎の外国人はそれをとめた。

「ノー！それでは勝負になりませんし、“漢”ではありませんえん！」

「・・・それなら、どうするんですか？」

「・・・こうするのでえす！カモン！マイフレンズ！」

口笛を鳴らすと・・・天井から二人の男が降ってきた。

「・・・」

「・・・ボオーイ！見てなさい！こうするのでえす！」

静かな水面におそるおそるたらいを浮かべ、彼はその上に立って腕を組んだ。たらいが揺れるたびにこけそうになるところが面白い。  
「・・・それで？」

「次に・・・マイフレンズたちに・・・押してもらおうのでえす！」  
指を鳴らすとその二人は本当に押し始めた・・・普通だったらいに乘っている外国人はバランスを保てずそのまま失墜・・・そ

して、彼はプールでおぼれるはずだと思っていたのだが・・・

「な、何だつて！」

あいつはまったく転げ落ちることなく、うまくバランスを保って二十五メートルを泳ぎきった。

「・・・ふふ、君にできるかな？」

「・・・いや、普通に考えてそれは無理なんじゃないんですか？ そんなことできる人がいるとは思えませんし・・・ほら、今僕には押してくれるマイフレンズ・・・がいませんし」

「いや、先輩のまいふれんず・・・ならここにいますよ」

どこから現れたのか・・・隣にミストが立っていた。

「・・・ミスト・・・」

「先輩、私に任せてください」

どこで準備をしてきたのだろうか・・・彼女は胸元に『みすと』と書かれているスクール水着を着用していた。

「・・・でも、もう一人いるんじゃないかな？」

「いえ、私一人でかまいませんよ・・・いざ、尋常に勝負です！」  
「いいでしょう！この私にかかってきなさい・・・」

こうして、僕とミストVS謎の外国人とそのマイフレンズの不毛な争いが始まったのであった。

「それでは・・・位置について・・・よい・・・」

どこから現れたのか知らないが、一人のおじいさんが協議用の鉄砲を天に向ける。

「どーん・・・といったら進むのじゃよ？」

とんでもねえ、爺さんだ。いきなりフェイントをかけてきたのだ・・・僕の乗っているたらいを掴んでいるミストは精神集中しているのかそのフェイントには引つかからなかった。

「く、フェイントにひっかからないとはやりますね」

自分たちが仕掛けたのだろうか、自分たちでその罠に引つかかっていては意味がないだろう・・・彼らは僕らより先に進んでいた。



「・・・外国人チームフライング一つ目！」

そう告げる爺さん。

「それでは・・・気を取り直してヨーイドン！」

こうして、僕たちの勝負は始まった・・・

「ははは！私たちに勝てるものはひとりもいません！」

輝きたらいに腕を組み、両の足をしっかりとつけて外国人は叫ぶ。  
したの二人がいつの間にか黒子の格好をしていることに驚いたのだ  
が・・・よく、あんなものをつけて泳げるな・・・

「・・・ぶくぶく・・・」

そして、肝心の僕のほうなのだが・・・

「ミスト！しっかりしてくれ！」

「せ、先輩・・・実は私、かなづちなんです・・・」

そういつて必死に僕の乗っているたらいを掴んでいる。

「・・・」

この子、本当に大丈夫なんだろうか・・・そう思いながら敵である相手のほうを見やると・・・彼らがゴールするにはもう時間がな  
いようだった。

「・・・ミスト、悪いけど・・・耳を貸してくれないかな？」

「え・・・何をするんですか？」

「いいから・・・」

「ははは！やっぱり我らの勝利のようです！彼らは既に『臨終D  
EATH！』」

そういつて外国人チームは残り五メートルを後ろを振り返り・・・

「いまだにスタート地点なんて想像もできません！なんで目をつ  
ぶっているのかもわかりませんねえ」

少しだけとまった。これが、彼らの敗北要因だった。

「ちよっと、待ってあげましょう。私は心のひろーい人間ですから

ね」

あわてぬウサギは勝負に負ける……彼らの隣を何かが通過した。

「は？」

僕は向こう岸に着いた衝撃でそのまま前のめりに突っ込んだ。そして、顔をいやというほどぶつける。

「あいたた……鼻血が出てる……」

血がぼたぼたと流れ落ちているのを確認しながら……僕はかなづちであるミストを助けに行った。

「こ、来ないでください！」

「ああ、そういえば水着を脱いだんだっけ？」

それから数分後、なんとかたらいにつかまっているミストを引っ張りあげて僕はため息をついた。

「……ミスト、今回は助かったよ」

「今回は？」

「まあ、君に助けられたのはこれで初めてだからね……」

今度は外国人さんに近づく。黒子さんたちが悲しみに打ちひしがれている外国人さんを慰めることなく、ただ近くに立っている。

「……今日は完敗デー……京都のワインで乾杯デーです！」

どこかのねじが外れたのかわからないが、彼はおかしくなっていた。

「あの……僕の勝ちでいいですよね？」

「え、ああ……好きなようにしてください！私は実家に帰らせてもらいマース！」

そういつて彼と黒子さんたちは姿を消した……去り際に

「私は忍者になりマース！」といていたのがなんとなく、印象に残った。

「……ミスト、帰ろうか？」

「はい、そうですね・・・」

「でも、そのスクール水着で帰るの？」

「・・・先輩、その学ランを貸してください。それを羽織って帰りますから・・・」

学ランを渡して、僕とミストは道場を出た。学ランを羽織ったミストだが・・・なんだか、白い足が見えたりして逆になんだか・・・よかった。

「はっ！いかんいかん・・・」

「先輩、早く帰りましょう？」

カンバンを背負っているミストの後を追いつつ僕はそんなことを考えたのだった。

「へえ、ここが先輩のおばあさんの家ですか？立派な庭園もあるんですね・・・あのような池を我が家につけたいものです」

目の前の光景に彼女は驚いて・・・庭の近くにある池に近寄ろうとしたので僕はそれを止めた。その池がどれほど危険なのか僕は知っていたからだ。その池が危険だということを知っていれば誰も近づくことはあるまい・・・

「・・・あの、先輩・・・なんで止めるんですか？」

「ミスト、信じてくれなくてもかまわない・・・僕はあの池に近づいて君がまるでめだかみたいに食べられてしまう光景が見たくないんだ・・・あの後、僕は夢の中で赤くてすばやく行動していたあいつに追いかけられているんだ！」

「・・・赤い星ですか？」

「違う！」

不思議そうな顔をするミストを引きずって僕はばあちゃんの家に入ったのであった。

「おや、今日も可愛い女の子を連れてきたねえ？」

「・・・先輩、この人おばあさんにみえませんか！」

そうだろう、彼女は会うたびに微妙に変わっていく。聞いた話で

は僕の父さんよりちよつとだけ歳がうえだそうで・・・父さんはこの人の養子だそうだ。

「・・・そうだろうね、実際はすごく若いに違いないよ・・・すみません、この子は僕の後輩で名前は・・・霧月霧仔さんっていいいます」

隣に刺さったガラス片に自分の引きつった顔を映しながら僕はそう答えた。

「・・・そうかい、それなら結構だが・・・鏡輔、お前はその子をどうしたいんだ？」

「・・・ミストですか？僕は・・・」

考えた結果を答えようとしたのだが、ミストが先に口を開く。

「・・・いえ、どうしたいも何も、私はただ単に先輩が困っていたから手を貸しただけです」

「ほお、近頃の後輩はけなげなもんなんだねえ・・・先輩の頼みで水着の上に学ランか・・・鏡輔、お前の趣味があやぶまれるね・・・」

まあ、確かにこの組み合わせはなかなか・・・ではなく！

「違います！僕が望んでこんな姿にしたわけでは・・・」

「え？でもその学ランは鏡輔から渡されたものなんだろう？」

「え、そ、そうですけど・・・」

「それなら、似たようなもの・・・いや、そのまんまじゃないのかい？」

そういわれたら確かにそうかもしれない・・・

「と、とりあえず・・・私はこれで帰ります。失礼しました」

そういつて彼女は僕の背中を通る途中・・・

「また、何か困ったことがあったら呼んでください。その・・・こういう格好をしてほしいとのことでもかまいませんから・・・」

壮大な誤解を残して去っていったのであった。

その後、僕は家に帰って三人の質問攻めにあった。理由は「あまりに家に帰ってくるのが遅い」というものだったのだが

「ばあちゃんの家に行った」という一言で静かになった。

## 第九話：学ランと水着の関係（後書き）

久しぶりの更新となりましたが・・・どうだったでしょうか？面白かったらこれ幸い・・・です。さて、これからの予定を報告していききたいと思います。ちらほらと出てきているミスに・・・一応、一番初めに登場したシルバの関係を次に書きたいと思っています。

## 第十話：鏡輔死す！犯人はシルバ！？（前書き）

えゝ記念すべき？第十回目です。何か企画しようかと思いましたが・  
・今回はやめておきたいと思います。この区切りのいいところで、  
感想をくれるとうれしいなあ・・・と思います。

## 第十話：鏡輔死す！犯人はシルバ！？

十、

僕の目の前には喧嘩を始めるミストとシルバの姿があった。

「・・・たえ、義妹といえど容赦しませんよ！」

「・・・望むところです・・・ここで血霧に変えてあげますよ！」

はらはらしている僕の左右では右にダーク。左にカオス・・・両手に花のこの状況だが、あの二人が喧嘩しているその姿のことで非常に心にシヨックを受けていた。

「・・・二人とも、闘志の風でパンツが見えてるよ・・・ぶーっ！」

「カオス！大変だ！鏡輔が鼻血を出して倒れたぞ！」

「そ、そんなときはレバーです！レバーを放り込んで輸血を・・・どうしてこうなったのだろうか・・・それは、学校の昼休みから始まった。

その日、僕は弁当を忘れてきた。

「・・・あ、弁当忘れてきちゃった」

その呟きに対してシルバ、ダーク、カオスは三者三様の答えを用意してくれた。

「・・・まあ、自業自得ですね？校庭の草でも食べたらどうですか？あれはいけますよ？昔、よく食べてましたから・・・」

「ふむ、それは困ったことになったな。私は昼は抜かしているから必要ないんだが・・・鏡輔はそうはいくまい？購買で何か買ったらどうだ？」

「鏡輔君、それなら私のお弁当を分けてあげましょうか？ほら、今日は珍しくお弁当が黒くなくなってますんだんですけど？」

「いや・・・やっぱり購買で何かを買ってくるよ」



僕はそいつって教室を出て・・・

「あ、先輩！」

「ミスト？どうかしたの？」

目の前には可愛い下級生であるミストがかわいらしいお弁当を持  
って立っていた。

「・・・ええとですね・・・先輩の嘆くさまがなんだか想像できた  
ので・・・今日の朝、先輩の分のお弁当を作ってきたんです」

それって、既に予知能力じゃないのかな？龍ってそんなこともで  
きるのか・・・と思うこともなく、僕はミストの手からありがたく  
その弁当箱をもらったのだった。

「ありがとう、ミスト」

「いえ、当然のことをしたまでですよ」  
そこへ・・・

「あ、鏡輔さん実は、私鏡輔さんの弁・・・ミ、ミスト！？」  
後ろから現れたシルバがミストの姿を見て固まる。

「・・・先輩、それでは失礼させていただきます」

ミストはそういつて俺に後ろを見せて歩き始めた。残された僕は  
教室へ入った。

「・・・シルバどうしたの・・・って胸倉掴まないで！」

いきなり彼女は僕の胸倉を掴んでそのまま天井に着きそうなまで  
にあげる。

「・・・鏡輔さん・・・まさか、ミストまで・・・」

「ぐ、ぐるじい・・・」

「質問に答えてください・・・あの小娘に踊らされているんじゃない  
んですか？」

「ぐはっ・・・」

「・・・そうやって、逃げても何も変わりませんよ・・・」

そのままだんだんと・・・そう、だんだんといつかの父さんが言  
っていた・・・いや、ノートに書かれていたおじいさんにあった気  
がした。

「よお、お前が輝の子供か？」

「ええと、あなたは？」

「わしか？わしはお前のひいじいちゃんじゃ。どうじゃ、このアロハ似合うじゃろ？」

「えーっと、確かに・・・」

「うむ、輝と違ってよい目をしておる・・・わしはなあ、最近天国を完全制覇してしまつて暇だったんじゃが・・・地獄の完全制覇を目指しているんじゃ」

「完全制覇つて・・・何のですか？」

「む、それはなあ・・・天使っ娘と悪魔っ娘のスリーサイズを完全網羅・・・わしの手にかかれば時間の問題じゃ・・・」

「へえ、すごいですね？普通はそんなことを考えませんよ」

「そうじゃろうそうじゃろう・・・ところで、おぬしはなんでこんなところにいるんじゃ？」

「あ、どうやら・・・やられちゃったみたいで・・・」

「なるほど、おぬしには龍の血がまだ覚醒していないようじゃのう・あやつは既に龍の力を覚醒した状態で生まれたからのう・・・わしに任せてみる！はああああ」

「す、すごい・・・力がみなぎっていく・・・」

目が覚めると、そこには少しばかり汚れた白い天井が広がっていた。

「・・・お、気がついたか？」

隣にはダークが座つて僕を見下ろしていた。

「大丈夫だったか？シルバさんが手を離すと同時に、意識を失ったんだぞ？」

「あゝなるほど・・・」

先ほどのおじいさんの表情を思い出しながら・・・僕は立ち上がった。

「ん？もう体のほうは大丈夫なのか？」

「まあ、大丈夫だけど・・・しかしまあ、他の二人はどうしたの？」

「・・・実はな、お前が気を失ってすぐに・・・教室の天井からシルバさんの妹さんが飛び降りてきたんだ。そして、木刀を引き抜いて彼女は『先輩に手を出す者ならば、たとえ、姉さんだとしても許しません！』と・・・その結果、シルバさんと妹さんは屋上で果し合いを行っている・・・カオスさんはその付き添いに行ってしまった」

この状況、さすがにどうかと思うぞ・・・シルバ、君は僕より果し合いのほうが大事なんだね・・・とぼやいている場合ではない！ここは急いで屋上に向かわなくては・・・

「ダーク！僕たちも屋上に行こう！」

「ああ、わかった」

屋上ではにらみ合いがずっと行われていた。

「・・・姉さん、先ほどあなたは私の契約者を一度殺害してしまいました・・・無念を晴らすため、私はあなたを倒します」

「・・・それがどうしたというのですか！大体、私の契約者です！私の力があれば組成だってできます！」

やってきた僕の目の前で、そんなやり取りが続いていたのであった・・・

簡単に説明すると、こんな感じになっていた。

「・・・さて、覚悟・・・」

「望むところです！」

ミストはその手に木刀を掲げ、シルバのほうは指を鳴らす・・・そこには大きな槍が握られていた。槍といっても、どうやら先のほうが練習用のなぎなたのような感じになっていた。

「・・・面白そうな展開になってきましたねえ・・・」

「・・・そうですね。ところで、カオスさん・・・止めるといって

ませんでしたか？」

「いえ、私は止めるなんて一言も言いませんでした」

「・・・そうですか・・・」

にらみ合いが続いたのだが・・・お互いに同じタイミングで動き始める。

「・・・でええい!!」

「・・・はあああ!!」

木刀と槍が交差し、鈍い音を立てる。

「・・・まあ、あれくらなら大丈夫だよな？」

僕は不安を覚え、隣に座っている（カオスも座ってお茶を飲んでいる）ダークに尋ねた。

「・・・いや、あの木刀は姿こそ木刀だけど触れるだけで切れるんじゃないか？きつと、ただものじゃない・・・それに、シルバさんが持っているものも似たようなもの・・・つまり、両方真剣よりも危ないものって考えたほうがいいかもな」

「そんな殺生な・・・」

「私とて、そう思っているから・・・こうして、隙を伺っているのだ」

そういつておせんべいを食べている彼女はどうかと思っぞ・・・僕も何か止めるように努力したいので彼女たちの隙を伺う。

それから、一時間後・・・

「・・・あの二人、タフなんだね？」

「・・・そうだな、正直三十分ほどで両方とも力を使い果たすと思っただが・・・見通しが甘かったか？」

それも違つかもしれない・・・なぜなら・・・

「はあ・・・はあ・・・」

「ぜえ・・・ぜえ・・・」

お互いに間合いを取って再びにらみ合っている。

「・・・よし、鏡輔行くぞ！」

「わかった！逝くぞにならなければいいけどね！」

「私はシルバさんをとめるから妹さんをお前はとめる！」

僕ら二人は走り出して彼女たちが再び間合いを縮める前に近づいたのだった。

「でえええええい！！」

ダークの雄たけびが聞こえ、シルバの持っていた槍を蹴り飛ばす。蹴られた槍はそのまま飛んでいき・・・校庭のほうから爆発音が聞こえてきた気がするのだが、気のせいだろう・・・今はこっちに集中してないと僕のほうが危険だ。

「はああああ！」

僕はミストの木刀を素手で掴んだ。無論、危険な刃の部分ではなく、ミストが持っている部分だが・・・

「せ、先輩！？」

前面からは危なかったのですが後ろから抱きつくように柄を僕の手中に収める。ついでに、抱きついていっているといっている・・・なんだか、得した気分だ。

「ミスト、ストップ！」

「・・・先輩、一度あの人に殺されたんですよ！」

「わかってる・・・だけどさ、何も君たちが争わなくていいじゃないか？ほら、僕はこのとおりぴんぴんしているからさ？」

「・・・わかりました・・・先輩がそこまでいうのなら・・・」

そういつてようやく刀から手を離してくれたのだった。まあ、これで平和に終わりそうだったのだが・・・

「・・・鏡輔さん、いつまで抱きついていいるんですか？」

「え・・・できればもうちょっと・・・冗談、冗談」

ダークに取り押さえられているが、彼女は何をするかわからない。・・・まあ、今回は先輩が無事でよかったから私は身を引きますが・・・姉さん、今後、先輩に何かするようであれば私はあなたを倒します」

夕陽に向かって歩いていくミストが姉であるシルバにそう答えた。  
「ふん、自分だって初めは鏡輔さんを襲ったそうじゃないですか？  
あの時、鏡輔さんがくたばっていたらどうするんですか？」

「・・・私は姉さんと違ってそのようなことは絶対にしませんよ。  
命の恩人に普通は恩返しをするようですが・・・今日の姉さんの行動はどうかと思います。先輩、それではこれから気をつけて生活してください。あと、やばいと思ったら大きな声で叫んで逃げてくださいよ。不審者は大体これで逃げますからね・・・特に、暗い夜道などは絶対に一人で帰らないように・・・他のダークさんやカオスさんがいないときにはどのようなときでも、私が先輩の隣にいますから・・・」

「ふん！ミストに助けられなくても私がいますから結構です！」  
そういつてシルバはミストがいるほうとはぜんぜん違うほうを見たのだが・・・僕としては途中は省略でいいとおもっけどなあ・・・絶対、途中からは男の僕が関係なさそうな話だったけど？

去り行くミストは途中でこちらを振り返った。

「・・・先輩、明日もお弁当を届けに来ます」

「・・・え、あ、そうなんだ・・・ありがとう」

「いえ、これも私の役目ですから・・・」

そういつて今度はまちががなく、去っていった。

その夜、シルバは機嫌が悪かった。

「・・・ふんっ！！」

「鏡輔、非常に居心地が悪いな？」

「・・・そうだね、だけど僕のせいじゃないような・・・」

「確かにそうですねー鏡輔さんは今日、くたばりましたからね」

そんな話をしながら、僕たちは夕食の時間を過ごしたのであった。

「・・・しかしまあ、あのミストって子・・・なかなかやりますね・・・」

「そうなの？」

「ええ、あの身のこなしに太刀筋・・・何より、あの刀が危険物です。簡単に説明すると、普通は存在しないような代物ですよ」

「そうなんだ・・・」

「ええ、これは注意が必要です。鏡輔さんを万が一、襲うようなことがあれば対処しないといけません」

そういつて、珍しくカオスがそのばやんとした顔をすこしだけしかめたのであった。

## 第十話：鏡輔死す！犯人はシルバ！？（後書き）

さてさて、メモリアルの第十話・・・どうだったでしょうか？前回、宣言したとおりにミストとシルバの関係を書けたと思っています。ミストの立場としては影からおせっかいに鏡輔を助けるような立場です。最近はシルバよりも目だっているような気がします・・・これはこれでしょうがないですね。メインヒロインなんて決めてませんし・・・まあ、終わり方はそのときになって決めることにしましょう！それでは、また今度・・・！（追伸 誰か、感想くれる方がいるならばぜひともお願いします！）



第十一話：前半／ミストと朝 後半／遙かなる文化祭への道？

十一、

その夜、寝付けなかった。いや、正確に言うならその夜は珍しいほどの熱帯夜で夏にはまだまだ遠いのにこれほど暑いとはそれほど近年の地球環境が悪くなってきたいて地球温暖化が進んでいるのか・これはまた、困ったことでこの問題をどうやって解決しようかと考えていたので寝付けなかった。くだいな・・・

次の日、僕は目を覚ました。隣には木刀が突き刺さっている。

「・・・すゝすゝ・・・」

「・・・」

僕の起動スイッチが押されるまで、僕はただの抜け殻だった。スイッチが入ったのは隣にミストが寝ていたから・・・

「・・・う・・・あがつ!!」

驚いて声を上げようとした僕だったが、脳内の会議（本日定例会）が即座に命令を下し、僕の拳が僕の口の中に放り込まれた。ここで声を上げてしまえば隣の部屋で寝ているだろうミストのお姉さんであるシルバが何事かと入ってくるに違いない。彼女たちの仲の悪さはこの前の戦い以降、いまだに続いているのだ。そうしたら彼女は朝から過激だろう・・・

「・・・すゝ・・・ん？ああ、先輩・・・おはようございます」

あつという間にミストは覚醒し、その場で僕にきちんと頭を下げて挨拶してくれたのだった。あれ？この状況には別に不信感を抱いていないのかな・・・

「あ、おはよう・・・ところで、何で僕の布団の中にいるの？」

「ああ、それは・・・昨夜、先輩が『助けてゝ暑いよ・・・』と叫んでいたのであわてて助けにはいったのですが、どうやら寝言だったようで・・・窓を開け、換気をしたところ寝言もやんだのです。

その後、私も眠くなったので先輩の隣で寝ていたのです。私としては朝早く起きる自信があつたので先輩の隣で寝させてもらったのですよ」

「なるほど・・・残念だけど僕って用事があつていつも朝早く起きてるんだ」

「そうだったのですか・・・これは、私の不注意でした・・・ところで、隣には誰が寝ているのですか？」

そう尋ねるミストに僕は正直に答えた。僕って、嘘つけない体質なんだ。

「・・・ええとね、シルバとダークとカオスだけど？」

「なるほど、姉さんが寝ているんですね？少々、失礼します」

「あ、不意打ち？それはさすがに・・・」

「違います、そのようなことはしませんよ」

そういつて彼女は隣の部屋に入っていた。少したつて再び戻ってきて静かに扉を閉める。

「・・・用事は済みましたから・・・それより、先輩が学校に行く前にどのようなことをやっているんですか？まだ、かなりの時間がありますけど？」

「僕？僕はこれから走ってくるんだ。毎朝の健康つてやつかな？ちいさいころからずっとそうしてるからね」

「そうなのですか・・・私もご一緒させてもらつてかまいませんか？」

「うん、かまわないよ。着替えが必要だから着替えたら玄関前に行つててくれないかな？」

「そうですね、よろしくお願いします・・・それでは、少々着替えますんで・・・」

そういつて再びシルバたちが眠っている場所に消えたのであつた。「さて、僕も着替えるかな？でも、ミストはどこからこの家に入つたんだ？鍵は厳重なはずなのに・・・」

数分後、僕は公園へとやってきていた。

「・・・さ、ここで走ろうかな？」

「目指すはこの町を一周ですね？」

「・・・いや、そんなことをしていたら学校に遅れるよ・・・この先、ちょうど山があつてね？その頂上にちょうど雷が落ちた後のような場所があるんだ。そこまで、走って帰って来るんだよ、普段はね・・・」

「そうなんですか？それなら、そこへ向かいましょう・・・本気で！」

その後、僕の体は全速力で加速するようになった。なんてことはない、後ろから木刀を振り回しながら追いかけてくる後輩がいたら、誰だってそうなるさ。

「・・・はあ・・・はあ・・・今日、僕は限界を超えた気がするよ・・・」

「おゝば〜どらいぶという奴ですね？」

よくわからないことを言いながらミストは隣に座る。

「・・・先輩、はしつてきたところ悪いんですけど・・・これから、お手合わせお願いできますか？」

「・・・拳と剣とではどう考えてもリーチの差とかがあつて僕が負けれると思うけど？」

「やってみないとわかりませんよ！」

そういつて無理やり僕は立たされて・・・ミストと戦ったのであった。

「結果を言おう、負けた」

「やれやれ、見事木刀が脳天に直撃・・・痛むまもなく、ここまで来たか・・・」

「ごめんなさい・・・」

「まあ、しょうがないことじゃ・・・普通の人間じゃったらまるで木刀で叩かれたスイカのように今頃中身がざっくり（そのまんま）・・・モザ確定のちよつと子供には見せれない映像の出来上がりじゃ・・・まあ、安心しろ、今のお前の体は常人とのそれとは違う。ちつとばかりたんこぶができていくくらいじゃ・・・」

「そうなんだ・・・でも、僕死んでる・・・」

「そりゃまあ、まだ心がついてこれんかったんじゃろう・・・」

「あゝそうなんだ・・・また、復活できますよね？」

「ああ、お前が望むならばな・・・言っておくが、永遠に復活できると思うでないぞ？おぬしが人間が関係しているもの以外から命を立たれた場合にのみ、おぬしは復活できるのじゃ・・・」

「なるほど・・・」

目が覚めた・・・

「せ、先輩！」

「あ・・・ミスト・・・」

脳内にすぎずきと響く痛みなどはまったくなく、感度良好・・・腕よし、足よし、体よし・・・どこにも異常は見当たらない。

「ちよつとばかり本気を出しすぎました・・・すみません」

うなだれる彼女の頭に手をやり、僕は僕の考えを言う。

「・・・気にしないで、このくらいじゃ・・・死なないみたいだから・・・」

「・・・で、ですが・・・」

「さ、帰ろう？ミストのおかげで色々とわかったこともあるし・・・」

「

「・・・・・・・・わかりました」

毎日、学生が向かうべき場所・・・・学校。そこではさまざまなことが起こり、時に恋、時に喧嘩・・・・さまざまなイベント？が行われる。そのきっかけとなるものに学校行事などが絡んでくる・・・

「シルバ、どうして僕らは放課後なのに学校にいるんだろうね？」

「さあ、それはわかりません。鏡輔さんがじゃんけんで負けたからではないんでしょうか？」

「確かに、そうかもしれない・・・」

僕らの高校では文化祭が何故か夏休み前にある。そうだな、簡単に言うとも期末テスト後の暇な時間を先生たちが無駄にしたくはないのだろう・・・

「僕は文化特別委員なんかになりたくはなかったんだ」

「そうですか？別に私はかまいませんが？」

そして、こういう行事の進行係などを決めるため、今年もその仕事を決めるためにじゃんけんが繰り広げられたのだが・・・・男子二十名以上の中で僕は負けてしまった。これも、日ごろの行いが悪かった僕への神様がくれた嫌がらせに違いない。

今日はとりあえず教室でどこか不備がないかどうかの検査だった。名前こそ大きくそんな仕事なのだが・・・・簡単に言うなら居残り掃除だ。

「ま、久しぶりに鏡輔さんと二人ではなせることはうれしいですよ。そっついながらシルバはさっさと箒をうごかしており・・・・僕は箒を放棄して机を沸きにどかしたりして壊れたものがないか探していた。

「・・・・・・・・そう？普段僕はシルバと話している気がするけど・・・

「最近ミスとばかり話しているようですけどね？」

「……」

その言葉がなんだか咎めているようで……僕はそっぽを向いて仕事に専念する。僕、仕事中毒なんだ。

「……大体ですね、鏡輔さんは……」

シルバはこっちのみに見て自分の進行方向をまったく見ていないようだ。そのまま、箒を動かしまくって……ついでに、僕が見ていなかったのも……シルバは……

「きゃっ！」

箒を振った拍子に肘を窓ガラスにぶつけ、割ってしまったのだ。た。

「……シルバ、大丈夫？」

切ったのだろうか……彼女の肘からは血が流れている。

「ちよつと切ったぐらいですけど……大丈夫です」

「……よし、今すぐ保健室に行こう！父さんはいないけど……応急処置ぐらいはできるからさ！」

僕はシルバの手をとると歩き出そうとしたのだが……

「へ、平気ですっ！」

「のわああ！」

肘を思いつきりひいたシルバのおかげで……割れた窓ガラスに突っ込んだ。

「ぎゃ〜！」

「きよ、鏡輔さん！急いで保健室に行きましょう！」

ミイラ取りがミイラになると……この状況で言うことができるのだろうか？

シルバの怪我は本当に先つちよを切っただけだった。だが、僕の傷（右腕に縦一線）は少々……いや、かなり深そうだった。保健室の主である保健の先生（僕の父）もいないので……どうしたらいいかと悩んでいるとシルバが僕の右腕を再び掴んだ。

「……シルバ？」

「ちょっと、動かないでくださいね？」

彼女は目をつぶると……右手の人差し指で僕の怪我している場所をすつと触っていく……

「あれ？」

気がつけば、彼女の人差し指に血はついていいるのだが……僕の右腕にはどこにも怪我した場所がなかった。

「……ま、これも鏡輔さんが元はと言えば悪いんですけどね……私がやったことにはかわりありません。それに、この術ができたということは鏡輔さんが私を頼っていたってことですからね……」僕にはよくわからないことをいいながらシルバはちよつと頬を染めて人差し指についた血を洗い流していた。

「……ありがとう、シルバ」

「べ、別にどうってことありませんよ。契約した人を護る……それが私のモットーですし、この術は鏡輔さんが私を信頼してくれていないとできないことですからね。私が一人で怒っていたことが馬鹿らしくなってきました」

そういつて俺の手を掴んだ。

「さ、今日はもう帰ることにしましょう！」

「え、あ……そうだね……」

促されるままに僕は保健室を出たのだった。

『……やっぱり、鏡輔さんは優しい人なんですね……』

「……？」

「どうかしましたか？」

「シルバ、何か言った？」

「いえ、何も言ってませんけど……？」

帰り道、暗闇となつた道路を僕たちはいまだに手を繋いだまま、歩いていた。僕としては恥ずかしかったのだがシルバが話してくれなかった……ということにしておこう。

「・・・まあ、心の中では言いましたけどね」

「・・・何を？」

「教えませんよ。知りたかったら私の心を読んでくださいね」

「そんな、無茶な・・・」

『ふふ、一生かかっても鏡輔さんには理解できませんよ』

また、僕の耳にはそんな声が聞こえてきたのだった。



第十一話：前半／ミストと朝 後半／遙かなる文化祭への道？（後書き）

いわば、第二章に突入したようなものなのですが・・・なかなか更新スピードを上げることができませんね。新しい小説も書いてますし・・・さすがに、ここまで増やすとてんでこ舞いつて奴ですね。これからの予定を少しだけ言っと・・・やはり、文化祭への道のりとそれぞれの龍の心を鏡輔がきづかづに知ってしまう・・・というなんとなく矛盾しているようなものです。それでは、皆さん・・・これからよろしく願います！目指せ、二十連載！

## 第十二話：VS熊龍のラルド

十二、

僕の目の前には右腕が取れたクマのぬいぐるみ（名前はラルド）が横たわっている。

「……メス！」

「鏡輔、何もそこまで気合を入れてしなくていいんじゃないのか？」

「……雰囲気だよ、雰囲気！」

「まじめにやってくれ……」

ダークにたしなめられ、僕は彼女から裁縫セットを受け取る。

何故、こんなことをしているかというところ……

「あのねえ、私のぬいぐるみさんが怪我しちゃったの！」

「そうなのか……」

ダークと共に帰宅途中……今日はシルバが風邪で休みなので彼女と一緒に文化祭の準備をしていた……一人の女の子がダークと話していた。何でも、この女の子はダークの知り合いらしい。

「私たちに任せてくれ。誓おう、君のラルドは“ぐれーどあっぷ”して君の元へ帰ってくる」

「本当？」

うれしそうに聞いてくる少女にダークはうなずいた。

「無論だ！この私にできないことは少ないぞ！」

「うん、じゃあ任せる！」

渡されていたクマのぬいぐるみは肩が微妙に裂けていて中から白い綿が出ていた。

家に帰り、ダークは早速クマの緊急オペに取り掛かった。そのとき、僕はシルバの看病をしており、カオスは料理を作っていた。つまり、誰も彼女を見ていなかったのだ。

事件が起こったのはそれから数分後……

「うん」

「シルバ、君が下着姿で寝るから風邪を引くんだよ」

そんなことを話していた僕たちのところへダークが血相を変えてやってきた。

「きよ、鏡輔！助けてくれ！」

「ど、どうしたの？」

「とりあえず来てくれ！」

そのまま引きずられていき……。そこには無残に右腕が千切れているラルドが横たわっていた。

そして、今に至る。

「……できないのなら、早く他の人に頼めばよかったのに……」

「この程度だったからできると思ってたのだ。別に、慢心していたわけじゃないぞ」

そうやってぶつぶつ言いながらもダークはぬいぐるみを直している僕の隣に座っている。

「……よし、終わり！」

右腕を完全補修して僕は立ち上がった。

「ほら、直ったよ？」

「うむ、完璧だが……。何かが足りない」

そうやってなにやら唸っているのだが……。それを放っておいて僕は再びシルバの元へと向かったのだ。……。それがいけなかったことに気がついたのはそれから十分後……。

「シルバ、そろそろ夕飯だけど大丈夫？」

「うん、正直つらいですけど……。食べておかないと治りませんよね？」

「そうだね、食べておいたほうがいいと思うよ」

ガシャーン！！

「・・・ちよつと、行つてくるね」

僕はダークのいる部屋と向かったのだが・・・

「ダーク？今度は何・・・ぐはっ！！」

扉を開けるなり、ダークが僕にぶつかってきた・・・

「鏡輔か？助かったぞ・・・」

「・・・ダーク、あれ・・・何？」

ダークを抱きしめるような感じでダークが飛んできたほうをみると・・・そこにいたのは茶色で背中から黒い羽根を生やした化物の姿だった。

「・・・実は、あの後私の力を使ってぬいぐるみにかけていたものを強調した結果が・・・あれだ」

一体全体、何がかけていると思ったのだろうか？

きしゃー！

「・・・何を強調したの？」

「凶暴さ」

なるほど、だからあの化物はこちらをにらみつけているというわけだ・・・

「・・・完成したら急に襲い掛かってきたのだ。どうにも、一人じや勝てそうにないと思って奴の尻尾で飛ばされたところに鏡輔がやってきたということだ」

正直、あんな化物と遊んでいられない・・・それに、二人で勝てそうな気がしないんですけど・・・

「シルバは風邪だし・・・」

「カオスさんも夕食の途中だ」

「・・・ミストは・・・そうだ、買い物にいったんだ」

だんだんとこっちにやってくるラルド（覚醒バージョン）はかわいらしかったあの目を恐ろしい瞳に変化させている。

「く、こうなったら・・・やるしかない！」

「よし、それなら……とりあえず、広い場所に連れて行こう！」

そのまま窓から飛び降りて（僕はダークに抱えられ）追いかけてきたラルドを広い場所である公園に誘導。辺りは既に暗くなっている。人影が見えない。

「……吼えたらどうしようか？」

「そうだな……一応声帯は持っていると思うがな……困ったものだ。鏡輔も何かいい知恵がないのか？お前も共犯者だろう？」

うん、これってどう考えてもダークが悪いよね？僕はどう考えても被害者だよ。

今のところは相手の力量を計っているのか知らないが、様子を見ているラルド。龍の力をもつてもさすがにあれはきついとダークがいつていたとおり……強そうだ。

「……ダーク、何か方法はないの？」

「なくはないが……ちょっと、隙ができるからな。その隙を突かれたら少々危険だと思うぞ。だが、それならばあのラルド君を討ち取ることは可能だろう」

絶対的な自信を持ってそんなことを言っているので……

「それなら、僕が囷になるよ！」

「いや、困ったことにこの技は鏡輔がいないと使えないからな……今のところはにらみ合いが続くと思ってくれ。もしかしたら相手の弱点を理解することができるかもしれないからな」

そういつて相手を見据えるのだが……それもどうだろうか？

素直にミスとかが応援に来るのを待ったほうがいいような……

それから、三十分後……

「……動かないね？」

「そうだな、どうかしたのだろうか？」

「電池がきれたのかな？」

「まさか・・・相手はぬいぐるみだぞ？ぬいぐるみに電池を入れたりしないだろう？」

石を投げてみると・・・

うおー！

「ほ、吼えた！」

「なぜだ？」

動くには動いたのだが・・・状況は悪化！目の前の敵をすべて地獄に宅急便で送りますという顔をして僕らに突っ込んでくる。

「・・・まったく、先輩たちは何をしているんですか？」

「ミスト！」

そのラルドの前に立ちはだかってミストが木刀で相手の脳天を叩く。

「・・・しめた！ミスト、そのままラルド君をおびき寄せていてくれないか？私はちよつと鏡輔とともにそいつをしとめたいからな」

「なにやらわかりませんが・・・とりあえず、こんな化け物を相手にするのは少々つらいということ覚えておいてくださいね」

ミストは相手の背後に回って今度は竹刀を叩きつける。

「さ、鏡輔・・・覚悟はできたか？」

「覚悟つて何の？」

「とりあえず、ラッキーだと思ってくれ！」

「ダーク・・・んっ！な、何を！」

地面から現れた謎の影・・・それはラルド君をあつという間に飲み込んだ。

「・・・す、すごい・・・」

「一体全体・・・これは？」

「これか？これは私と鏡輔の力だな。契約者との“ふれんどしつぷ”によって力を使えるのだ。いくら、あの化け物が強かろうが・・・こうなったらおしまいだな」

そういつてダークは面白くなさそうに残ったラルド君の羽を見る。

「・・・鏡輔、ぬいぐるみどうしようか？」

「・・・あの子になんていおうかな・・・」

「よし、これからぬいぐるみの作り方を勉強して私と鏡輔でぬいぐるみをつくるぞ！」

そういつて僕を引っ張っていくダーク。

「・・・ミスト、悪いけど先に帰っておいてくれないかな？あと、ちよつと今日は帰ってくるのが遅くなるってカオスだけでいいから伝えておいて・・・」

「目指すは図書館だ！」

「わかりました、なにやら事情はよくわかりませんが・・・健闘を！」

「ありがとう、お姉ちゃん！」

「いや、何・・・この程度私の手にかかれば朝飯まえだ」

そういつて胸を張るのはいいのだが・・・その隣に立っている僕はすでにぼろきれ状態なのだ・・・ふふ、僕を使ってクマのぬいぐるみが作れるかもね・・・あの後、本当に図書館にやってきて『蛇でもできるぬいぐるみ』を読破。その後は材料を買ってきて白いクマのぬいぐるみを作ることになったのだが・・・いかんせん、僕は初心者で・・・ぬいぐるみができた頃には既に朝になっており、白かったはずのクマのぬいぐるみはところどころ僕らの血を吸っており・・・なんとなく、怖いものになっていた。「どうかね？」

「うん、とくにこの赤いのがいい！」

「そうだろう、これは私たちが夜通しで作り上げたものだからな。いわば、われわれの子供なのだ」

辺りのおばさんが僕を見てひそひそと話している。ち、違っんです！ダークな、なんてことを・・・

「・・・ダーク、早く帰ろう？」

「ん？そうだな・・・じゃ、ラルド君貳号をよろしくな」

「わかったよ！」

元気いっぱい笑っている子供に背を向けて・・・僕は帰宅し始めたのであった。

「・・・鏡輔、ぬいぐるみの件ではかなり世話になったな」

いきなりそんなことを言ってくるダークだが、僕は別に世話をした・・・とは思っていないので答えに困った。

「・・・え、いや・・・別にいいよ。僕だってラルド君なんて珍しいものを見ることができたんだし・・・」

「そうはいうが・・・また、犬死しそうになったし・・・今だつて足元がふらふらしてるぞ？」

「・・・これはね、ちよつとばかり文化祭のことを考えていてね・・・とりあえず、大丈夫、僕は別に怪我してもないし、健康だよ」

足を叱咤し、僕は走り出す。

「あ、待ってくれ！」

「ほら、早く帰るよ！」

僕はダークの手をとって・・・

『全く、本当に元気ならいいんだが・・・』

「・・・」

再び、誰かの声をきいたのだった。この前と同じではなくまた、別のもので・・・僕はその声を聞いてなんとなく、安らぐことができたのだった。



そして、ぬいぐるみの事件もきちんと終わりを向かえ・・・文  
化祭まであと数日となったある日・・・また、別のことが起こった  
のだった。

## 第十二話：VS熊龍のラルド（後書き）

少々、間が空いてしまったことにお詫びを申し上げたいと思います。自分としては今のところこの物語は二十話ほどで終わる予定なのですが・・・反響があれば、続けたいと思っています。それでは、不定期の次回予告・・・次回は順番的に言ってカオス中心で行きたいと思います。そして、今回影に吞まれてしまったラルド君はどうなってしまったのでしょうか？

### 第十三話：図書館と地下、そしてラルド君

十三、

昼休み、僕は図書館にいた。別に、本を読みに来たのではなく図書館の先生が言っていたことをこなすためにきたのだ。ちなみに、一人では無理だったのでヘルプ人材……

「カオス、この本はもっと奥のほうにおいて欲しいだつて」

「なるほど、わかりました……」

カオスをつれてきたのだ。他の二人は今頃別の場所で仕事……いや、お仕置きをされているだろう……大体、僕は図書委員でもなんでもないので……図書館の先生に捕まってしまったのが間違いだった。

図書館の先生は非常に人使いが荒いということを知ったことがあり、この前だって不良生徒がこき使われているのを目撃した。生徒をこきつかうのは先生の特権……らしいので誰も文句を言っていない。それに、一週間に一度ほどは誰かが犠牲になったりするものだ。

「まったく、あの二人は……」

「まあまあ、さっさと終わらせて私たちもここから逃げ出しましょう」

シルバとダークは僕と一緒にいたのだが……逃げたのだ。途中、彼女たちの悲鳴が聞こえてきたのできつと先生に捕まったのだろう……。そのまま別の場所に連れて行かれて想像も絶するようなことをされているに違いない。

「ほら、手が止まってるぞ？」

「……はい」

僕も今となつては逃げていない……もとい、逃げることはできない。先生はあれからずつとこつちを見ているし、途中歩いていたカオスと呼ぶくらいしか僕にはできなかった。

「……その資料はこっちの棚に……。それで、お前が右手に持っているものはこっちの棚だな」

先生はてきぱきと野次を飛ばし……。僕たちはまるで馬車馬のようにつせと働いていたのであった。そろそろ、昼休みも終わりを告げそうで……

キンコンカーンコン！

「先生、予鈴がなつたんで帰っていいですか？次、移動教室なんで……」

僕は先生返事を待たずに隣を歩いていこうとして……  
「おいおい、何を言っているんだ？」

首根つこを掴まれてしまった。

「黒川先生……。あの、私たちはこれで……」

同じように脇を通ろうとした力オスも首根つこを掴まれる。先生はメガネの奥から不機嫌そうなまなざしをこちらに送っている。

「……次は何の授業だ？僕が連絡をいれておこう」

「えーっと、次はなんだったけ？」

「確か……。理科でしたっけ？」

「そうか、それなら僕が今から連絡を入れておく。それじゃ、二人は先に進めておいてくれ」

そういつて僕らを放すと先生はあっさりといなくなった。走って去ったような雰囲気もなく、その場から消えてしまったようだ。

「……あの先生さ……。どことなくダークに似てない？」

「当然ですよ、あの人はダークさんのお父さんです」

「でも、ダークの苗字って『黒川』だったかな？確か、『黒山』だったと思うけど……」

そういえば下の名前はなんだったかな？まあ、いいか。

「へえ、じゃあ……。あの人も龍なのかな？」

「どうでしょうか？」

「・・・あと、つけてみようか？」

「どこに行ったかもわからないのにつけることなんてできるんですか？あの人・・・かなりのやり手ですよ？」

さすがに強さの格が違うのに既に力オスは気がついてたようだ。

「まあ、いいんじゃないかな？とりあえず、ここを終わらせて・・・」

それから約一時間ほどだつてこっちの仕事が終了・・・気がつけば先生が近くの椅子に座つて読書をしていた。

「・・・つけることもできませんでしたね？」

「そうだね、とりあえず終わったことを報告してこようか？」

二人でそのまま黒川先生のところまでやつてきて終了したことを報告。

「ふう、まあまあだね・・・ああ、そういえば・・・」

そういつて何かを取り出した。それは、メガネだつた。

「・・・メガネ？」

「ああ、君のお父さん・・・輝にこのメガネを渡しておいてくれ。

これはあいつが僕に注文していたものだからね」

「わかりました・・・でも、父さん・・・いえ、保健の先生はもう帰ってきているんじゃないんですか？」

今日の朝、ようやく父さんたちは家に帰ってきたのだが・・・僕らに挨拶をしてさっさと学校に行つてしまったのだ。

「いや、僕があいつの前に姿を現すと少々・・・いや、かなり厄介な奴がやってくるからね。僕としては今輝の前に姿を現すのは避けたいんだ。ここだつて完全に安心してわけじゃないからね」

「？」

「ま、君たちに言つてもわからないだろうけど・・・僕の従妹がちよつとね・・・やつかいな性格なんだ。ちよど輝のところに来ているから会いたくないんだよ」

つまり、先生は苦手な従妹さんがきているので父さんに会いたくないのか・・・それより、父さんと黒川先生が知り合いなのを驚い

たな・・・

「あゝそうだった。ダークとシルバさんをこの学園の地下においてきたから予備に言ってくれないかな？ほら、これが鍵だからね」

渡された鍵の札には『図書館奥』と書かれている。

「道はほら・・・」

図書館にある謎の扉を指差す。今まであそこには扉がなかったよ  
うな気がするんだが・・・気のせいだろうか？

「気をつけていつてくるんだよ？」

きつと地下だから暗いのだろうと思ったのだが・・・

「何で、何で・・・なんで地下に化け物がいるんだああああああ  
ああ！！」

階段を一気に駆け下りていく僕らの後ろから何かが追いかけてく  
る。その目は真つ赤で・・・姿はラルド君（覚醒バージョン）に  
そっくり・・・いや、これは本物だろう。影に吞まれて消えたと思  
ったのだが、まさか学校の地下にやってきているとは知らなかった。  
「どうします？この状況？」

「どうもこうも・・・ラルド君は強いからなあ・・・」

階段だつて終わりを迎える。いずれ、僕らはこの階段を駆け上が  
らないといけないのだ。遅かれ早かれ、この化け物を退治する方法  
を考えないといけないのだ。

「ねえ、カオスでもあの化け物を何とかできない？」

「ううん、分身を出してもぜんぜん通用しないと思いますよ」

楽しそうにしているとみるとぜんぜんこの状況を飲めてい  
ないことに間違いはないだろう。

「どうしても倒したいのなら倒しますけど？」

「お願い！こんな地下でまだくたばりたくないんだ！」

「それなら、聞きますけど・・・」

後ろから叫びながら追いかけてくる元ぬいぐるみ・・・を振  
り返ることなく、僕らはシルバとダークがいる最下層へと向かつて  
いる。

「死ぬならどこがいいですか？」

「死ぬなら・・・死ぬならベッドがいい・・・もしくは・・・」  
僕の頭の数センチ上を何か危ないものが経過・・・冷や汗が全身から吹き出てくる。

「女の子の膝枕」

「わかりました、そうなるように努力しますよ」

そういつてカオスは隣を走っていた僕をいきなり・・・

「お、お姫様抱っこ？」

「ええ、この状態じゃないと少々きついですからね」

そういつてそのまま僕と・・・

「ん・・・」

辺りがとたんに静かになり、白と黒の何かがラルド君を強襲・・・

「動きが止まった？」

「ええ、さすがにあれを食らって動けるとは思えません」

何をしたのかはさっぱりと見当がつかないのだが・・・まあ、これで安心だということは理解できた。よかった、なんだかあっさり終わって・・・この前はミストにもがんばってもらったんだけどね・・・。

「さ、早いところ二人を見つけましょう・・・他にもここには何かがあります」

さらりと問題発言をしておいたまま、彼女は再び走り出す。

「そ、そうだね」

それについて僕も地下を目指す。

「一体全体、なんでこの学校に化け物が出てくる地下を作ったんだろっ？」

「いえ、もとは地下なんてないんじゃないんですか？」

いまだに走っている僕たちはそんなやり取りをしている。

「先ほどからずっと全速力でかけているのに疲れていない・・・それに、随所随所に扉はあるんですけど・・・私たちはその扉が自分たちがくぐるものではないと頭の中で不思議と理解しています」

この地下は初めのほうはきちんとした木製の階段で、辺りは誇り積もった場所だったのだが・・・今では階段は石畳に変わっており、辺りは明かりが照らされることもないのにそこには何も無い空間が広がっていることだけを理解できる。カオスがいうとおり、途中に扉があるのだが・・・そこにいくべきではないとなんとなく、頭で理解していた。

「・・・終わりはきつとあるでしょう。私たちはそこにいけばいいんですよ」

「そうだね、それしかないってわかってるんだけど・・・」  
時間の感覚がさっぱりなので腕についている時計を見るのだが、その時計はあれから一分ほどしか経っていないことを告げている。

「・・・ここはきつと、僕らが住んでいる場所と違うんだろうね？」  
「そうですね、私の時計が壊れていないと信じたいものです・・・ほら、すごいことになってますよ」

カオスは自分のつけている時計を僕に見せる。それでは既に十時間以上経っているように示していた。

「・・・めちゃくちゃだね？」

「ええ、そのようですが・・・」

急に前のほうを見ると・・・

「・・・ゴールは見えてきたようです」

そこにあつたのは一つの扉だった。それは、とても重そうな扉で『お仕置きルーム なま物』と書かれていた。

「・・・きつと、二人は軟体生物に襲われているに違いありませんよ」

「・・・そうかな？あの二人が軟体生物を見てびびりそうな細い神経してないと思うけどなあ・・・」

「そつえばそうですね」



別に心配することもなく、僕らはその扉を開けて中に入ったのだ。  
った。

「・・・あ、鏡輔さん」

「鏡輔か・・・」

やはりというかなんというか・・・そこには軟体生物（見たことも無い物体）が軟体も軟体も転がっている。

「・・・私たちは二人を迎えにきたんです」

「そうなんだ、そろそろ帰ろうよ？もうちょっとでたぶん学校終わっていると思うからさ？」

「そうですね、そろそろ帰りましょうか？」

「そうだな、鏡輔はここから帰るまでの道順を覚えているんだろうな？」

二人を回収し、僕らは再び階段を駆け上がったのだった。

「あれ？ラルド君がいなくなってる！」

「ラルド君？ここにいたのか・・・」

「ラルド君ってだれですか？」

「鏡輔君、きつとラルド君は消滅したのでしょうか。所詮はぬいぐるみですからね。そこまで耐久度はないはずです」

それぞれがそれぞれの感想を述べ、僕らはラルド君がいたはずの場所を通り過ぎたのだった。

「やあ、お帰り。どこも怪我をしていないところを見ると事はうまく運んだようだね？」

「先生、生徒を行方不明にしたいんですか？」

「いや、僕は君たちが運んだ熊とは思えないぬいぐるみの始末をさせたただだよ。大体、あれを生み出した人が悪いんじゃないかな？」

こうして、文化祭の数日前にめちゃくちゃ体力を消耗するような出来事がおき、ラルド君の尻拭いは大変だった。もともと、尻拭い

をしてくれたのはカオスなんだが・  
・  
・

### 第十三話：図書館と地下、そしてラルド君（後書き）

今回はカオスに主点を置いて書いてみました。どうだってでしょうか？さて、前回のあとがきで第二十話ほどで終わりを迎えるといっていたと思っています。実際、それぞれのENDを書きますので・  
・シルバ、ダーク、カオス、ミスト・・・の予定ですので、話的には第十六話で物語は終わりの予定です。さて、次回はミストを主軸とした話です。

## 第十四話：文化祭前日の出来事・・・

十四、

明日は文化祭・・・僕らが通っている高校でもみんながあわただしく追い込みをかけている。

あわてているのは準備が間に合っていないクラスで・・・ゆっくりしている僕らのクラスは既に自分たちの家にほとんどのクラスメートが帰っている。ふっ、この成果も僕らの担任が僕とシルバをこきつけたおかげということをお忘れしないで欲しい。つまり、彼らが家に帰ることができたのは僕たちの時間というものを犠牲にして・・・

「先輩、そちらのほうをお願いします」

「・・・はい」

しかし、いまだに僕はおうちに帰れてない。これには事情があり・・・僕たちの担任の先生が

「よし、みんな帰っていいぞ。だが、鏡輔は残しておくように」といったのがきっかけで・・・

「一年の作業が終わってないらしい。ちょうどここを担当していた生徒会の人物が今日は休みで手伝ってもらいたい」と言い渡されたのだ。ちなみに、シルバは家で自宅療養。この前の風邪がぶり返されたと思われる。

「あゝ先輩、悪いですけど・・・」

「何？」

「邪魔です」

「・・・」

そんな感じでここでの仕事も終え・・・ようやく僕は解放された。

「リミット・ブレイク！」

「・・・先輩、何を叫んでいるんですか？」

屋上でそんなことを叫んでいた僕の後ろから声が聞こえてくる。

「ミスト・・・いきなり後ろに立たないでくれよ」

「すみません、でも、何で屋上にいるんですか？」

「それはね・・・というより、僕はミストの教室に配属されてただけど・・・」

「ああ、あれが先輩だったんですか？なんだか肩身の狭い思いをしているような人だったので別人だと思ってました」

な、なんて失礼な後輩なのだろうか！？

「あのねえ、僕の姿ぐらい覚えてるでしょ？」

「まあ、私も大変でしたから・・・それより、何で屋上にいるんですか？」

「さっきもそんな質問しなかった？」

「先輩が答えてないからまた聞いたんですよ。きちんと答えなかった先輩が悪いんです」

ぐ・・・近頃ミストが冷たくなったような・・・

「・・・まあ、なんとなく疲れたからね。ほら、ここならめったに人が来ないからね？」

「それはそうですね・・・ここ、立ち入り禁止ですよ？」

「・・・まじ？」

「ええ、本当です。ここにやってきた生徒は停学を言い渡されるそうです。先輩、停学決定ですね」

だ、だが・・・

「それなら、ミストだって停学じゃないのか？」

「ええ？それは大丈夫ですよ。だって、私はへまをしませんからね・・・さ、先輩、こっちに来てください」

そういつて屋上の端のほうまで移動するミスト。僕もあわてて彼女の近くに移動する。そこには以前、ここで争ったところでもあった。

「・・・さ、私を抱っこしてください」

「え、ええつと？」

「ああ、ちなみにお姫様抱っこです。早くしないと・・・大変なことになるですよ?」

そういつて無理やり僕に抱きつくような仕草を見せて・・・屋上のドアのほうから声が聞こえてきた。

「誰かいるのか?」

「わわっ!?!」

「ほら、早く!」

ミストに言われたとおりに僕は彼女を抱き上げた。

「・・・おや、霧が出てきた?」

やってきた先生は僕の担任だった。しかも、学年主任なのだ。

「・・・気のせいかな?」

そういつて屋上の扉を閉める。ガチャリという音もしたので施錠もしてしまったのだろう。まあ、既に最終下校の時間帯を越えている。

「ど、どうしよう・・・この前の騒動で脱出用のロープまでなくなってるけど?」

「大丈夫ですよ。先輩がいますからね・・・」

不適に僕の腕の中で笑っているミストに微妙に恐怖を覚えながらも僕は尋ねてみた。

「何か考えがあるの?」

「ええ、二人もいればすぐに脱出方法を思いつけますよ。まさか、鍵をかけられるとは思いませんでしたけどね」

どうやら、僕が少々ミストの能力を買いかぶっていたようだ。深く、反省!

それから十分が経ったのだが・・・

「先輩、何か思いつきました?」

「いや、さっぱり。ここにあるものは・・・」

木刀がコンクリ作りの校舎に刺さっている。竹刀がコンクリ作りの校舎に刺さっている。この二つはきつと、名もない勇者に抜かれ

ることを夢見て刺さっているのだろう……

「あゝ木刀と竹刀しかないようですね。あれ、結局刺さったまんまなんですか……」

「うゝん、ロープもないからなあ……あ、そうだ！」

僕の頭の中に豆電球が……

「……なんですか？」

「えっとね、ミストが龍になれば最低でも一階下の窓まで届くと思うんだ」

「だから？」

「ミスト、龍になつて！」

そういつともものすごくいやそうな顔をしたのだった。

「えゝそのようなことをしたら……間違いなく、私は疲れてしまいますよ。大体、私は心が熱くならないと龍になれないんです」

なんじゃそりや……

「で……心が熱くなるってどうしたらなるの？」

「それはまあ……たとえるなら、戦っているときとか……不良が子猫を雨の中えさをやるとか……そんな感じですね」

「いや、そんな感じって……いまいわかりづらいなあ……」

「とりあえず、先輩と戦えば心が震えて燃え上がります。それだけは間違いないでしょう」

そういつて立ち上がった竹刀をどこから引つ張り出す。

「さ、先輩……この竹刀を使ってください。私はあちらの竹刀を使用しますから……勿論、私は先輩をボコボコにする予定ですので先輩も本気で来てくださいね。そうしないと心が燃え上がりません！」

そういつて突き刺さっていた竹刀をあっさりと引き抜く……今ここに、勇者が誕生した？

「さあ……いきますよ！」

「く、とりあえず……怪我しないように努力しよう」

僕は両手で竹刀を構え……突っ込んできた相手の竹刀をよけず

に受け止める。

「・・・以前より腕を上げましたね？まだそこまで経っていないのに・・・」

「そ、そうかい？僕としてはいまだに変わってないと思うけどね」  
竹刀をぶつけ合いながらそんな会話をする。会話の端から相手の行動を読もうとしたのだが、そんな高等なことが僕にできることはなかった。

間合いを相手ととって再び竹刀を振り上げながら相手に突進。ミストはそれを予期していたようであっさりと面と見せかけて胴を狙っていた一撃が阻まれる。

「・・・せいっ！！」

そのまま弾き飛ばされて・・・相手は僕から間合いを取った。辺りは既にこの前と同じように霧が立ち込めている。

「・・・これですね、この感覚・・・もう少しです！」

心が熱くなってきたのだろう・・・普段は冷静なミストの瞳の中ににやら燃え上がる『明鏡止水』の文字が・・・

「だああああ！！」

先ほどよりも三割ほど威力と速さが上がっているミストの攻撃を完全にいなすことができていない僕は先ほどから防戦一方。恥に追いやられると間違はなく落とされてしまっただろうからたまに右とか左とかに必死になってステップを踏んでいる。

「ぐっ、がっ・・・」

右肩、左足・・・さまざまなところに竹刀が襲ってくる。

「どうしました？動きが遅くなってきましたよ！」

うれしそうにそんなことを言っているミストの腹部辺りを狙って横一線をやってみたのだが・・・相手はひらりとそれをよけて再び僕から間合いを取る。

「もう少し・・・もう少しですよ！」

「く・・・」

このままだところらの体力がなくなってしまういそうなのだが・・・



・僕がやられてもいけないわけで……

「ちくしょおおお!!」

僕は叫びながらミストに突撃。先ほどのミストのような太刀筋を思い浮かべながら何度か軽めのフェイントを入れながら相手の攻撃をいなすことなく、すべて受け止める。そこは根性、あと何回受け止められるかわからないのだが……。ミストが龍の姿になればそこでこの模擬試合みたいなものは終了である。

「ぐっ……。やりますね、先輩」

「はあ……。はあ……」

「ですが、疲れてきているようです……。これで、終わりにしましょう!」

どうやら……。どうやら戦っている間にミストのスイッチが入ってしまったらしい……。その目は間違いなく鋭くなっており、先ほどとは比べ物にならない量の霧が噴出してくる。その霧にまぎれてミストは姿を消したのだった。

『奥義　霧葬!』

四方八方から足音が聞こえてくる。さらに、勘ぐって右に歩けばそちらから攻撃を仕掛けられてしまう……。つまり、動けるような状況ではなかった。辺りがだんだんと暗くなっていることで僕的心中では警報がなり始める。

「……。くそ、心眼なんてできないし……」

「そこです!!」

いきなり右斜め前から姿を現したミストの竹刀に僕の右腕が何とか反応してよける。相手の一瞬の隙について僕は相手の胴に一撃を食らわせたのだった。

その瞬間、辺りを包んでいた濃い霧はすべて消えうせて……。地平線に沈む太陽が映ったのだった。

「……。腕を上げましたね、先輩」

屋上にはミストが倒れこんでいた。

「……。燃え尽きました……。ガクリ」

「え、ちょっと待ってよ！何で気絶してるの！？」

きつと、本気で戦ったからだろっ・・・ミストは疲れて眠ってしまっていた。これでは、本末転倒も甚だしいことだ。

「おゝい、どうすりゃいいんだよぉ！」

僕が叫ぶと・・・

「・・・心配するな、先生がきちんとここにいるぞ」

「げ、先生！？」

気がつけば隣には先生が感動したといったそうに腕を組んでいた。

「うんうん、白河・・・お前は何気に熱い漢だったんだな？」

「え、ええっと・・・？」

「いい試合を見せてもらった。あそこまで本気の試合を見るのは久しぶりだ・・・ほら、今日はいいものを見せてもらった記念として屋上のは目をつぶってやるからな・・・早く帰るんだぞ？」

先生はそういつて去って行ったのだった。よくよく考えてみればあそこまで叫びながらやっていたら聞こえるものなのだろう・・・

「まあ、いいか・・・」

僕は試合を終えて真っ白になってしまったミストを背負って屋上を後にしたのだった。ミストの持っていた竹刀はいつの間にか姿を消しており、疲れていたので僕も竹刀をそのままにして帰ったのだった。

「あ、先輩・・・無事に降りることができたんですか？」

下駄箱辺りでようやくミストは目を覚ましたのだった。僕の足腰は既に限界を超えて無駄にがんばっている。

「・・・う、うん・・・先生に見つかってね・・・」

「そうですか・・・」

なんだか元気がなくなったミスト。たぶん、

「停学」になってしまったと思ったのだろう。

「あ、大丈夫。ミストのおかげで何とか停学にはならないみたいだからさ？」

「それなら、安心しました……」

ミストは自分から降りるようなことはせず、既に誰もいないのだが……この状況を他人に見られたらどうやって説明しようかと僕は思っていたのであった。

「……先輩、右方向に何かがありますよ!」

「え?」

暗がりのところでミストがそんなことをいったので……右を向いてみると……頬に何かが当たる感じがしたのだった。

そんなこんなで、文化祭前日は終了したのだった。

#### 第十四話：文化祭前日の出来事・・・（後書き）

久しぶりの更新ですが・・・どうだったでしょうか？日々進歩（一部後退）していると思っっている作者、雨月です。季節的にちよつと厄介なイベントがあるので更新スピードが非常に遅いのですが、すみません。さて、この物語もいよいよ終わりを迎え始めました！文化祭の話を次回は書く予定だったんですが・・・次回は文化祭のその後を先に書こうと思っています。つまり、次回で一応は物語としては終了です。第十六話で文化祭・・・その後は四人とのENDを前作のように書きたいと思っています。葵が母親だったら鏡輔ですが・・・加奈が親だったら・・・という小説も一応書いています。感想、評価待ち望んでいますのでお暇な方はよろしく願います。

## 第十五話：お祭りのお約束！（前書き）

さて、中途半端ですが物語自体はこれ以上進みません。あとは文化祭で何が起こったのか・・・それと、各々のENDです。あとがきではお願いしたいことを書いています！

## 第十五話：お祭りのお約束！

十五、

その日、僕は保健室にいたのだった。

「やれやれ、文化祭なのに怪我するなんてお前らしいな」

「・・・まあ、しょうがないんだよ・・・僕だって怪我したくてしたわけじゃないんだからさ・・・」

今日は文化祭当日・・・だが、僕は貧血のため、保健室に運ばれていたのだった。

既に、文化祭は終了しており・・・僕がすべきことなどいまさら残っていない。そろそろ片付けも終了しているような時間帯のようで、早めにホームルームを終了させてしまったクラスは既に解散を告げられており、部活があるものは部活に行っていて帰宅部の人たちはその部活を全うするために安全に帰宅の徒についていた。

「・・・まあ、来年もあるんだからそう落ち込むんじゃないぞ」

「・・・しょうがないか・・・じゃ、僕は先に帰るよ」

「ああ、気をつけて帰れよ？」

保健室の扉を開けようとすると・・・勝手にドアが開いたのだった。いつからここに自動ドアが設置されたのだろうか？

「あら？鏡輔・・・気絶したって聞いたけど大丈夫だったの？」

「母さん？」

何のことはない、母さんが僕より先に扉を開けたただけだったのだ。うん、保健室に自動ドアがつく日はきつと遠いぞ。

「校庭でみんなが待つてるわよ？」

「うーん、わかった。じゃ、先に帰っておくけど？いいの？」

「ええ、確かに鏡輔が心配だったんだけど・・・輝さんにも用事があったのよ。ちよつと輝さん、いいかしら・・・あら？」

「？」

僕も後ろを振り返るとそこに座って書類を書いていた父さんの姿

はなく、代わりに熊のぬいぐるみが陣取っていたのだった。あるべき熊の耳はなく、代わりに龍の角が生えているところを見るとどうやら“ラルド君”のようだ。だが、動く気配を見せていないところを見ると完璧にぬいぐるみに戻ったらしい……大きさはいまだに僕並なのだが……

「まったく、どうしたのかしら？」

「父さんに用事があるって何？」

「用事？ああ、今日は隣町で祭りがあるのよ。私も輝さんと一緒によくいったわぁ……」

そういつて頬を染める母さんを見ていると何かを思いついたのか母さんは手を叩いた。

「……鏡輔、みんなと祭りに行つてきなさい！」

「え……どうしてまた？」

「気絶しててみんなと回れなかったんでしょう？校庭の隅にいたみんなはとても悲しそうな顔をしてたわ……あつて間もないつて思うけどあの子達と仲がいいでしょう？」

「そりゃまぁ……」

何故か知らないが……確かに仲がいい。

「……私の時のようにはならないでしょうけど……行つてきなさい。場所は教えてあげなくてもわかると思うけどね……じゃ、私は輝さんを探さないといけないからね」

そういつて僕を追い越して保健室の扉を開けて去つていった。僕も扉を開けたのだが……既に廊下には母さんの姿が確認できなかった。

「……僕の母さんと父さん、何者なんだろう？」

一筋縄では太刀打ちできない二人のことも気になったのだが、祭りのことも気になっていたので僕は考えるのをやめてとりあえず四人の元へと向かうことにしたのだった。

校庭の隅、花壇の近くに四人はいたのだった。右からシルバ、ダ

「ク、カオス、ミスト・・・シルバとミストはにらみ合っているところを見るとこれはこれで違う祭りが見られるかもしれない。」

「ごめん、待たせたみたいで・・・」

「そんなことないですよ、先輩が倒れたのは私たちの所為なんですから！」

ミストが真つ先にそういつたのだった。

「・・・ええ、そうですね、私たちがやったのは間違いありません・・・すみませんでした」

「すまん、鏡輔・・・限度が超えてたな」

「文化祭は確かにお祭りですけどさすがに大暴れしすぎましたね」

「そうかな？別に何もされてないような・・・」

僕がそういうと四人は非常に重苦しい表情を見せる。

「・・・どうやら変なところで薬が効いてしまったようですね？」

「そうだな、碧さんに感謝を一応しておかないと・・・」

「まあ、碧のおかげといえそうですがですね・・・」

「・・・先輩のお母さんのお姉さんは危険な方です」

そういつて重度のけが人を見るように俺を見ている。な、何なんだろうか？

「本当に覚えてないんですか？」

「大丈夫だって、貧血で倒れたんだよね？貧血ぐらいで・・・シルバ、その哀れむような目は何？・・・貧血だよね、ダーク？え、何で目をそらすの！？ちょ、ちょっと！カオス・・・その携帯で119を押してない？つて、ミスト！何で目の前で十字をきってるの！？え、僕って・・・貧血で倒れたんじゃないの？」

困惑する僕に四人は上っ面だけで笑ったのだった。

「・・・まあ、いいよ・・・ところでさ、これから隣町で祭りがあるらしいんだから・・・みんなで行かない？母さんに行ってきたいって言われたんだけど？」

そう尋ねると四人は考えるような仕草を見せたのだが・・・  
「ええ、そうですね。文化祭は色々とあれでしたが・・・行きまし



よう！」

「うむ、いい考えだな。隣町ならそこまで遅くならないだろうし・・・」

「楽しみですねえ・・・屋台はどのようなものがあるのでしょうか？」

「花火はうちあがるのでしょうか？え？花火はなしなんですか？」  
こうして、僕らで隣町まで行くことになったのだった。

浴衣姿の四人の近くを歩くのはなんだか気が引けたのだが、誘っておいて一人だけ離れて歩くのも失礼だと思ったのでついて歩くことにした。

既にあたりは暗くなっており、ここに来る途中何度か道に迷ってしまったのもあるだろうが・・・まあ、祭りは暗くなってからが面白いのだ。

「・・・へえ、いろいろとあるんだねえ・・・」

誰に言うでもなく、そんなことをつぶやいたのだが・・・誰も乗ってきてくれなかった。

「・・・シルバ？」

右を向いたが・・・いなかった。

「・・・ダーク？」

左を向いたが・・・いなかった。

「・・・カオス？」

後ろを振り返ったが・・・いなかった。

「・・・ミスト？」

振り向く場所がなくなったので空を見上げたのだが・・・やっぱりいなかった。

「・・・まったく、みんな迷子かよ・・・はは、僕から離れちゃ駄目だって言ったのになあ・・・」

決して、そう、決して僕が迷子になつたわけではない！

「・・・ありや、他のみんながいなくなってるし・・・鏡輔さんまでいないなんて・・・」

シルバは辺りをきよきよと見渡しながら進んでいく。人ごみの中を歩いたことはほとんどないので自分が前に進んでいると思っているのだが、人の波に押されており交代しているのだった。

「やれやれ、鏡輔はともかく・・・他のみんなまでいなくなるなんてな・・・」

ダークはりんご飴をかじりながら辺りをきよきよとしていたのだった。頭のいい彼女は自ら人ごみの中を突っ切ろうとせず、その場で待機していたのだった。

「・・・鏡輔君がいまませんねえ・・・シルバさんたちもいませんし・・・」

カオスは金魚を眺めながらそんなことを呟いていたのだった。金魚のほうに意識がいつており、9：1の割合で金魚が優勢だった。狙いは出目金だろうか？

「ま、まさか・・・この私が迷子！？迷わないように先輩のすそを掴んでいたはずなのに！」

ミストは絶対に迷子になることはないだろうと思っていたので非常に混乱していたのだった。きよきよと辺りを見渡していくたびにその目の端に涙を浮かべ始めたのだった。

「さて、これから僕はどうするべきだろうか・・・？探すにしても誰を目印に探したいったほうがいいのかなあ？」

僕は人ごみが一番少ないところから人ごみを眺めていた。その中に知り合いはいないかと探しているのだが・・・そうそう、うまく見つからないようだった。

「・・・携帯電池切れてるし・・・そうだなあ、迷子の放送でもしてもらおうかな？」

そんなことを考えていたのだが・・・一向に自体は進展しそうにもないので自分からやつとの思いで抜け出してきた人ごみの中に再び入っていったのだった。

「・・・はあはあ・・・なんだか全然進んでないどころかさっきより離れてるような・・・」

シルバは先ほどの場所から約五十メートルほどバックしたような場所に立っていたのだった。現在進行形で彼女は後ろに向かっていく。

「・・・鏡輔さあゝん！！（必死）」

「あゝそろそろ腹がたまってきたなあ・・・飴も食ったし、イカ焼きも食ったし・・・」

ダークは先ほどの店から隣の店、隣の店と食べ物売っている店の前で立ち止まっていたのだった。現在進行形で彼女は焼きそばを食べている。

「・・・鏡輔（ボタンタッチの意味をこめて）」

「あ、おじさん！亀さんも投下ですか？へえ、ぜにがめなんですなあ・・・」

カオスは先ほどの店からまったく動いておらず、金魚が泳いでいる隣に新設された小さなプールの中で泳いでいる亀を現在進行形で眺めているのだった。

「・・・鏡輔君（この亀、とぼけた顔が鏡輔にそっくりだなという感じ）」

「うゝん、うゝん、誰もいない・・・」

ミストは精神面がほとんどやられているようで・・・ふらふら

した足取りで青白い顔をしながらまるでゾンビのようだった。現在進行形で徘徊している。

「……先輩、先輩、先輩（まるで獲物を狙うかのようにな）」

僕は彼女たちを探して走り……。いや、人ごみで走れないので歩いて探していたのだった。

「あ、ちよとおなか減ったし……。このイカ焼きを食べるかな？」

迷子になった……。いや、迷子の彼女たちを探すまでは気を許すことが出来ない。

「うーん、たれがおいしいなあ……」

決して、うつつを抜かしている場合ではないのだ！

「あ、流れ星だ……。綺麗だな……」

今だつてどこかに四人のうちの誰かがいないか探している……

心情的にはのどから手が出るような状態だろうか？

「……浴衣着てる女の人って綺麗だな……」

「……きょくすけさん！うわっ……そっちじゃないですよ！」

「あ、いけないいけない！なんだかシルバの声が聞こえたような気がしたんだけど……。急いで探さなきゃ！」

そう、僕は彼女たちを探さないといけないのだ！

「鏡輔！こっちだぞ！あ、いま代金を払いますから……」

「……ダークもいないし……」

視界に入れば見つけることが出来るだろう！

「あ、鏡輔君？この亀……。あ、持ち出し禁止ですか？すみません」

「……カオスはどこだろ？」

断言してもいい！僕は彼女たちより先に彼女たちを見つけると……

「せ、先輩！うおっ！人波が……。これほど激しいとは！」  
「……ミストは泣いてるんじゃないかな？」

僕は彼女たちを探し続けるだろう。そう、何があっても・・・たとえ、この人ごみが消えようとも・・・

「あゝみんなを探さないで！でも腹減ったから、次は何を食べようかなあ？そっぴや、さっき金魚を売ってたなあ・・・祭りって徘徊するだけでも楽しいからなあ・・・」

優柔不断な鏡輔はみんなとはちょっとだけ離れた場所であらうろろとしていたのだった。

## 第十五話：お祭りのお約束！（後書き）

さて、物語は前書きでも述べたとおりこれで終わりなのですが・・・中途半端な感じなのが微妙ですね。まあ、きちんとENDは書きますから・・・。END編を書くにあたって、皆さんにお願いがあります。ずばり、四人の中で思い入れのある人物は誰かということです。ちよつとあれですが、人気のあつた人物のみ、優遇して後日談を書こうかなと思っています。では、次回は文化祭で何が起こったのか・・・それを書きたいと思っています。

## 第十六話：文化祭の真実！主人公の使い方

十六、

文化祭の当日、鏡輔はあたりを見渡していたのだった。

「うーん、すごいねえ……」

「ええ、そうですね」

「まあ、当然じゃないのか？」

同じクラスのシルバ、ダークと共に教室内にいる人たちを眺める。このクラスでは飲食物を扱う予定だったのだが……校長先生の頼みにより、このクラスにはこの高校の反映の歴史がたくさん詰まることとなったのである。一応、鏡輔たちはこのクラスの入場者数をカウントしているのだが、それ以外にはこれといって何も仕事がないのである。

「こういう仕事はきついね……」

「まだ、あと……三十分ほどありますよ」

「しかしまあ、いまだに長者の列を作っているというのが信じられないな……」

ダークの言葉にうなずきながら、鏡輔とシルバは廊下の端ほどまで並んでいる行列を眺める。廊下の端といいながらも、このクラスは校舎の端のほうにあるのだが……

三十分後、行列から解放された三人は他の二人と待ち合わせをしている場所まで歩いていったのだった。結構広い廊下内ですれ違う人たちの数が多く、時折肩などがぶつかったりもする。

そんな三人の元に彼らの担任が現れたのだった。

「お、もう終わったのか？」

「ええ、終わりましたけど？」

「そうか、それなら悪いんだが……そう嫌そうな顔をしないでくれ。すぐに終わるような仕事だからさ……別に今でなくても構わ

ないんだが・・・地下倉庫の鍵が開いているから悪いが閉めておいてくれ。放課後までに閉めておいてくれ。鍵はこれだから・・・あ、そのまま職員室にもっていつてくれて構わないから・・・それじゃあな」

そういつて先生は姿を消したのだった。後に残された三人はどうしたものかと顔を見比べたのだった。

「どうしようか？今から行ったほうがいいのか？」

鏡輔のその提案に他の二人は唖ったのだが・・・

「そういえば、先ほど二人から連絡があつてですね、少々遅くなるかもしれないって言っていましたよ？」

「あの二人も他のところの用事できつとおくれているんじゃないのか？それなら今から地下倉庫にいつて鍵を閉めてきておいたほうがいいだろうな。幸い、地下倉庫は体育館の下だし、待ち合わせ場所が体育館だからちょうどいいじゃないか」

「そうだね」

こうして、三人は先に地下倉庫に向かうことになったのだが・・・

「ち、地下倉庫行きの扉が何者かに破壊されてる！？」

目の前に無残に引き裂かれている扉を前に鏡輔は固まっていた。何かくまのような生物が壊したのか、つめのあとが扉の脇のほうにも残っている。

「・・・これじゃ、中に入るのは危険のような気がしますね？」

「まあ、どう考えてもこの爪痕は・・・奴か？」

シルバは既に諦めモードでダークは探偵モードになっていた。鏡輔はダークの発言に冷や汗をかきながらも・・・

「奴って・・・ラルド君？」

「ああ、そうだ。ここらあたりで熊といえはラルド君と動物園にいる熊だけだろうよ？私としては一般生徒にこれ以上の被害をもたらしたくはないし、絶対にラルド君を退治したほうがいいと思うんだ



が？どうだ？」

鏡輔の頭の中でラルド君は咆哮していた。シルバは頷く。

「よくわかりませんが、そんな危険な化け物なら仕留めましょう！  
鏡輔さん、大丈夫ですよ・・・なんてっ たって二人も龍がいるんですからね？」

「身の安全は私たちに任せてくれ・・・鏡輔がいきたくないのなら別にいいんだが？」

「ダーク、そういうことは僕を担いで言う台詞じゃないよ」

既に鏡輔を担ぎ上げながらそんなことを二人は言っており、鏡輔はため息をついていたのだった。

階段を下りていった先には二人の人影があつたのだった。

「あ、カオスとミスト・・・何してるの？」

「・・・先輩こそ何しているんですか？」

担ぎ上げられている鏡輔を呆れた様子で見ながらミストはそう尋ねていたのだった。カオスのほうはあたりを警戒しているのか、表情を陰しくしているままだった。

「・・・鏡輔君、私たちはちよつと先生たちに言われてこの地下倉庫にやってきたんですよ。椅子を出して欲しいとのこと・・・そうしたら、非常に危ない化け物がこの地下倉庫にいたんです。それで、どうにもその化け物が外に出ないように退治しようとしていたんですけどね・・・一向に姿を現さないんですよ。気配は感じてます」

今なお、相手を見つつけようとしているのだろうか？あたりを鋭いまなざしでにらみつけていると喋っている状態だった。担ぎ上げられている鏡輔も何かがいることがわかっていた。

「うーん、隠れてるってわけでもなさそうなんだけど・・・」

地下倉庫はほとんど荷物が出払われており、コンクリで覆われたそこは地下駐車場を連想させた。残されているものは布で覆われている大鏡だけのようだった。

「意外と鏡の下にいたりして……」

一人で歩いていき、鏡輔はどう考えてもこの前目にしたラルド君よりも小さい大鏡にかかっている布を上にあげたのだった。

鏡輔とラルド君の目が合った。

「ぎゃああああああああ！」

鏡輔は目の前に本当に現れた化け物から一気に飛び退った。相手も驚いたのか、鏡の中で“シェー”のポーズをとっていた。

「いましたね！」

「……つぶすか！」

「さよならですよ！」

「一刀の元に……」

しりもちをついている鏡輔の前に四人が出てきて鏡に向かって攻撃を始める。手加減というものがその攻撃に加えられていると感じる人は十人中零人だろうというぐらいの制裁を鏡の中にいるラルド君に浴びせられているのだった。

そして、最後にしりもちをついている鏡輔を四人で担ぎ上げ……

「え、何これ？ 投げる気？ 主人公の僕を投げる気？」

「……必殺！ 鏡輔粉碎弾！！」「……」

そのまま放り投げたのだった。

鏡輔の記憶はそこで飛んでおり、生身の人間が鏡に突っ込んだらどうなるか……良識ある人たちならわかるだろう。

頭から突っ込んでいった鏡輔はもう、絵で表現するには生々しくてモザイクがかかっている状態になっていた。その後、カオスの知り合いを呼んできてさまざまな薬を鏡輔に大量投与したのだった。その副作用か知らないが、彼が泡を吹いていたというのを知っているのは処置をした人物と主犯格である四人だけである。主犯格の一人

であるシルバはあわてたように弁解している。

「ほら、ええと・・・鏡輔さんは主人公ですから最後に華を持たせてあげようとしたんです」

見事、その華を散らせてしまった（生きてはいるのだが）鏡輔。残念なことに彼が楽しみにしていた文化祭は彼が目覚ます頃には既に終了していたのだった。

ちなみに、その文化祭から数年後、当時の記憶を失っていた鏡輔はその事実を知ると教えてくれた人物の前から約一週間ほど姿を消してしまったそうである。誰が彼にその事実を教えたのかは不明である。

## 第十六話：文化祭の真実！主人公の使い方（後書き）

いつていたとおり、これで終わりです。次回からはENDシリーズです。中には物語には一つの終わりで十分だ！と思う方もいるかもしれないですけど、雨月としてはせっかく登場させた人たちなのでそれぞれに終わり方を用意したいと考えています。さて、以前もいつていたとおり後日談を書くとかいつていましたが・・・今のところゼロです。よければ感想などにかいてくれるとうれしいと思います！

## シルバEND：鏡輔とシルバ（前書き）

さて、今回からそれぞれのENDとなっています。読み終わったら感想を書いてくれるとうれしいです。

## シルバEND：鏡輔とシルバ

シルバEND

シルバがようやく鏡輔と合流できたとき、お互い非常に体力を消耗していたのだった。あたりは既に帰宅を始めている人たちが多いのか、人の流れは止まることなく、出入口口となっているところへと向かっている。この辺りではとても有名なお祭りらしく、警察まで出てきている。

「・・・はあ、何とか鏡輔さんに会うことが出来ました」

古びたブランコに座ってシルバはそんなことを呟いていた。

「いやあ、正直このままばらばらに帰ることになるのかと思ったけどよかったよ」

その隣のブランコに座っている鏡輔は何度か足を踏まれたのか足をさすっていたのだった。

「鏡輔さん、怪我しているんですか？」

「怪我・・・どうかな？何度か踏まれたけどどうってことないよ？だから怪我とは・・・おわっ！」

いきなり足を掴まれバランスを崩した鏡輔は危うく後頭部から地面に着陸するところだった。このままだっていたら足の怪我よりも大変な事態になっていたかもしれない。

「・・・あざになってます。ほら、すねのちょうどした辺り・・・」

「

「そう？それより僕・・・かなり危険な状況なんだけど？すね？すねより人間は頭のほうが丈夫だと思うんだ・・・」

何とかしてもとの状態に戻ろうと努力している鏡輔だが・・・

「動かないでくださいね？動くとその足へし折りますよ？」

「マジ？」

そのさざりと言つてのけたシルバに恐怖しながら鏡輔はうなずいたのだった。

「さ、これで大丈夫ですよ」

鏡輔の足に包帯を巻き終えたシルバは鏡輔のほうを見た。鏡輔はシルバをまじまじと眺めている。

「どうかしましたか？」

「あ、いや・・・ありがとう」

「いえ、当然のことをしたまでですよ。仮に、私がこんな状況になったら鏡輔さんは当然こうしてくれるでしょう？」

「・・・・・・」

黙りこむ鏡輔に不信感を表すシルバ。

「あの、してくれないんですか？」

「あ、いやねえ・・・なんでもないよ。勿論、シルバが怪我をしたときは僕が包帯を巻いてあげる」

ちなみに、鏡輔が黙っていた理由は

「え、シルバって青痣できるの？体、僕より頑丈そうだから大丈夫だと思っただけだなあ」ということを頭の中で考えていたからである。実際、彼が考えている以上にシルバは体が頑丈である。

「・・・・怪しいです」

「いや、怪しくないヨ」

顔が笑っている鏡輔とジト目でそれを見ているシルバ。彼らの姿は光に照らされてムードはよかったのだが、いかんせん、状況的には二股をかけていたことをばれて彼女に追及されているような状況であった。

「あ、それよりさあ・・・他のみんなを探さないと・・・」

その状況を打破すべく、鏡輔は立ち上がって歩き始める。

「待ってください！」

せつかく包帯をしてあげたほうの足をりんごを握りつぶすような感じでシルバは掴んだのだった。

「ぐっはあ！」

鏡輔はそのまま前のめりに倒れそうになる。だが、シルバに支え

られて何とか難を逃れたのだった。

「・・・せつかく二人ですから少しだけ、一緒にお祭りをまわりませんか？」

「・・・僕としては既に人ごみを回りまくったんだけどね・・・」

「何か言いましたか？」

「いえ、何も・・・」

綿菓子を食べているシルバの隣を歩きながら鏡輔は夜空を見上げたのだった。

「・・・どう？おいしい？」

「ええ、おいしいですよ」

シルバは財布を落としたそうだったので（中身は五百円あるかないか）お祭り代はすべて鏡輔が出し代えなくてはいけなかった。片っ端から食べているのでそろそろ鏡輔のお財布は役立たずになるかもしれない。

「・・・いや、既になってるよ・・・」

「鏡輔さん、一緒におまいりしていきましょう？」

シルバは鏡輔の手を引いておまいりをしたのだった。しかし、そこでシルバの肩に手が置かれたのだった。振り返るとそこにはちらちらとした男性と女性が立っていたのだった。

「あ、君たち・・・カップル？それならここでおまいりするのはやめたほうがいいよ？ここさあ、カップルがお参りすると一年以内に分かれるんだって」

その二人はそういう残して去っていったのだった。

「・・・親切に言ってくれたのはいいんだけど・・・大体僕たちカップルじゃないんだけどなあ・・・」

鏡輔がそういうと、遠くのほうから声がしてきた。どうやら他の三人がやってきたようだ。

「・・・そうですね、私たちはカップルじゃありませんでした・・・」



シルバはそういつて鏡輔の手を掴んだ。

「・・・それなら、これから・・・これから私の彼氏になってくれないませんか？」

そついうと鏡輔の元を離れて三人のほうへと走っていつてしまったのだつた。鏡輔はその場に立つたままほづけており、シルバの告白を聞いていた近くの男性が彼に言つた。

「しつかりしろ、人生つてものはもっと厳しいぞ」

帰り道、三人が騒いでいる後ろのほうでシルバと鏡輔は黙つて歩いてた。鏡輔は意を決したように言葉をひねり出した。

「シルバ、さっきのことだけど・・・」

「何でしょう？」

「僕のほうからもお願いしたいんだ」

「・・・よかった・・・」

「え？」

「いえ、何でもありません・・・これからも、お願いしますね？」

「・・・うん」

先を歩いていく三人においていかれないように鏡輔とシルバは手を取り合つて走つて向かつたのだつた。

）END（

## ダークEND：鏡輔とダーク

ダークEND

「やつといたよ・・・」

目に涙を溜めながら焼きそばを口に運んでいるダークを見つけると地を這うように鏡輔はダークの元へと向かったのだった。

「ふう、何してるの？」

「・・・鏡輔にはこれが何をしているのかわからないのか？それは眼科に行ったほうがいいぞ？おえつぶ、いい眼科を紹介しようか？」  
「い、いや・・・遠慮しておくよ。それよりダークのほうが病院に行ったほうがいいんじゃないの？」

たまにおえつといいながらダークは何とか焼きそばを食べ終えたのだった。

「・・・食べ物に殺されると思ったのはこれで四回目ぐらいだな」

「以前にそんなに殺されそうになったんだ・・・」

「魚の骨が刺さったり、スイカの種を飲み込んで胃の中で成長した・

・・・」

「嘘!？」

「・・・夢を見た。寝苦しいと思ったらこの上はないだろうな。実は私の家にその映像があるんだが・・・一緒に見るか？」

「いや、いいよ・・・」

ちよつと変わったところのあるダークを見ながら鏡輔はようやく他の人物たちを忘れていたのを思い出したのだった。

「そうだった!ダーク、他のみんなは？」

「は?てつきり鏡輔側にいると思ったんだが・・・やはり、迷子になったのは鏡輔だったのか？」

「いや、それを言うならダークが迷子になったんじゃないの?僕はもう高校生なんだよ!？」

「落ち着け、ここは冷静に考えよう・・・」

憤る鏡輔にあくまで冷静なダーク。

「・・・今考えた可能性なんだが・・・」

「何？」

「我々二人だけが迷子になったのではないか？」

「どういうこと？」

「つまり、鏡輔と私は知らず知らずのうちにみんなから離れていつてしまったということだ。だから、他の三人はいまだに我々二人を探しているのではないのだろうか？私一人だけが迷子になるのは忍びない、どちらかが損をするのならお互い損したほうがいいだろう？」

「・・・そうかなあ？」

「とりあえず、他のみんなを探そう。三人が固まって動いていたら我々二人が迷子だったということになるからな」

ダークは鏡輔の手を掴んで歩き出す。

「・・・さあ、いくぞ」

「ダーク、そっちは出口じゃないのかい？」

「・・・お、本当だ・・・失敬、私としたことが冷静さを失っていたようだ。鏡輔、私の手を離すんじゃないぞ？無論、離しても構わないがその場合は鏡輔一人だけが迷子になったということにしよう」  
メガネをくいとあげてダークは再び歩き出したのだった。

「・・・なんだかなあ・・・」

その後をダークの手を握っている鏡輔が続いたのだった。

「・・・まったく見つからないな？」

「そうだね、三人ともいないねえ」

「何周まわったか覚えてるか？」

「・・・五周以上？」

「携帯を鏡輔から借りたのはいいのだが、途中落としてしまったからなあ・・・さて、どうしたものだろう、他に考えられる可能性は・・・」

メガネがきらりと光ってそのまま何事か考えるような仕草を見せる。まさにその姿は探偵ものの犯人を追い詰めるシーンそのものだった。

「・・・一つ目、はぐれている我々と探していると思われるあちらの三人のスピードがまったく一緒」

「でも、途中で反対方向にも進んでみたよ？」

「それは、あれだ・・・あちらも同じ時間に反対方向からこっちに向かってきたんだ」

どうだといわんばかりのダークなのだが、それはそれでおかしい気もする。

「・・・他の可能性は？」

「他の可能性？そうだなあ・・・高校生なのに迷子になってしまった我々二人に幻滅して先に帰ってしまった・・・」

「それはそれで悲しいね」

「まあ、実際に迷子になったのは鏡輔だけだ。現に私はあそこで鏡輔がやってくるのを待っていたのだからな」

胸をそらしてえばっているダークにため息をついて鏡輔は先を促す。

「三つ目は？」

「三つ目か？三つ目は何か事件に巻き込まれた・・・そうだな、他の世界に転送されてしまったというのはどうだろうか？今頃、魔王を倒しているかも知れんぞ？」

彼女たちは龍なのでどっちかというところと魔王がわなのではないか？という疑問を鏡輔は覚えたのだが黙っておいた。ここでそれを言うてもこの龍は取り合ってくれないに違いないだろう。

「・・・大体、その仮説はあとのくらいあるの？」

「あゝ次で最後だが・・・」

「四つ目は何？」

「それは・・・」

急に黙りこくってしまったダークを不振そうに見る鏡輔だったが、

遠くのほうからどこかで聴いたことのあるような声が聞こえてきたのだった。

「鏡輔さん！ダークさん！」

「あ、シルバだ……」

「む、本当だな……他の二人の顔もあるということはやはり私たちだけが迷子になっていたということなのか？」

「あゝやっぱり我々二人だけが迷子だったのですか……」

鏡輔は後ろからそんなことを話している四人を見ている。鏡輔はこの歳にもなつて迷子になつてしまったのに不覚を感じ、ダークよりも沈んでいたのだった。

「あの、鏡輔さんと何かあつたんですか？」

「……いや、何もありませんでしたよ？」

「そうなの？それにしては鏡輔君かなり元気ないと思うんだけど？」

「そうですねえ、元から暗いところはありましたけど……先輩、かなり落ち込んでいますよ？」

それぞれがそんな勝手なことを言っているのだが……近くで離されているのに鏡輔の耳には届いていなかった。いや、一応届いていたのだが右から入って左に抜けていつているのだった。

「……あ、そういえば……少々、心当たりがあります。先に行つてくれませんか？謝つてきますので……」

「待つておきますよ？」

「いや、他にも用事がありますから……ちょっと、落し物をしていたことを忘れていました」

そういつて四人から離れていくとダークは鏡輔の元までやってきたのだった。

「鏡輔、すまなかつたな」

「……あ、ダーク……どうしたの？」

「どうしたも、何も……鏡輔は私がお前の携帯を落としてしまったことを怒っているのだろう？」

「・・・携帯？」

その言葉を聞いて鏡輔も携帯のことを思い出したのだった。

「ダーク！僕、携帯を探してくるよ！先に帰ってて！」

そういつてお祭り会場に走り出す鏡輔の後姿をダークも追いかけるが、なかなか追いつけなかった。

「何を言っているのだ、私がなくしてしまったのだから私が行くのが筋だ」

「にやにおう！それならどっちが先に見つけるか勝負しようじゃないか！」

「ふ、望むところだ」

意気込んだ二人は共にお祭り会場に乗り込んで左右分かれて携帯を探し始めたのだった。

「・・・といっても、僕が持っていたわけじゃないからこっちのほうに不利なのではないだろうか？」

言い出したほうの鏡輔は既に弱腰だった。どこから探しているかわからずにうろろろとしている・・・と、彼の目に・・・

「あつた！」

自分の携帯が写ったのだった。

「・・・よっしゃ、これで勝ちだ・・・」

携帯しか目にはいつていない鏡輔はそれを拾おうとして・・・

「あ・・・」

誰かの手の上に手を重ねてしまったのだった。

「すみません！」

急いで手を離れたのだが・・・携帯はそのまま上に上がっている。その携帯を追って鏡輔の視線も上に上がっていき・・・

「ふふふ、鏡輔、私の勝ちだな？」

「ダーク！？」

勝利の微笑をたたえているダークの姿があつた。

「勝てない勝負には載らないほうがいいぞ？まあ、この場合は鏡輔

が先に提案をしてきたのだがな……」

「く、くそう！」

悔しんでいる鏡輔の手に携帯が載せられる。

「……携帯、落としてすまなかったな」

「いいよ、戻ってきたんだし……それより、元気ないようだけどうかしたの？」

「……いや、私が元気がないのは鏡輔が元気がなかったからなんだがな……」

「どういうこと？」

不思議がる鏡輔にダークは答えた。

「いや、誰だって大切な人が元気がなかったりしたら自分だって元気がなくなるものじゃないのか？他人が違うとしても、私はそうなってしまうんだ」

そういつてダークは歩き出す。

「……ごめん、僕のせい？」

「そうだな、鏡輔の所為だ……一つ、約束して欲しい……」  
ダークはそういつて鏡輔の手を掴んだ。

「……幸せそうな顔をしてくれないか？私は鏡輔の幸せそうな顔を見るとうれしいんだ。悲しい、苦しいときには私に相談して欲しい……相談に乗れないようなことがあっても、私は絶対に鏡輔を幸せにしてみせる……迷惑か？」

「……いや、うれしいよ……」

鏡輔もその手を握り返す。

「……そうか、それなら……大丈夫だな。さあ、帰るとしようか？」

「そっちじゃないよ。思ったより早く見つかったからまた、二人だけでお祭りをめぐろう？」

「……そうだな……」

鏡輔とダークは手を取り合ってお祭りの喧騒の中に再び向かったのだった。

「・・・そういえば、四つ目の可能性ってなんだったの？」

「あゝあれはだな・・・」

黙りこんだダークだったが、意を決したように口開いて告げたのだった。

「・・・他の三人がわざと私のために席をはずしてくれた・・・という自己中心的な考えさ・・・」

）END（



## カオスEND：鏡輔とカオス

カオス エンド

鏡輔の目の前には金魚を何回も何回もキャッチアンドリリースをしているカオスの姿が映っていたのだった。

「……何してるの？」

「捕まえた魚は逃がしてあげるのがマナーです。つまり、キャッチアンドリリース！」

いや、正確に言うなら金魚を捕まえることが出来ないだけかもしれない。既に、彼女が持っている金魚を捕獲するべく作られたものは金魚の脱走によって使いものにならない状況になっている。

「……おじさん、今度は亀をつってみます！」

「お、じゃあよろしく頼むよ？」

どうやって釣るのか興味があつた鏡輔は黙ってカオスの隣に座った。カオスはおじさんから渡されたものを見て……

「それ、ザリガニを釣るときに使うものじゃないか！」

「え、そうなんですか？」

割り箸に糸をたらしして先のほうにはするめの切れ端がくつついている。亀のほうはどう見てもそれより小さいのでどうやって食べるのだろうか？

「おじさん、これ！間違っているって！」

「え、あゝ本当だ。そっちはザリガニ用だった……」

おじさんは頭をかいて店の裏で何かをやって……数十秒後、戻ってきた。その手に握られていたのは先ほどの釣竿に亀のえさだった。

「……これ、本当につれるのかな？」

「大丈夫 私に任せくださいよお」

嬉々としてそんなことを言うカオスだったのだが、不安が心を六十パーセントほど満たしたあたりで自分たちがどのような状況に陥

っているのか思い出す。

「そうだった！カオス、他のみんなは？」

「他のみんなですか？ああ、それはですねえ……まず、鏡輔君が一番手でいなくなつて次にシルバさんが何者かに誘導されているの  
か知りませんが見事に人ごみに飲まれました。三番手にミストちゃん  
の頭が人ごみに飲まれて手しか見えてませんでしたねえ……あ、  
ダークさんはおなかをさすつて近くの屋台に走つていきましたよ？  
私は順々にお店を回つていてこの金魚のおじさんと話していたんです。  
さすが、金魚のおじさんだけあつてご先祖は金魚だそうですよ」

「いや、それは嘘だろう……と思つた鏡輔だったのだが……」

「いや、事実そうだったとしたらそれは同属を販売してないか？」  
と考えていたのだった。

「仲間を売るなんて隅に置けませんよね」

「いや、仲間を売る人なら隅どころか牢屋に置いたほうがいい  
と思うけどね……それより、他のみんなを探そうよ？」

先ほどよりも人ごみが減つてきている今が絶好の機会だろう。そ  
う思つた鏡輔はカオスに提案したのだが……

「いえ、ちよつと待つてくださいますか？いや、舞つてくださ  
い！」

「どこで？」

「そこで好きに舞つててください！」

「待つて……」

「いえ、舞つててくださいね？」

有無を言わずひよつとこのお面を渡してカオスは自分の作業に  
没頭し始めた。どうやっても亀を手に入れないようで……。鏡輔  
はしょうがなく渡されたひよつとこのお面をつけて待つていたのだ  
った。

数分後、金魚のおじさんがくじ引きで使われるベルを鳴らす。

「やりおつた！この娘……この詐欺師から正攻法で亀をとりあげ

たでえ！」

「あらまあ、おじさんって実は鷺だったんですね？なるほど、鳥なら確かに取ってきた魚を売るということも出来ますね」

どこかずれた会話をしている二人を見ながら鏡輔は首をかしげていたのだった。

「……おかしいのは彼女なのか、僕なのか……どっちだる？」

「どうです？私は狙った獲物は叩き潰すスナイパーなんですよ？」

「何叩き潰すって？……バズーカーでも使ってるの？」

「ほら、この手に掴んでいる亀の『鏡輔君』可愛いでしょう？」  
そういつて小亀を見せる。

「……『鏡輔君』って何？」

「え、何って……名前ですよ？鏡輔君にも鏡輔って名前があるでしょう？それと同じです」

愛おしそうに亀を掴むカオスを見て首を再びかしげる鏡輔。

「……どこが僕に似てるんだろ？」

「ほら、顔なんかがそっくり……」

「……」

亀とがんつけあいをしながら

「どこがにてるんだ？」と考える鏡輔。

「ところで、鏡輔君は私に用事があったんでしよう？」

「用事も何も……迷子だよ、迷子！僕たち迷子だよ！」

「迷子……舞妓？いえ、舞子ですか？だれです、それ？」

日本語が通じているのかかなり心配になってきた鏡輔はその場で数分にわたって今の状況を事細かにカオスに話し続けた。時折、あくびをしているところを見るとカオスはこの状況を緊急事態とは思っていない。まあ、お祭りで迷子は花見に団子と同じくらいよくあることなのでそこまで緊急事態でもないが……

「とりあえず、みんなを探そう！」

「そうですねえ、それなら手を繋ぎましょう?」

「・・・・・・なんで?」

「何でも何も・・・・それで先ほどみんなは迷子になったんですよ? 失敗をしたらそれを工夫せねば人間とは先に進めません。ああ、龍は別に構わないんですけどね」

そういつて鏡輔の手を掴んでニコニコ笑うカオスに鏡輔は一つため息を吐いて歩き始めたのだった。

探し続けること、数十分・・・・

「いないね?」

「いませんねえ、皆さん、どちらで金魚をつかまえているのでしょうか?」

「そうじゃないと思うけど・・・・」

「ああ、手づかみですね?」

「いや、そうじゃなくて・・・・」

「どうしてです? シルバさんとか特にやりそうですよ? それで、ミストちゃんがさばいてダークさんが料理・・・・完璧なトライアングルじゃないですか?」

「・・・・・・」

もはや、これ以上何かを話してもカオスには勝てそうになかったのどうとう鏡輔は口をつぐんだ。ちなみに、他の三人を探しているちよつと前のときも似たようなやり取りがあつた。

てつてつてつて・・・・

「鏡輔君、携帯が鳴ってますよ?」

「成金ですか? 歩が敵陣に突っ込んで成金ですか? 携帯つて駒は知りません」

「・・・・いえ、そうじゃありません」

鏡輔のポケットに手をつ突っ込んで携帯を取り出して鏡輔に渡す。

「ああ、携帯……」

「何をばけてるんでしょう？」

誰のせいだろう？と鏡輔は思いながらも携帯の相手に話しかける。  
「もしもし……あ、シルバ？どこに……家！？てつきり家に帰ったって思ってたって！？そんな！こっちはずっとコントを……いや、ずっと探してたのに！他のみんなも家にいるって？あゝわかった、それじゃ、これから帰ってくる。うん、うん……じゃ、ばい……」

携帯をきってカオスのほうを見る。

「……家に帰ろうか？」

「何ですか？」

「シルバたち、家に帰ってるんだって……」

「そうなんですか……でも、もうちょっとだけ、手を繋いでお祭りを楽しみませんか？」

「でも……」

「お願いします。いえ、私はどのような手を使っても鏡輔君と一緒にお祭りを楽しめます」

普段とはどこか雰囲気の違いカオスに戸惑いながらも鏡輔はうなずいたのだった。

「あゝ楽しかったですねえ！」

「そうだね、既に深夜だよ……」

「ここ、どこでしょうか？」

「さあ、それはちょっとわからないなあ……」

お祭りが終わった後、彼らはそのままコンビニに行って菓子などを買い込むと近くの公園でそれらを食べたのだった。家に帰ろうとして歩き始めたのはいいのだが、カオスに頼って歩いていた鏡輔はカオスが道を適当に歩いていたことを知らなかったために自分たちがどこにいいのかわからなくなったのだった……。

「……たまには二人で……こんなことをするのもいいですよ」

ねえ？」

「そうだね、僕としては迷子にはこりこりだよ・・・とりあえず、一人じゃなくてカオスがいてくれてラッキーだったよ・・・」

「そうですか？それはよかったですよ」

皮肉がまったく通じていない様子のカオスの手を再びため息をついてしっかりと掴んで歩き出す。

「歩いていれば家に着くよね？」

「ええ、家は逃げませんからね」

「確かに・・・そうだろうけどね・・・」

とりあえず警察はどこだろうか？そんなことを考えながら鏡輔はカオスと共に歩き出したのだった。

〈END〉

## ミストEND：鏡輔とミスト

ミスト エンド

「……はあ……はあ……」

人ごみの中を緊迫した様子の鏡輔が駆け抜ける。

「あいたっ！」

「すみませんっ！」

「ちよつと、踏まないで！」

「誤解です！」

そんなことを口にしながら彼は何かから逃げていた。

「……なぜだ？誰が俺を追いかけてきているんだ？」

鏡輔は迷子になったほかの人たちを探していたのだが、どうにも途中から誰かにつけられているようだった。知り合いだろうかと思つたのだが、知り合いはゾンビのような声を出さないはずだ。

「……ここまでくれば大丈夫か？」

途中から消え去った気配のことを考えながらも息を整える。

「……ラルド君……じゃないし、ばあちゃん家の池からまた生物兵器でも生まれたのかな？」

その肩を思いつきりつかまれる。

「うわっ!!！」

鏡輔はその手を払いのけると相手の喉元に拳を叩きつけようとして……

「ミスト!？」

「せ、先輩でしたか……とりあえず、これでほっとしました」  
半なき状態のミストがその場にへなへなと座つたのだった。

「……なるほど、迷子になって不安になってたのか……」  
「……別に不安になっていたとは言つてません！大体、先輩たちが私から離れるのが悪いんですよ！」

二人で近くの階段に座って鏡輔が買ってきた（ちなみにミストもついてきた）チョコバナナと一緒にかじる。

「……ふう、本当に死ぬかと思いましたよ！普通は喉元に拳をたたき出しません」

「まあまあ、こつちもそれなりに怖い思いしてたし……さ、これ食べたら他の人たちを探しにいかうか？ミストみたいに寂しがってるかもしれないからね……」

「べ、別に寂しがっていたわけじゃないんです！先輩が不良に絡まれていないか心配だったんですよ！」

「はいはい、わかったわかった。ほら、行こう？」

ミストの手を引いて鏡輔は歩き出す。

「……わかりましたよ」

不承不承といった様子だが、ミストも階段を下りたのだった。

「うーん、みんないないね……」

「ええ、そうですね……意外と人が多いですからもしかしたらまた離れ離れになるかもしれませんね？」

言っていて不安になったのかぶるぶる震えだすミスト。

「いや、きちんと手を繋いでいるんだし、迷子にならないと思うんだけど？」

「いえ、わかりませんよ？簡単に考えているとすぐに迷子になってしまいます。戦場ではマイナス方向に考えるべきですよ？」

ミストはそういつて鏡輔に引く。

「……戦場？ここは祭り場だね？」と誰かに鏡輔は問いかけたのだった。

鏡輔ともはや離れている距離がゼロになっており、ミストはいまだに不安なのかほぼ、鏡輔に抱きついていているような状況だった。

「ミスト、引く付きすぎ」

「いえ、これでもまだ足りないくらいですよ？」

「足りない？これ以上どうするよ？」

「そうですね……」



暫し、考え込んだミストを引きずるようにして鏡輔は答えを待つ。  
「・・・私を抱っこ、もしくはおんぶするのはどうでしょうか？そうすれば迷子になる確率は減るでしょうね」

「いや、どうだろう・・・おんぶしていたミストがほら、ええと・・・泣いて重たくなるおじいさんになるかもしれないよ？僕、まだ妖怪をおんぶしたいとは思わないんだけど・・・」

「じゃ、抱っこですか？」

「抱っこも却下！」

顔を真つ赤にして叫ぶ鏡輔を見ながら

「何で、先輩は怒ってるんだろ？」とミストは考えたのだった。

「父さん!？」

「あれ？お前はまだいたのか？」

鏡輔は祭りに仲良くやってきていた輝、葵、加奈、碧にたまたまあつたのだった。そして、恐ろしい事実を耳にする。

「・・・あ、そういえばカオスたちは既に家に帰ってきてたぞ？」

「にや、にやんだって！」

「来る途中あつたんだ。そろそろ家に帰り着いてる頃じゃないか？」

「家に着いたら連絡するって・・・鏡輔の携帯に連絡がかかってくる頃じゃないかしら？」

葵がそういつたと同時に鏡輔の携帯がなりだしたのだった。

「じゃ、俺たちは祭りを楽しんでくるからな・・・早めに帰るんだぞ？」

そういつて輝たちは帰っていったのだった。そして、心配そうに見てくるミストを見たのだった。

「先輩、私たちも帰りましょう？」

「何言つてんの！文化祭もろくに僕は楽しめなかったから・・・みんなと楽しめなかったからさ・・・ミスト、悪いけど付き合ってもらうよ！」

ミストを掴んでそのまま鏡輔は走り出す。いきなり走り出した鏡

輔の隣に並ぶようにしてミストも走り出す。

「え、ど、どこに？・・・いくんですか？」

「・・・楽しいか知らないけど、僕が一番、好きな場所！そこならとりあえず落ち着けるからね」

鏡輔はそういつて先ほどよりもスピードを上げたのだった。

満月が見える丘・・・といつても、もはや山の付近なのだが、人はめったに寄り付かないような場所だった。

「・・・ここからなら月も綺麗に見れるよ？まあ、今日は満月じゃないからあんまり迫力ないけどね」

そういつて芝生の生えている場所に座る。

「・・・綺麗ですね？」

ミストはその場に立つたまま、そう呟く。

「・・・うん、そうだよ・・・ここにくるのはものすごく久しぶり・・・一年以上来てないからね」

そういつて鏡輔は再び立ち上がる。

「・・・抱っこ、してあげるよ」

「え？でも・・・もう迷子にはならないと思いますけど？」

「・・・まあね、そうだろうけど・・・あゝもうっ！」

鏡輔はミストを抱え上げ、お姫様抱っこを強行したのだった。

「・・・これで、僕が見えている景色が見えるんじゃない？」

「ふふ、大人になった・・・って奴ですか？」

「僕は大人じゃないけどね・・・さ、帰ろうか？」

「・・・そうですね、また、この場所に来ますよね？勿論、私と二人だけで・・・」

その問いに鏡輔は呟いた。

「・・・うん」

（END）

## ミストEND：鏡輔とミスト（後書き）

さて、今回で龍と書いてドラゴンと読む！は終了となってしまいました。知っている人は知っていると思いますが、鏡輔の父親の輝は以前の主人公でした。以前も似たような感じでそれぞれと終わりました。どうだったでしょうか？ちなみに、当初の予定では葵、加奈、碧のそれぞれの子供を主人公として三部作書くつもりだったのですが、それはどうかと思って葵だけの子供の物語とさせていただきました。この小説を投稿したときに第一話とシルバエンドが同じだったりしますが、それは読者の皆さんにこの小説の第一話を思い出して欲しかったからでもあります。皆さんの心に残れば幸いです。では、これからはどうするかわかりませんが、また何か思いついたらかきますのでそのときもよろしく願います。これまで呼んでくれてありがとうございます！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5235c/>

---

龍と書いてドラゴンと読む！

2010年10月8日14時24分発行